

『春はあけぼの ヒゲは助六』

10年ほどまえに一応完成、折りをみて修正の手をくわえてきました。

ヒゲなんて、なんの役にもたたないもの、だからこそかえって楽しいテーマではないか、だが、もしかすると、こういう決めつけを排したいのがヒゲの存在理由ではないか、などと悩むポーズと絶縁することもなく、ああでもない、こうでもないとききました。  
お邪魔でなければ、どうか、お読みください。

高野 澄

『春はあけぼの ヒゲは助六』  
序章

(01) ヒゲのはじまりは貧乏

清少納言は『枕草子』の書き出しのテーマを「春」ときめ、「春はあけぼの」と敷衍(ふえん)し、たったこれだけで平安文壇最高の榮譽にかがやいた。

「春はあけぼの！」

彼女の成功をうらやんで「お気に入り」のメンバーのひとりに認定してもらい、真似するのをゆるしてもらおうと計画して、この物語のタイトルを『春はあけぼのヒゲは助六』ときめた。

ぼくはヒゲを生やしている。

一九六九年(昭和44)、三十一歳の正月に私立大学の有給助手をやめて職業安定所へ行ったら、教職者は辞職することがないから失業保険のシステムに参加していない、ゆえに失業手当はナシ——遠いむかしのこと、かならずしもこのとおりの文言ではなかったかもしれない——と通告され、たちまち貧窮、理髪店にゆくカネがなくなつた。

私学共済組合というものがあり、これに加入すれば失業救済資金をうけとれるらしいと知ったのはずいぶんあとのことだが、たぶん、加入していなかったらしいから、結果はおなじだ。

四月に公団アパートの地下の理髪店で散髪、ヒゲを剃つてもらったのを最後に髪を伸ばし、ヒゲを剃らない暮らしがはじまつた。

数年後に長髪から短髪にもどしたが、ヒゲは三十一歳から七十七歳の今日まで剃らず、手入れといえばクチヒゲをととのえるだけ。髪の手ははじめは妻にととのえて

もらっていたが、パナソニックの電池シェイパーが使いやすいのを知ってからは、ずーっと自分でやっている。鏡を見ず、手先の感覚だけでジャジャーツと刈って失敗はない。

ヒゲを生やすときめたきっかけはなにか、鮮明におぼえている。理髪店に行くカネのないままに数日がすぎ、洗顔していて鏡をみたら、うっすらとヒゲが伸びている。このヒゲ、悪くないなあと思ってすぐ、そうだ、ヒゲを伸ばそうときめた。

そして何をしたかというところ、まず、念入りにヒゲを剃った。ジレットの片刃シェイパーじゃなかったかな、ホルダーに刃を入れ、柱の釘に吊るした革の研磨ベルトでシャーツ、シャーツと反転させて刃を研ぐタイプ。

ヒゲを伸ばそうときめて、まずヒゲを剃ったのはおかしいじゃないかと批判されそうだが、理由ははっきりしている、このままでは不精ヒゲを放置して伸ばすだけ、情景として美しくない。

そして、予想される「おおっ、ヒゲを伸ばすのか！」の質問にたいしては、「やることがないから、ヒゲでも伸ばそうかと・・・」なんてうそぶく心理環境をととのえた。

修士論文が一本あるだけ、学者、研究者の卵とさえいえない状況だ、文章執筆の注文なんかくるわけではないから、「やることがない」にウソはない。だから、「ヒゲでも伸ばそうか」の言いぐさは真に迫っていたはずだ。

おおげさに、しかし念入りに最後のヒゲ剃り、ジレットのシェイパーを棄て、ヒゲを伸ばして現在に至っている。

六由縁江戸桜（すけるくゆかりのえどざくら）の主人公、粹で意地っぱりなのはわかるが、稼ぎや身分が、どうなっているのか、はつきりしない。

ともかくも、いい男の見本、「由縁」は「所縁」とも書く。

助六はヒゲを綺麗さっぱりと剃り、紫の鉢巻きで登場する——そういう知識はあつたけれども、強力なライバルの意休（いきゆう）がいて、その意休が、ものすごい量というか、数というか、懸崖づくりの菊みたいに胸まで垂れるヒゲを生やして重い存在を誇るのには知らなかった。助六ひとりが写っている舞台写真かなにかをみただけだったからだ。

三十歳をすこしすぎたころから歌舞伎を観るようになり、ヒゲもじゃもじゃの意休と、ヒゲ剃りあとも綺麗さっぱり助六とのやりとりを観てから、ヒゲに関心が集中するようになった。ぼく自身がヒゲを生やしてまもなくだったゆかりもある。

ヒゲなし、まっしろ、つるつる顔の助六と、十人百分人分のもじゃもじゃヒゲの意休との意地の張り合い——こりゃ、なにかある、なにもないわけがない、のおもいこみが熱して、とうとう、ヒゲばなしを書くことになった。

（02）助六じつは曾我五郎

ヒゲだけがテーマでは単純すぎ、奥行きがなくておもしろくないと、わかっていた。

助六じつは曾我五郎、行方不明の聖剣（せいけん）を探すために優男（やさおとこ）に身をやつして助六と名のり、吉原で遊びほうける——そういう設定を知って前後左右、上にも下にも展望がひろがった。助六のヒゲ剃

りは、鎌倉時代の武士の正体を隠して江戸の町人に化ける変装なのだ。

(03) 聖剣をめぐるドラマ

五郎と十郎——曾我兄弟の生涯は仇討ちの生涯だ。

仇討ちといえば三大仇討ち、ランキングの数え歌までできている。

「一に富士、二に鷹の羽のぶっ違い、三で上野の花と咲く」

源頼朝が富士の裾野でおこなった巻狩の混雑にまぎれて、曾我兄弟は父の仇敵の工藤祐経（くどうすけつね）を討った。これが最高の仇討ちと判定されて、「一に富士」、赤穂藩浅野家の家紋は「違い鷹の羽」、赤穂浪士が吉良上野を討ったのが「二に鷹の羽のぶっ違い」。

渡辺数馬が荒木又右衛門のちからを借りて父の仇敵河合又五郎を討ったのは伊賀の上野だから「三で上野の花と咲く」。

曾我兄弟は工藤祐経の命を奪うことだけに生涯の大半を費やし、ようやく仇を討ったのはめでたいが、十郎は斬り死に、五郎は將軍頼朝の陣営に走りこんで逮捕され、処刑されてしまう。なんとも哀れな生涯だ。

仇討ちにはじまり、仇討ちでおわる曾我兄弟の生涯だが、文学や演劇で語られる兄弟の生涯は聖剣をめぐる長大なドラマの演技者の生涯としてつくられている。

聖剣をさがすドラマの結末が仇討ちだ。聖剣ドラマと仇討ち、二筋の宿命と奮闘する兄弟の生涯だ。

(04) 王者の剣、民の剣

王者が所有し、正義を褒賞し邪悪を懲らしめる聖なるちからがあるとされる剣、それを聖剣とよぶ。

王者でないものが「われはいま聖剣を持つてるぞ！」とさげんでも、それは邪剣でしかないわけだが、邪剣はつねに聖剣よりも多数であり、したがって世にあらわれる頻度も邪剣が多いから、「王者と聖剣」の組合せより「臣下または民と邪剣」の組合せのほうが圧倒的に多い。「王者と聖剣」は「つねに一」であるのにたいし、「臣下または民と邪剣」は「つねに一以上、ほとんど無限」なのだから。

幸か不幸か——というのが適切かどうかかわらないけれども——正義の王者も墮落や疲弊を避けられない。王者が王者でなくなる無数の実例が知られ、この事実は偶然ではなくて原理にちかい。

もともとは王者でない臣下や民のひとりが王者になる可能性は高く、実例をあげるに困ることはない。

王者が王者でなくなるときには聖剣を手放し、民が王者になるときに聖剣——正しくは疑似聖剣——を手にする。

わかりきったルール、しきたり、これが厳守されさえすれば問題はないが、厳守されたことは、ゼロではないにしても、希少例外であった。

剣がありふれた器物であること、ここに悲惨な状況の原因がある。

臣下または民ひとりに剣一本というほど多数の割り当てではないにしても、剣はどこにでもあるから、王者になるうとした臣下または民がそこらへんにころがっている剣を手にし、

「われは王者なり！」

さげんで王者への途がひらけなくてもなかった。

このとき、なんでもないふつうの剣が邪剣レベルを経て聖剣に昇格する。

王者はあくまでも 王者であろうとして ライバルと戦い、ライバルは 次の王座を狙って 王者と戦う。

戦いの勝者がつぎの王者の地位を確保するのがふつう、自然でもあるが、敗者は敗北をみとめず、勝者を装うのがふつうだからややっこしい。

——われは王者だ。王者であるしるしに聖剣を持っておるぞ！

ふたりが同時にさげんで、まず第一の厄介な事態になり、ふたりがさげぶならおれも、というわけで第三者がさげび、四人目も、というわけで、あとはもう、手のつけられない混乱。

現代は混乱の真つ最中なのである。

何年前から、なんていえないほど、はるかなむかしからつづく混乱のなかに、われらは生きている。

(05) 聖剣は王者のしるし

あなた自身の胸をぼんぼんとたたいてみれば納得がいくように、みんながみんな王者になれるわけではない、かぎられている。

かぎられているなか、聖剣にあこがれ、王者になりたい渴望と絶縁できないのは武家であった。

武家の身边には剣がいくらでもあるから、

——これを聖剣に祭り上げれば、おれは王者だ。やってみるかなあ。失敗しても、もともとなんだから。

ふらふらと、その気になる、聖剣イメージに誘惑されやすい環境。

(06) 皇室は聖剣 多田源氏は宝刀

聖剣を意識し、あこがれる血は平氏よりも源氏の歴史のなかに濃厚だ。

意識して聖剣をつくったのは多田源氏の祖の源(多田)満仲(みつなか)だ。

満仲の頭は皇室の三種の神器のひとつ、天叢雲剣にたいする尊敬と渴望で満ちていた。

満仲は武家である。

正五位下に叙せられ、常陸介や摂津守、居貞親王(おきさだしんのう・のちの三条天皇)の東宮権大進に任じられたからいちおうは王臣なのはまちがいないが、あえていえば王臣の末端、軍事王臣とか武家王臣といわれても文句はいえない哀しい境遇だ。

その満仲が、まさか皇室の、つまり本物の聖剣の天叢雲剣(あまのむらぐものつるぎ)と同等同格の剣をもつのは不可能だから、次善の策として多田源氏のなかでだけ聖剣として通用する、いつてみれば疑似聖剣をつくり、多田源氏の宝刀として子々孫々につたえた。

多田源氏の本意としては疑似聖剣をずばり聖剣と呼びたいが、皇室にたいする遠慮の姿勢をみせなければならなくていから、一歩さがって 宝刀 と呼んだ。

この宝刀が流れながれて曾我兄弟の手にゆだねられ、めでたく工藤祐経の命を奪う。

源氏の宝刀は曾我兄弟から満仲の末裔の源頼朝に返還され、その後、いきさつははっきりしないけれども、行方不明となり、搜索する義務を負わせられたのが曾我五郎、武士の正体を隠すためにヒゲを剃り落として町人の助六に化ける。

#### (07) 聖剣登場のドラマ

皇室の聖剣の天叢雲剣——聖剣は皇室だけのもだから「皇室の」をかぶせるのは余計だが——はどのようにして登場したか？



むかしむかし、大蛇のヤマタノオロチが出雲の民を苦しめていた。

出雲を通りかかったスサノオノミコトがヤマタノオロチを退治し、十拳剣（とつかのつるぎ）でオロチの尾を切り裂いたら、中から剣で出てきた。これがスサノオの姉のアマテラスオオミカミに献上されて皇室の聖剣の天叢雲剣となる。

オロチの尾を切り裂いた十拳剣は聖剣にはならなかったが、天叢雲剣の父母のようなものだとかんがえればいい。

スサノオが十拳剣をもって出雲にあらわれたのはなぜかというと、姉のアマテラスオオミカミに乱暴して処罰されたからだ。

スサノオは贖罪として十拳剣で自分のヒゲを剃らされ、高天ヶ原を追放されて出雲にあらわれた。

最初に剃られたヒゲはスサノオのヒゲである。

最初にヒゲを剃った刃物は十拳剣である。

自分で自分のヒゲを剃った最初はスサノオである。

曾我五郎や助六、現代のすべてのヒゲ剃り男にとってスサノオがなにやら懐かしくおもわれるのはこのいきさつがあるからだ。

（08）スサノオはなぜ十拳剣を持っていたか？

拳を十個ならべたぐらいの長さの剣だから十拳剣の名がついた、格別な意味はない。

重くて長くて、あつかいにくい十拳剣でヒゲを剃るのはむずかしかつたろうが、ともかくもスサノオは十拳剣を使って自分で自分のヒゲを剃らされ、高天ヶ原から追放された。

好きこのんでヒゲを剃ったのではない。「ヒゲを剃れ」

との判決がくだったから、嫌も応もなくヒゲを剃って高天ヶ原から出ていった。

こんなことを、大声でいうひとは少ないだろうが、『古事記』にはそう書いてある。『古事記』を読んだひとならだれでも知っている、珍しくもななんともない。

だが、「出雲にあらわれたスサノオが十拳剣をもっていたのはなぜか？」と問うのは珍しいはずだ。こういうことは『古事記』にも『日本書紀』にも書かれてはいない。

「なぜか？」と自問し、「これぞ正解！」といえる自信を得たのは、たぶん、ぼくが最初のはずだ。

スサノオは、なぜ、十拳剣をもって出雲にあらわれたのか、それをゆっくり説明すれば一冊の書物ができあがる。

天叢雲剣の父であり、母でもある十拳剣は奈良の天理の石上（いそのかみ）神宮に奉納されたとする説があるが、石上神宮としては「なおすこぶる<sup>ぶ</sup>研究を要するので、いま遽か（にわか）に考察を廻すべき限りではない」としている（石上神宮『石上神宮宝物誌』）。

（09）スサノオから始まる

助六以前に曾我五郎がいる。

五郎以前に源頼朝や源満仲がいて、そのまた前にスサノオノミコトがいる。

すべてのはじまりはスサノオだ。

スサノオがもっていた十拳剣は聖剣にはならず、「剃刀」"razor" "shaver" というものに姿と名を変えて現代に生きている。

毎朝、あるいは二日に一回、ヒゲを剃るのを習慣にしているひとは、意識する、しないにかかわらず、スサノ

オの真似をしている。ヒゲ剃りスサノオの後継者だ。

スサノオと現代ヒゲ剃り人種との相違があるとすれば、刑に服する行為としていやいやながら剃るのか、世の趨勢にしたがって、あるいは好きで剃るのか、そのちがいだ。

あるとき、ふつと、

——おれは、なぜ、毎朝々々、こんな手間のかかる作業をしなければならんだ？

疑問を感じるなら、そのひとはすこしずつスサノオにちかづいている。つまり、ヒゲが生える男であるのを宿命としてうけとる勇氣。

(10) アレか、コレか

ヤマタノオロチの尾から天叢雲剣を引き出したあと、スサノオは「アレか、コレか」の二者択一を迫られた。

アレ——この剣をふりかざし、「われは王者なり。証拠はこの聖剣じゃ！」と宣言し、王者として即位する。 — 1 1 —

コレ——王者にはならぬことを決意し、天叢雲剣は姉のアマテラスオオミカミに献上して、死ぬまで十拳剣でヒゲを剃ると決意する。

スサノオはコレを選択した。

王者にならぬ決意をしたが、スサノオは人間であり、人間とは弱者である。

いつなるとき決意がくずれ、王者になりたい誘惑に負けぬともかぎらない。

誘惑に負けぬための精神のつかい棒、それが十拳剣を使つての毎朝のヒゲ剃りだ。

スサノオの決意は、ほかならぬ十拳剣によつて、ここからなる共感と称賛を得た。

高天ヶ原でスサノオのヒゲを剃って以来ずーっとスサ

ノオのヒゲ剃り専用の刃物であったことに、十拳剣は大切に満足していた。

聖剣などに昇格させられ、人間統治の道具にされることを免れたのを、なによりもの悦びとするのが十拳剣なのだ。

——わたしや、聖剣なんかにはなりたくない。スサノオよ、未来永劫（みらいえいごう）、あなたのヒゲ剃り専用の剃刀でありたい！

人間の世からヒゲが無くなると仮定して、いちばん当惑するのは十拳剣、剃刀である。たったひとつの役割が無くなってしまいうけだから、絶望し、精神に迷いが生じて、

——おれは無用の長物。こんなことなら、いつそのこと

聖剣昇格の坂道をのぼりだすかもしれない。

そうなったら、世も末。

十拳剣も剃刀も存在せず、聖剣だらけの世は、われらが長く甘い刻（とき）をすごすべき世ではない。

（11）聖剣は発見された

ヒゲと剃刀の関係に、ながいあいだ変化はなかった。

聖剣の行方が知れないから、助六はヒゲを綺麗さっぱりと剃ってつるつる顔になり、歌舞伎の舞台上で聖剣さがしの旅をつづなければならなかった。

だが、それも、永遠のことではない。捜し物がいつまでもみつからないはずはない。

助六はめでたく聖剣を発見し、おさまるべき場に剣をおさめて聖なる義務を完了する。

剣がおさまるべき場は、たぶん、伊豆の箱根神社だ。

助六はつるつる顔の町人の変装をやめて、ヒゲを生や

し、クラシックな武士の姿にもどるはずだ。

やがてあらわれる助六のもじやもじやヒゲを歓迎する  
こころをこめて、この物語のタイトルを『ヒゲは助六』  
ときめた。

ヒゲもじやもじやになった助六は驚嘆、当惑するはず  
だ。武士という武士がそろいもそろってヒゲを剃ってい  
る状況を目の当たりにして、孤立と疎外を感じないはず  
がない。

(12) ヒゲ・曖昧な存在

ヒゲばなしを書く準備、それは、ヒゲが登場しそうだ  
などおおざっぱな見当がつく資料を、かたっぱしから読  
むこと。

そのうちに、実在のヒゲなのか、フィクションのヒゲ  
なのか、区別がつかない心境に到達する。

実在のヒゲに意味があるならば、フィクションのヒゲ  
に価値はないのだろうか、なんていう原則論はふつとぶ。  
— 1 3 —

ヒゲそのものがどうにも手に負えぬ曖昧な存在である  
ということ、だから実在と非・実在の区別も曖昧なのだ  
ということ、ふたつの原理が同時に理解される。

(序章・終)

『ヒゲは助六』

第1章「スサノオノミコトのヒゲ」

(01) なんの役にも立たないけれど……

ヒゲばなしにつきあっていたいただきますが、そのまえに

なんの役にも立たぬ、という言い方、この言い方がそもそもなんの役にも立たないのであり、なんの役にも立たぬものの典型がヒゲだ。

ヒゲとともに四十六年のわたしがそうおもい、そういうのだから、信用していただいてまちがいはない。

ヒゲはなんの役にも立たないが、ならば、ヒゲについてかんがえ、語ったり書いたりするのがまったくの無価値なのかというと、これは反対に、おおいにおもしろい。おおいにおもしろいから、たつぷりと価値がある。

(02) 占いの争いに勝ったのに……

記録に最初に登場するヒゲはスサノオノミコト(須佐之男命)のヒゲである。

『古事記』によると、イザナギノミコト(伊邪那命)には三人の子があった。

イザナギは長子のアマテラスオオミカミ(天照大神)に高天ヶ原(たかまがはら)をあたえ、統治させた。

次子のツクヨミノミコト(月読命)には夜の食国(おすくに)を、三子のスサノオには海原(うなばら)をあたえ、それぞれ統治させた。

だが、スサノオは海原を統治せず、はげしく泣き叫ぶばかりであった。

スサノオの号泣のはげしさは「胸の先まで伸びた八拳(やつか)のヒゲのほど」であったというのだが、号泣

のはげしさをヒゲの長さで換算するのは、どういう感覚によるのかな？。

このころはヒゲを剃る、切る、抜く習慣はなく、男はみんなヒゲを生やしていた。ヒゲが生えない体質の男はべつにして。

それなのにスサノオのヒゲの長さが強調されるのは、このすぐあとに、スサノオが自分のヒゲを自分で剃られる衝撃の場面が待っているからだ。

史上最初のヒゲ剃りの印象をより強烈にする伏線としてスサノオのヒゲの長さが強調されたようだ。

「おまえはなぜ泣くのか？」

イザナギの問いに、スサノオがこたえる。

「わたくしは母の国の根堅州国（ねのかたすくに）にゆきたいのです。しかし、海原の統治を命じられたために根堅州国にゆけない。それが悲しくて泣いているのです」

イザナギは怒り、スサノオを追放すると決した。

スサノオは、イザナギによって科せられた追放処分に承服できない。「アマテラスに事情をきいていただく」といい、高天ヶ原にのぼってゆく。

そうと知ったアマテラスは、スサノオが高天ヶ原に災害をもたらそうとしてのぼってくるのではないかと疑い、防備を嚴重にかためて待ちうけた。

「スサノオよ。おまえが高天ヶ原にのぼってきた目的はなにか？」

「邪心はありません。母の国にゆきたいとおもうのに、ゆけず、悲しくて泣いてばかりいたわたくしをイザナギは追放なさろうとしたのです」

「おまえに邪心のないことを、どのようにして証明するのか？」

「あなたと誓約（うけい）の占いをして、勝ちます。そ

れが邪心のないことの証明です」

スサノオは邪心をもたぬことを誓約し、アマテラスと占いの争いをする。

スサノオが占いに勝てば、スサノオは邪心をもたぬことが証明される。アマテラスが勝てばスサノオには邪心があつたと判定され、罰を受ける。

占いの争いに勝ったのはスサノオである。

スサノオは勝ちほこったあまりに、乱暴な行為をくりかえした。アマテラスの田の溝を破壊し、新穀を食べて祝う舎にクソをまきちらした。

スサノオに乱暴されたアマテラスは怒り、天の岩屋戸をひらいて、なかに隠れ、閉じこもったので、高天ヶ原の光はうしなわれて暗黒になった。

神々はあれこれと誘惑の策を弄してアマテラスに出てきてもらおうとするが、アマテラスは誘いにのらない。

アメノウズメノミコト（天宇受売命）が肌もあらわに、<sup>6</sup>1  
エロチックな踊りを踊ると高天ヶ原はどよめき、揺れ、  
神々はいつせいに笑い声をあげた。

賑やかな騒ぎの様子をみようとして、アマテラスが天の岩屋戸をすこしひらいたとき、まぢかまえた大力のタジカラオノミコト（手力男神）がアマテラスの手をとって引き出したので、高天ヶ原に光がもどった。

神々は協議し、スサノオに贖罪させたいので、自分のヒゲを剃らせ、手足の爪を抜いて、追放した。

こういうわけでスサノオはヒゲ剃り第一号の男になった。

（03）剃刀の祖は十拳剣

スサノオが自分で自分のヒゲを剃った道具、刃物、それがなんであったのか、『古事記』にも『日本書紀』に



も記されていないから推測しなければならない。

高天ヶ原で誓約の占いをしたとき、スサノオは自分の十拳剣をアマテラスに渡した。降伏の意志表示、武装解除の意味もあるようだ、ともかくもスサノオはこの時点で十拳剣を手放してしまった。

十拳剣とは拳を横に十個ならべたほどの長さの剣、普通名詞である。

神代のはなしに剣が出てくると神秘的なちからをもつ聖剣が連想されるけれども、この十拳剣は格別な剣ではなく、長さが十拳というだけの、ありふれた普通の剣である。

誓約の占いをしてアマテラスに勝ったあとしばらく、スサノオはどのような剣も所持していなかった。

勝ち誇ったあまりに乱暴をはたらいてアマテラスに損害をあたえたが、剣を揮ったのではなく、素手で乱暴したとおもわれる。

神々がスサノオに、自分で自分のヒゲを剃らせて贖罪させる判決をくだしたとき、スサノオは剣はもちろん、どのような刃物ももっていなかった。

剣か、しかるべき刃物をあたえられなければ、スサノオは自分で自分のヒゲを剃ることはできない。

スサノオは神々の判決に服してヒゲを剃る気になつたらしいが、「自分で自分のヒゲを剃れ」と宣告されたのだから、それなりの刃物、道具がスサノオにあたえられなければならない。

「われに、剣をもたせていただきたい」

スサノオが願ったのは当然である。判決に服して自分で自分のヒゲを剃る気になつてはいるけれども、しかるべき刃物をもたされなければヒゲは剃れない。

神々は躊躇したはずだ。

スサノオは乱暴者である、剣をもたせると、それを揮つて再度の破壊行為に走るおそれがある。スサノオに剣をもたせるわけにはいかない、だめだ。

高天ヶ原は凝固した。

スサノオに有罪の判決をくだし、スサノオが判決に承服すると意志表示したにもかかわらず、ここから先に事態が動かない。どうするか、どうなるかと暫時の困惑のあと、神々のなかでも格別に智慧ある神が名案を發した。「誓約の争いのまえにスサノオがアマテラスにわたした十拳劍、あれなら危険はないとおもわれます。あれはいわば、持ち主のスサノオによって見捨てられたも同然の劍です。ヒゲを剃るぐらいしか役にはたたぬ駄劍ですから……」

十拳劍は駄劍のなかの駄劍である、乱暴者のスサノオが邪劍として揮つたところで木ッ葉一枚も叩き落とせるわけではないと神々一同が納得し、十拳劍がスサノオにわたされた結果、高天ヶ原の法廷の判決は執行された。

スサノオは、もともとは自分が所有していた十拳劍を使つて、自分で自分のヒゲを剃つたのである。

(04) ヒゲ再生の生理

ヒゲを切つたスサノオが高天ヶ原を出たのは二日か三日あとだったと推測される。つぎの日かもしれないが、ともかくも、ヒゲを剃つたその日ではありえない。

二日か三日あとだと推測せざるをえない理由は、すぐにわかる。

スサノオが、しょんぼりと気落ちした様子で高天ヶ原を出てゆくのを看視する神々のあいだに、どよめきが起こり、どよめきは驚愕にかわつた。

「おかしいな。スサノオのヒゲは剃らせたはずなのに、

ご覧なさい、アゴのあたりにうつすらとみえる黒いもの、あれはヒゲではありませんか」

「たしかに、あれはヒゲですよ。アゴだけじゃない、ホホにまでヒゲが……」

「ああっ、クチの上にも！」

ヒゲを剃ってもすぐに生えてくる再生の生理を、高天ケ原の神々は知らなかった。高天ケ原にはヒゲを剃った前例がないんだから。

これが歴史の偶然というものだ。

ヒゲを剃らせたその日にスサノオを追放していたなら、高天ケ原の神々はヒゲ再生の生理を知らぬままで現在にいたっているはずだ。

さて、スサノオのヒゲが伸びてきた。

神々はなんとか手を打たねばならない、スサノオのヒゲが伸びないように。

それが不可能なら、スサノオが出雲国に姿をあらわすとき、ヒゲは元通りの、もじゃもじゃ、ふさふさになっている。

高天ケ原で厳罰に処された男だなんて、だれも信じない。高天ケ原の神々の法廷の権威はゼロになってしまう。そしてまた、スサノオの末裔のわれら男性は、いまになってもまだヒゲ剃りの習慣というか、しきたりというか、それに染まっていないはずだ。

ヒゲ剃りなんかやらなくても暮らしに支障はないが、シツクとかジレット、フェザー、貝印といったrazorやshaver業者は存在できない。電気シェイパーをつくっている家電メーカーは倒産の恐怖。

(05) 十拳剣はヒゲ剃り専用の下等な剣

スサノオの追放刑を取り消す手がないではないが、判

決取消を一度でもやってしまったそのあとは、高天ヶ原の神々の法廷の権威維持が困難になってしまう。つまり、できない相談。

「どうする、どうする——神々が額を寄せて協議しているうちに、こういう案がうまれてきた。」

「スサノオに十拳剣をもたせ、毎朝ヒゲを剃ることを附帯刑罰とする——これはいかがでしょうか。」

「あなたは、スサノオが乱暴行為をはたらいたのを咎められ、追放刑をうけた事実を目をつむっている。ナントカに刃物というでしょう。スサノオに剣をもたせれば、ふたたび乱暴するかもしれない。危険千万ですよ。」

「危険は否定できないが、かといって、われら神々がひとたび決した追放刑を取り消すのも賢明とはいえますまい。」

「そのとおり。高天ヶ原の法廷の尊厳を、われらみずから打ち崩すわけですから。」

「いやいや、ご心配なく。十拳剣は、いまや危険な性能を失っています。スサノオに自分で自分のヒゲを剃らせるときから、十拳剣はいわば、ヒゲ剃り専用というか、ヒゲ剃りしかできない下等な剣であることで満足しているのです。『おまえは永久にヒゲ剃り専用の剣であるぞよ』と告げてやれば、むしろ喜ぶでしょう。」

最後に発言した神の見解が支持され、高天ヶ原から出てゆくスサノオに、神々は附帯処罰を宣告した。

「スサノオよ、おまえに、この十拳剣をあたえる。ヒゲが伸びたら……つまり毎日だな……十拳剣で自分で剃るのだぞ。ヒゲを剃らず、ヒゲを伸ばして、『わたくしは有罪宣告をうけてはおりませぬ』などと偽っても、われら神々の目はごまかせぬぞ。」

十拳剣でヒゲを剃るのは困難な作業だろうと想像され

るが、慣れてくればなんとかなるだろう。

「一日に一回、忙しいときでも二日に一回ぐらいの割合で十拳剣でヒゲを剃り、受刑者であることを隠さぬことを誓約いたします」

スサノオはこのように誓って高天ヶ原を出て、出雲国にちかづいてゆく。

人生の持ち時間のうち、ヒゲ剃り作業に一定の時間を費やすことになった最初の人間がスサノオだ。

一度のヒゲ剃りの時間は長くはないにしても、ゼロではない。

ヒゲ剃り作業で消費される時間について、一九九七年にイギリスでおこなわれた調査がある。

西洋の男性は平均して毎日顔の毛を剃るのに一〇分かけている。一八歳に始めて七〇歳までつづけるとすると、この日々の行為に一生で三一六三時間を費やすことになる。およそ一三二日間、昼夜を通してひげを剃りつづける計算だ(マルタン・モネステイエ『図説 毛全書』大塚宏子訳 原書房)

(06) 芥川龍之介

さて、ここでとつぜん、大正時代の有名な小説家の芥川龍之介が出てくる。

なぜ芥川が出てくるのかというと、スサノオを主人公とする『素盞鳴尊』のなかでスサノオのヒゲ剃りを描写しているからだ。

彼等はそこで死刑の代わりに、彼を追放に處する事にした。しかしこの儘、彼の縄を解いて、彼に廣い國外の自由の天地を與へるのは、到底彼等の忍び

難い、寛大に過ぎた處置であつた。彼等はまづ彼の鬚（ひげ・あごひげ）を、一本残らずむしり取つた。それから彼の手足の爪を、まるで貝でも剥がすやうに、未練未釋なく抜いてしまった。

天ヶ原から追われたスサノオは、二日後（推定）に出雲国へ姿をあらわすが、彼が受刑者であるのはヒゲがないこと以示されている。刃物で剃つたのではなく、むりやりむしり取つたのだから、つるつる、なめらかではない、傷だらけ、血だらけの顔で出雲国に出現する。

芥川龍之介はヒゲ、あるいは、ヒゲを剃つた自分自身のつるつる顔に執着していた。

肖像写真を撮るときの芥川龍之介の得意のポーズ、それは、ヒゲのない、つるつるのアゴの下に左右どちらからの拳を当て、カメラにむかい、「これぞ深刻、幽遠」の思い入れたつぷりの表情をつくる。

河出書房発行の雑誌「文藝」の臨時増刊「芥川龍之介読本」（昭和廿九年十二月）の表紙はかれの顔の写真で全面を飾っている。左手の親指を唇の左、のこり四本の指でアゴを包むようにして、凝視している。背景は洋室の暖炉のようだ。

もう一枚は岩波書店刊行の新書版全集の第七巻（昭和三十年二月）の口絵写真、これは「文藝」とは反対に右手の拳をアゴの下に当てて、洋室の暖炉の横のソファにすわっている。二枚とも得意のポーズ。

——ヒゲのないアゴに拳なんか当てて、どうする気なんだ。なんの意味もないじゃないか！

ヒゲ男の百人のうち、九十五人ぐらいまでは、こういつて批判するはずだ。

アゴにヒゲが生えていればこそ手や拳を当てる意味も

効果もある、ヒゲのない顔なんか撫でて、なんにもならないぞ、と。

だが、芥川には、自分がいま、ヒゲのないアゴに拳を当てているという意識はなかったのだとおもう。

かれの意識は、ヒゲをむしり取られてつるつるのスサノオのアゴやホホを撫でている。

手先に感じているのはスサノオのヒゲの不在であって、実在ではない。スサノオのヒゲ喪失感に同調しきっている、そうともいえる。

ヒゲが生えない体質の男子は珍しくない。

芥川龍之介がどうであったか、わからないけれども、もし、ヒゲが生える体質であったならば、毎朝ヒゲを剃ることに疑問を感じながらも、世のしきたりに嫌々ながら従ってヒゲを剃らずにはいられない自分の弱さ、または曖昧さに責められていたのだとおもう。

かれの親友で小説家の久米正雄は、たしかヒゲを生やしていたようだし、「先生」と呼んで尊敬した夏目漱石にはもちろんヒゲ——クチヒゲがあった。クチヒゲは髭、アゴヒゲは鬚、ホホヒゲは髯と書いて区別するのが漢字文化圏のしきたりである、念の為に。

(07) 武士とヒゲの組合せ

スサノオは出雲国をめざす。前途に出雲があるとは知らなかったかもしれないから、出雲にちかづいている、というのが適切だろうか。

かれは十拳剣を持たされている。

出雲へ接近しつつある時点において十拳剣の役割として規定されているのは毎朝のスサノオのヒゲ剃りだけだから、十拳剣は実質的には剃刀だ。

剃刀としては長すぎ、重すぎ、使い勝手は最悪だが、

それでもこれは剃刀のほかの何物でもない。日本人がはじめて使う剃刀であり、ほかに剃刀はないのだから、良いも悪いも、選択の余地はない。商品名はズバリTOT UKA RAZOR。

宿命の日——スサノオがアシナツチ（足名椎）とテナツチ（手名椎）の夫婦と娘のクシナタヒメ（櫛名田日売）と出会う日——の朝もスサノオは昨日とおなじく十拳剣でヒゲを剃り、

——さて、今日一日のおれの冒険はどういう筋書きになっているんだろうか。まえもって知っているほうがいようでもあるが、なにも知らぬまま、ただ前進あるのみ、これも悪くはない。

つるつるのヒゲ剃り跡を撫でながら出雲の太陽の下に出てゆく姿は、二十一世紀の日本の成年男子の大多数にくらべて、なにひとつ変わったところはない。電気シェーイバーでヒゲを剃って仕事に出てゆく——変わりはない。神代のはなしにはかぞえきれないほど多数の男子が登場するが、一番人気といえばスサノオだ。

ヤマトタケルノミコト（倭建命）も人気は高いが、手足の爪の先まで正義の権威が詰まっているようなひとだから、面白みに欠ける。

泣いたり笑ったり、勝ち誇ったかとおもうと一転して悄気（しよげ）てしまうスサノオには親しみがもてる。スサノオにたいして最も強い親近感をもったのが中世の武士であること、これもスサノオ人気の大きな柱だ。

武士の自意識、それを一言でいうならば太刀や剣とヒゲの組合せを決定的なものとして意識するところにある。太刀をもてばヒゲをおもい、ヒゲを意識すると太刀をおもわずにはいられない、その想念が中世の武士を武士としていた最強のものだ。



太刀や剣とヒゲの組合せの最古のかたち、それがスサノオなのだ。

(08) 天叢雲劍

十拳劍でヒゲを剃りながら、スサノオは出雲国にやってきた。

父と母、そして娘の三人が泣いているのに出会い、なぜ泣くのかと問うた。

「わたくしどもは八人の娘をそだてましたが、ヤマタノオロチが毎年やってきて、七人の娘をひとりずつ取って食いました。今年もオロチがやってくる季節となりました。たったひとりのこった娘のクシナダが食われてしまふとおもうと、恐ろしく悲しく……」

スサノオはクシナダを妻にむかえ、酒好きだときいたオロチを酔わせて退治しようと、酒をつくってオロチを待った。

オロチはやってきた。

オロチはスサノオが勧めた酒を呑み、酔って寝た。

スサノオは十拳劍を揮ってオロチを切り殺した。

オロチの尾を刺したとき、十拳劍の刃先がなにか堅いものにあたって、欠けた。不審におもったスサノオが尾を切り裂いたところ、一本の剣が出てきた。

スサノオはオロチの尾から出てきた剣を高天ヶ原に送り、アマテラスに献上した。

この剣はアマテラスによって天叢雲劍と名づけられた。オロチのいる上空には雲気が湧くので天叢雲劍と名づけられたそうだ。

(09) 草薙劍

アマテラスはすでに八咫鏡（やたのかがみ）と八咫瓊

勾玉（やさかにのまがたま）を持っている。天叢雲剣をあわせた三品がアマテラスの孫のニギノミコト（瓊瓊杵尊）に授けられた。

ニギは三品を携えて高天ヶ原から日向の高千穂（たちほ）に天下（あまくだ）り、地上の政府をつくった。鏡・玉・剣の三品が皇室の権威を象徴する三種の神器として秘蔵される。

第十代の崇神天皇のときに三種神器は大和の笠縫邑（かさぬいむら）にうつされ、第十一代の垂仁天皇のときに伊勢の五十鈴川のほとりにうつされ、ここに伊勢神宮が創建される。

第十二代の景行天皇の皇子のひとり、ヤマトタケルは東国征伐に出かけるまえに、伊勢神宮の斎宮である叔母のヤマトヒメノミコト（倭姫命）に会いにゆき、ヤマトヒメから天叢雲剣と袋をあたえられた。

ヤマトタケルは相模（『日本書紀』では駿河）の焼津（やいづ）で敵の火攻めに苦しめられたが、ヤマトヒメからあたえられた天叢雲剣で草を薙（なぎ）ぎ払い、袋から出した火打石で草に火をつけて逆に敵を火攻めにして勝利をおさめた。

ヤマトタケルの危機脱出のドラマにちなみ、天叢雲剣には草薙剣（くさなぎのつるぎ）の別名がついた。

東国戦線で勝利をおさめたヤマトタケルは帰途、尾張に滞在し、ミヤスヒメ（宮簀媛）を愛人とした。

尾張から伊吹山の悪神を退治に出ていったが、草薙剣をミヤスヒメのもとに置いたままの油断が災いとなり、戦死してしまう。

草薙剣は尾張の熱田神宮に安置されて現在にいたる、という次第なのだが、それならば源平合戦のときに草薙剣が長門の壇の浦に沈んだといわれるのは、どうい

けなのか、の疑問が出る。『吾妻鏡』によると、鏡と玉は回収されたが、剣だけはついに発見できなかったのだ。壇の浦に沈んだ草薙剣が熱田神宮にあるのはおかしいではないか、という疑問だ。

さまざまの解釈が出されてきた。皇室の神器は伊勢の鏡、熱田の剣の模造ではないかという解釈が有力であったが、剣については模造説よりは別物説のほうが説得力があるようだ（岡田精司氏による）。

皇室には草薙剣が秘蔵されていた。それとは別に、ヤマトヒメからヤマトタケルにあたえられた剣に草薙剣の名がついた。草薙剣という名の剣が二本になったのだ。

草薙剣が二本ある——そんなことがあっていいわけがない！

三種神器を神聖視するあまりに、草薙剣の名の剣は一本でなければならぬという息苦しい状況に、われわれは、自分で自分を追いこんでしまったのではないか。

— 27 —

——おばさま、ぼくは東国の敵を退治しにゆきます。

——いいねえ、若いひとは勇気があって。この剣を饒別にあげましょう。

——ありがとうございます、おばさま。この剣、名前はなんとしましょうか。

——皇族であるわたしが、おなじ皇族の甥にプレゼントするのだから、最高に立派な名前、つまり草薙剣、このほかの名はありえませんかよ。

——こういう雰囲気だったのではないか。

手違いがあつて二本の剣におなじ名がついてしまったとはかんがえず、皇室の権威を背負う剣にはすべて草薙剣の名をつけるべきなんだ——こういうふうにかんがえるほうが合理的だ。

(10) 十拳剣ならヒゲは剃れる

十拳剣のはなしから草薙剣に移ったのはいいとして、十拳剣を忘れてしまったのじゃないかと疑問をおもちの方がいらつしやるでしょう。

忘れてはいません。これから、スサノオと十拳剣にとりくみます。

スサノオが十拳剣でヤマタノオロチの尾を割いて取り出した天叢雲剣の形状、性能について、『古事記』は「つむがりの太刀」と説明する。「つむがり」の語の意味について本居宣長の『古事記伝』は「物を鋭く裁り断つこと」と解釈している。

スサノオは「これは異(あや)しき剣である」といつて、天叢雲剣をアマテラスに献上した。『日本書紀』では、スサノオは「これはわたくしごときが安易に私有してよろしいものではない」との理由で、アマテラスに献上する。

神聖な剣であり、物体を鋭く裁り断つ天叢雲剣は自分にふさわしくはないとスサノオは判断したわけだろう。

スサノオは冷静に、明確に、自分の後半生を規定した。聖なる存在への上昇をめざすべきではない、俗の存在でありつづけるべきだと規定した。

俗の存在であるうとするおのれにとって、天叢雲剣はふさわしくない。おのれにふさわしいのは格別な剣でもなく、聖なる剣でもなく、ありふれた十拳剣である。そのようにきめて十拳剣をわが物として持ちつづけ、ヒゲを剃りつづけた。

天叢雲剣は神々のもの、十拳剣はわれのものとして峻別した、スサノオの素晴らしさがここにある。

人間が剣を持たねばならぬ宿命のもとにあるのかどうか、簡単にはいえぬことだが、剣には、どうかすると、

神聖、格別な存在になりたがる傾向が著しいと気づいたのはスサノオであった。

——あんなもの、持たぬほうが身のため、世のためだよ。

ややもすると聖剣にあこがれる俗な存在、すなわち人間であるわれらを、スサノオは制してくれる。

——どうしても刃物を使ってものを切らねばならんというのなら、聖剣はやめて、ほーら、この、ありふれた十拳剣で充分なんだ。ヒゲ剃りだって、十拳剣でうまくやれるんだよ。うそだとおもうなら、おれのアゴに触ってみればいい。

毎朝々々、十拳剣で念入りにヒゲを剃る結果としてつるつる状態のアゴをつきだしてみせるスサノオ。

(11) 聖剣ではヒゲは剃れない

スサノオによつて現代につたえられた十拳剣の用途は、もちろん、ヒゲ剃りに限定されてはいない。権力を莊嚴する聖剣では切れないすべてのもの——布や果物、爪や頭髪、稲穂や縫糸などを切ってくれる。

これに反し、聖剣をどのように鍛練してもヒゲは剃れない、布は切れない、果物は切れない。

つまり聖剣が十拳剣に化けることはない、十拳剣が聖剣の代役をすることはありえないと、とりあえずはいえるのだが、油断はできない。

聖剣と十拳剣をひとつのものにまとめてしまおうとする試みは、執拗(しつよう)にくりかえされてきた。

ヒゲにすり寄り、「きれいさっぱりと剃ってやるよ」とささやく聖剣の姿が完全に消えたことはなかったし、いまでも、ちらほらと見え隠れする。

ありふれた十拳剣に剃られるのをイヤがって、聖剣に

剃ってもらうのをなによりの名譽とこころえるヒゲもある。

聖劍とヒゲを合体させようとする、けしからん策動もある。油断はできない。

(12) ヒゲを剃って一生をすごしたスサノオ

スサノオは出雲の須賀に宮をつくり、クシナダヒメを妻にむかえ、歌った。

八雲（やぐも）立つ 出雲八重垣

妻籠（つまご）みに

八重垣作る

その八重垣を

クシナダヒメのほかに、多くの女を妻にむかえ、たくさんの子をつくってそだてた。そのひとりがオオクニヌシノカミ（大国主神）である。

スサノオは毎朝ヒゲを剃って、しずかな生涯を終えた。罪人であることを隠さぬためのヒゲ剃りという意識はいつのまにか消えたが、毎朝のヒゲ剃りはやめなかった。ヒゲ剃りをやめると、ヒゲ剃り専用の十拳劍が無用になる。

無用になるのはいいとしても、手持ち無沙汰の手が天叢雲劍を持ちたがるかもしれない、それをスサノオはおそれたから、毎朝のヒゲ剃りをやめなかった。

こういうスサノオに、ぼくは恋い焦がれている。

（第1章・終）

『ヒゲは助六』

第2章「あれこれのヒゲ」

(01) ヒゲとハゲ

ヒゲとハゲ、これは相性がいい。

ハゲときいてヒゲをおもい、ヒゲの字をみてハゲを連想する。

ゲの字と音が共通しているからだ、昼と夜、前と後、表と裏のように対照の意識が刺激される結果でもあるか。頭髪ふさふさのひとのヒゲよりも、ハゲているひとのヒゲのほうがはるかに印象は深く、強烈だ。

ハゲているひとにはヒゲがある、頭髪ふさふさのひとにはヒゲがない——そんな生理原則があるわけではないのに、このタイプのおもいこみは深い。

(02) 剃髪の恨み

散髪屋で——

ハゲあたまの客が顔を剃ってもらいながら、散髪屋の大將に不平不満をぶつつける。

「おい大將、我輩などは床屋から特別の優遇をして貰っても宜(い)いな。今日までに散髪屋に何(んど)れぐらい御奉公しているか分からない。頭の毛が人並みの五分の一しかないけれど、散髪料に割引はないからなあ」

「その代わり旦那のはお鬚が硬(こわ)うございませから、お顔の方で骨を折ります」

「鬚は濃い。頭へ生える分が戸惑いをして頬へ抜け出ているんだ」(佐々木邦『珍太郎日記』講談社版

『佐々木邦全集』)

ヒゲが生えていけば髪の毛は少なく、髪の毛がふさふさしていればヒゲは少ない、または、ヒゲはないという原則があるなら、これをヒゲと頭髪の合計量不変の法則と名づけていいわけだが、じつさいはどうなんだろう。

大正から昭和にかけてユーモア小説をたくさん書いた佐々木邦の作品にはヒゲの記述がおおく、ヒゲにひきずられてハゲもしばしば登場する。

珍太郎の父の仲間のひとりが達海（たつかい）さん。名でわかるように、達海さんはお坊さんだ。

東京から遠い田舎のお寺の跡継ぎだが、お坊さんになるのがイヤでイヤでたまらない。お父さんの急死をチャンスとして、達海さんは寺の跡継ぎになるのを拒否した。

お寺のお坊さんにはならないが、仏教関係の学校の教師になることにきめた。そうときめたらきめたで、新たな難題がもちあがる。達海さんは試験が大の苦手、高等学校（旧制）の入学に三年、卒業に六年、大学卒業に六年を必要とした長期記録の保持者だ。

仏教学校の教師になると学生に試験を課さねばならないが、それがイヤである、なんとかありませんかと珍太郎の父、上村哲に相談をもちかける。上村哲は高等学校の教師らしい。

「仏教学校で試験をするのは殊に残酷です。他の学校と違って学生の頭脳が皆悪いのですからね」

「坊主だからって頭脳が悪いに定ったこともありま  
すまい」

上村の反発をうけて、達海さんの突飛な持論が展開さ



れる。突飛ではあっても邪論ではない。あえていえば正論の範疇（はんちゆう）に入れてかまわない。

——現在の事実として、わたしをはじめ、お坊さんはみんな頭脳が悪い。だがこれは自分自身の罪科ではない。昔から粗食に甘んじてきた結果として、体質が栄養不良に陥っている。からだが悪いのに頭脳だけが優秀になれるわけではない。それにくわえ、先祖代々頭脳を粗末にして薄着をさせた——髪の毛を剃るのを達海さんは「頭脳に薄着」と表現している——結果、脳髓が遺伝的に風邪（かせ）をひいている、云々（うんぬん）。

珍太郎、なるほど、そりゃそうだと納得する。

去年、庭に池をつくったときに余ったセメントを新聞紙に包んでおき、今年になって取り出してみたら、風邪をひいて使い物にならなくなっていた。新聞紙で包んだセメントでさえ、たった一年で使い物にならなくなる、代々にわたって髪の毛を剃って頭を薄着にしていれば頭脳がバクバクになるにきまっている。

お寺のお坊さんにはならぬと決心した達海さんは、決心が弱らぬうちにとの計算もあつてだろう、髪の毛をおもいきって長く伸ばしている。だが、そうしてさえ、バクバクの頭脳が良くなる保証はない。

「なにしろ千三百年のあいだ寒熱に曝（さら）した後ですから、今更急に棕櫚箒のように伸ばしてもそう容易には験が見えませんよ」

——遷俗した僧侶は本能的に髪を長くして左右に分ける。一分刈や五分刈のようなお手軽な伸ばし方には満足せず、先祖代々、毛が欲しかった妄念を晴らす。妄念ほど執着の強いものはない。もしもいま、帯刀がゆるされ

るとしたら、真つ先に大小を差して往来を闊歩するのは  
実業家にきまつている。地位と権力はともかく、思想の  
上で最も虐げられた町人の子孫が実業家なのだから。

教師が高等で実業家は下等とおもいこんでいる上村哲  
は、達海さんが大正の実業家を軽蔑しても痛痒は感じな  
い。とつぜん矛先を転じて、達海さんのチャップリンヒ  
ゲの存在理由を問いただす。

「それじゃその髭はどういう次第ですか？ そのチ  
ャーリー・チャップリンという奴はアメリカの陸軍  
当局者が先頃の大戦当時、出征軍人に厳禁したくら  
い俗悪軽薄の髭で、実を言うと私も甚だ気に入らな  
い」

アメリカの映画スター、チャーリー・チャップリンの  
最初の来日は昭和七年（一九三二）だが、それよりもま  
え、「巴里の女性」「黄金狂時代」「街の灯」などの作  
品と、鼻の下のチョビヒゲで有名になっていた。

上村としては達海さんの急所を突いたつもりのようにだ  
が、達海さんは待ってましたとばかりに反撃に転じる。  
「わたしのヒゲが俗悪だという評判ならばいますぐにも  
剃り落としますが」と、まずは下手に出ておいて、

「坊主という言葉は毛がないという意味をつたえて、  
既に多少に軽蔑を含んでいます。今日の社会で仏教  
がその使命を完（まつと）うするためには坊主が坊  
主にならずに坊主にならなければなりません」

——現在の社会で異様な姿をしているのは相撲取と僧  
侶だけ、異様な姿では社会に順応できない。ましてや、

天下国家を教化するなど、とんでもない。社会に順応して教化しようという意志のあらわれがこのチャップリンヒゲなんだと解釈していただきたい。

上村哲はあっさりと同感の意をしめし、そのチャップリンヒゲはあなたの手首の数珠とおなじ意味なんですなと、理解の深いところをしめした。

勝ち誇った達海さんは止めの一打を放つ。

「僧侶が円い頭をして袈裟を着て葬式を扱うだけに甘んじているようでは逆(とて)も有効な教化は出来ません。一般をもつと社会に順応させる第一着手として、私達はまもなく僧侶散髪蓄髻尼僧蓄髪期成会というのを起こす計画です」

上村はすかさず、「理髪組合と女髪結を後援会としてですか？」と皮肉ったが、悠揚迫(ゆうようせま)らぬ達海さんの心境には通じない。

僧侶散髪蓄髻尼僧蓄髪期成会ができあがって行動をおこし、数年もすれば、お坊さんの説教に背をむけるケシカラン者はひとりもない世の中になるはずだったが、そうは問屋がおるさなかつた。

それはそれとして、髪の毛を剃るのは社会一般から離れることだが、ヒゲを生やすのは順応する手段だとする達海さんの見解はおもしろい。これを敷衍(ふえん)すると、ヒゲを剃るのは社会から離反する意志のしるし、ということになる。

(03) ヒゲ規制の法律はない

お坊さんは頭髪とヒゲを剃る、尼さんも頭髪を剃る。

僧尼にかんする法律のいちばん古いのは『僧尼令』だ

が、頭髪やヒゲにかんする条文はないらしい。

僧尼の頭髪、ヒゲは法律で規制すべき範囲の外、しきりたりとして僧尼の自律に任されていたのだろう。国家による僧尼統制策としては、このほうが効果は高いはずだ。僧尼の髪やヒゲを剃るのは剃刀だ。

仏教の歴史は頭髪剃り、ヒゲ剃りの歴史とかさなっている。

十世紀にできた最初の日本語百科辞典『和名類聚鈔』で剃刀は仏具として分類された。

剃刀が木魚や線香立て、鉦鼓や袈裟とおなじ仏具に分類されるのは不思議だが、かんがえれば、なるほど仏具の仲間に入れるのが適当だ。刃物ではあるが、お坊さんや尼さんだけの髪やヒゲを剃る器物だから、れっきとした仏具なのだ。

仏教伝来のまえに髪やヒゲを剃った例がなかったわけではないが、剃刀はなかったのだから、スサノオのように剣で剃るか、そうでなければ毛抜で抜いた。髪も毛もヒゲも毛抜で抜いた。

剃刀よりまえに眉剃（まゆぞり）という名の小型の刃物があった。神功皇后のころには使われていたそうだ（内田廣頭『刃物の歴史』日本刃物工具新聞社）。

ヒゲならば眉剃で剃れないこともないが、頭髪は、そうはいかない。

眉剃で髪を毛をぜんぶ剃って、つるつる頭にするには大変な手間がかかる。もっと効果的に頭髪、ヒゲを剃れる刃物の出現が切望されていた。

#### （04）異形

ヒゲを剃る、ヒゲを生やす、これを抽象的にいえば異形（いぎよう）をつくることだ。

ヒゲを剃るしきたりが強い世ではヒゲを生やすのが異形、だれもかれもがヒゲを生やす社会ではヒゲを剃るのが異形になる。いやいやながら異形にされるもの、みずから選び、または好んで異形になるケースもある。

保延六年（一一四〇）十月十五日、佐藤義清が剃髪出家して、西行（さいぎよう）と名のつた。義清は二十三歳、六位上、鳥羽上皇の北面の武士をつとめる将来が有望な青年公家であった。

崇徳天皇の治世、それから近衛、後白河と代がうつつて保元元年（一一五六）に保元の乱がおこり、やがて武士が政治の実権をにぎる。世の変わり目を早めに察知しての出家であったのか。

西行はしかるべきお寺で受戒し、正式な僧になる修行をはじめたのではないようだが、ともかくも出家したのだから剃髪、ヒゲ剃りをしなければならぬ。

『西行物語絵巻』（徳川黎明会蔵版）によると、西行はまず、自分の屋敷で自分で剃刀をつかって、髻（もとどり）を切った。頭髪をまとめて一本の束に結（ゆ）わせる、結わえた部分が髻、髻を切るのは剃髪の準備でもあり、出家の意志が偽りでないことをみずから証明する手段でもある。

それから嵯峨のお寺にゆき、数人の僧に髪の毛を剃ってもらった。

ヒゲは、どうしたか？

出家まえの西行がヒゲを生やしていたのは『絵巻』によつてたしかめられる。嵯峨の寺の僧に剃髪とヒゲ剃りをいっしょにやつてもらったとかんがえていい。

髻を切るだけなら刃を皮膚に当てずにすむが、剃髪とヒゲ剃りは刃を皮膚に当てるから傷をつけるおそれがある。剃り慣れているお坊さんにやつてもらうのが賢明だ。

別の蔵版の『西行物語絵巻』では、髻を切る段階から寺のなかで、複数の僧侶によって剃髪してもらっている。

西行は諸国を遍歴した。

ひとつの寺や神社に腰をおちつけたこともあるが、かといって特定の寺社の神官、住職になったことはないようだ。

とすると、自分で剃髪、ヒゲ剃りをしなければならぬいわけだが、裕福であつたらしいから、自分で剃髪、ヒゲ剃りをするのではなく、侍者に髪の手、ヒゲを剃らせていたのではなからうか。西行の侍者のバツグには一丁の剃刀を入れてあつたはずだ、ひよつとすると、剃刀を研ぐ砥石とセットになつて。

(05) ポーランド映画「尼僧ヨアンナ」

西行法師の旅の小道具としての剃刀と砥石をかんがえていたら、ポーランド映画「尼僧ヨアンナ」に連想がつかつた。日本公開は一九六二年だそうだが、そのときはチャンス逃し、はじめて観られたのは二〇世紀になつてから、じゃなかつたかな。監督は奇才といわれたイエジー・カヴァレロヴィツチ。

ポーランド辺境の修道院では、院長のヨアンナをはじめ、尼僧たちが悪魔の誘惑に負けて愛欲に耽つていると噂があり、事実調査と、もしも悪魔のなせる業なら悪魔祓いをおこなうべく、司祭リスンが派遣された。

リスンの旅装といえば、着たきりの貧しい僧衣と、一枚のハンカチーフに包んだ堅パンとナイフだけ、筋の前半でナイフで堅パンを切つて食べるシーンが二度あつたのが印象的で、じつはそれには重大な意味が示唆されていた。

尼僧の魂に憑りついた悪魔はリスンをも餌食にし、狂

つたりスンはパン切りナイフで手首を切って自殺するのだ。

司祭リスンは黒々とヒゲを生やして登場する。キリスト教の聖職者であることとヒゲは矛盾しない、だからナイフは堅パンを切るだけの道具であり、剃刀ではない。リスンのナイフにはプラス、マイナス、二重の意味がこめられていた。パンを切って食べる生命維持の道具と、みずから手首を切って死ぬ生命断絶の道具としてのナイフ。

西行は佛教の聖職者である。出家イコール剃髪、ヒゲ剃りだから剃刀は僧としての人生に同伴するもの、僧の身分、立場を維持する必需品であって、自殺の聖なる道具などではなかった。

(06) 中務家資

建久六年(一一九五)二月、征夷大將軍源頼朝(よりとも)が鎌倉から奈良へゆき、東大寺の再建供養式に臨席することになった。

源平合戦のさなかの治承四年(一一八〇)十二月、源氏に味方したのはけしからんとの理由で平重衡(しげひら)が奈良を攻め、東大寺や興福寺を焼いてしまった。それから十五年、平氏をたおして鎌倉に武家政権をうちたてた頼朝は両寺の再建事業に援助をつづけ、ようやくいま、再建供養式に臨む。

供養の前日、頼朝は東大寺の大佛殿のあたりを視察、なにか不審のことに気づいたらしく、梶原景時を呼びよせた。

「碾磑門(てがいもん)のあたり、僧の群れから離れてひとり、怪しい様子の者がいる。召し捕ってまいれ」  
頼朝の命をうけたまわって梶原、やがてひとりの男を

連行してきた。

ヒゲは剃っているが、髻は切らぬ男である。おおぜいの僧がいる寺のなかでは、ヒゲを剃っても髻は切らぬ姿は異形である、目立ちやすい。

頼朝が不審な男を尋問する。

「何者じゃ」

「もはや運は尽きた。なにを隠そう、われこそは平家のさむらい、薩摩中務家資（いえすけ）」

「その家資が、何用あつて、ここへ？」

「お命をいただこうと。そのほかに、なにがある！」

「こころざしは誓めてやろう」

頼朝は家資を京都に連行し、六条河原で処刑した（『平家物語』）。

頼朝の命を狙うならば、ヒゲを剃るだけではなく、髻も切つてざんばら髪（総髪）か、剃髪し、つるつる頭になつて東大寺の僧の群れに紛れる手がある。このほうがうまくゆくとわかつていたはずだが、家資はそうはしなかつた。

平氏全盛のころ、家資はヒゲを生やしていたにちがいない。そして、平氏が源氏にやぶれたあとでヒゲを剃つた。ヒゲを剃れば容貌がボヤケて、顔と名をおぼえられない利点がある。逃亡者はヒゲを剃るのが安全なのだ。

ヒゲづらが多数である時代では、ヒゲを剃るほうが目立つ、だから家資がヒゲを剃つたのはまずかつた——こういう意見があるだろうが、じつは、そうではない。

ヒゲよりも頭髪が問題なのだ。

家資はあくまでも——頼朝の命を取つても取れなくても——武士でありたいとかがえていた。ヒゲの有無は武士であること関係はないが、髻を切つてざんばら髪や、つるつる頭になると冠がかぶれない。



公家はともかく、武士ならば、冠（かんむり）はかぶれなくても兜（かぶと）がかぶればいいではないかという意見があるだろうが、そういうものではない。

武士は、立身出世の階段をかけたのほり、天皇の直臣のしるしの官位をもらい、冠をかぶって正装をしたい大きな夢をもっている。

武士として頼朝の命を狙い、失敗して、武士として処刑された平氏の武者、それが家資だ。

頼朝が「こころざしは誓めてやろう」といった、その家資の「こころざし」がこれだ。家資はあくまでも武士として頼朝の命を奪おうとしたのだ。

#### （07）変装術

ヒゲ剃りは変装術として有効な手だ。

ありふれてはいるが、いまずぐ、自分の顔のヒゲを剃ればいいんだから、いちばんポピュラーな変装術である。4 1

ミステリー小説では主役も悪役もさかんにヒゲを剃る。-

ピーター・ラヴゼイ『殿下と騎手』ではイギリス皇太子のアルバート・エドワード、のちの国王エドワード七世がアマチュア探偵として活躍する。（山本やよい訳  
ハヤカワ文庫）

探偵としての殿下の手腕のほどは誉められたものではない、失敗の連続といっても殿下に失礼にはあたらないだろうが、好人物であるのが幸いして、最後には犯人をつきとめる。

アルバート自身はヒゲを生やしている。

皮肉なことに、探偵はしばしば犯罪の容疑者にまちがえられ、警察に追われる。

そうなってもアマチュア探偵アルバート殿下はヒゲを剃って変装しない。なぜかというと、

「犯罪の容疑者になった場合、平民に比べてわたしのほうが有利であると、とみなさんはお考えかもしれない。事實は逆である。プリンス・オヴ・ウエールズが捜査の目をごまかすために髭を剃り落とすものなら、国中の新聞が大騒ぎするだろう。群衆のなかに消えるのも、こっそりフランスに渡るのも、おそらく無理であろう。わたしを逮捕するのは楽なものだ」

ヒゲを生やした姿を国民のまえにみせるのがアルバートの皇太子としての義務だ。だから、ヒゲ剃りで変装しない。

自分はヒゲを剃らないかわり、とでもいうように、アルバートの臣下のチャーリー・バックファスト大佐がヒゲを剃って変装し、殿下にちからを貸す。

チャーリー・バックファスト大佐もヒゲを生やしている。アルバートによるチャーリー・バックファスト大佐の容貌はつぎのとおり。「あなたがバックファスト大佐の描写をお望みなら、両端を蠟（ろう）で固めたいかにも軍人らしい口髭をたくわえ、その陰にさほど目立たぬ顔が潜んでいて、鶯色（とびいろ）の目は大きく離れ、血色の悪い唇は過度の刺激をうけないかぎりほころびそうにないといっておこう」

事件発生——人気も技量も最高の競馬騎手フレッド・アーチャーが拳銃の弾丸で自分の脳みそを吹つとばしたというのだが、どうも怪しい。わるい奴がアーチャーを自殺に追いこんだ疑いが濃厚、そこで素人探偵アルバート皇太子とバックファスト大佐が乗り出す。

アルバート殿下は労働者の服装を着て変装した。

バックファストはまず、ながいあいだ着たことのない  
チエスターフィールド・コートと、軍隊当時のブーツが  
出てきたので、ブーツは水につけて光沢を消し、ひとつ  
しかない山高帽をくしゃくしゃにして形をくずしてから、  
ガチヨウの脂と灰を気前よくなすりつけ、ようやく、見  
るも哀れなシャツポをこしらえた。

つぎはヒゲだ。

わたしはかれの騎兵士官にふさわしい髭を見てい  
った。

『それは落としたほうが良い』

かれは肝をつぶした。

『何年もかけて、やっとここまでしましたのに、殿  
下』

はさみに屈することを彼がひどく渋ったので、や  
むなく、ピンとはねた両端をくずしたらどんな違い  
が出るかたしかめるにことにした。立ちのぼる湯気  
で蠟をやわらかくしてから、わたしが銀の楊枝を使  
って髭をときほぐした。かれは不屈の精神でそれ  
に耐えた。わたしは髭をすっかりほぐしてから、ここ  
までむさ苦しければ純粹な労働者階級に見えること  
まちがいなしと請けあった。

ヒゲの両端を蠟で固めてピンとはねあげれば上流階級、  
ダラリと垂れたヒゲなら労働者階級——こういう基準の  
ようなものがあつたらしい。

探偵活動がひまになると、バックファストはヒゲの修  
復作業をする。ダラリと垂れた髭に蠟を塗りこめ、両端  
をピンとはねあげる。アルバートがバックファストの

部屋をたずねた。

今回はチャーリー・バックファストみずから玄関をあけ、こういつてはなんだが、わたしは彼の姿を見たたん、吹きだしてしまった。髭の修繕の真っ最中だったのだ。一方は蠟に固められ、もう一方はだらしなく垂れていた。

わたしはいった。「こんなに遅い時刻なのか」

彼は怪訝な顔をした。

わたしはいった。「きみの顔が三時半だ」

事態は切迫してきた。ダラリと垂らして迫力をなくす処置ではすまなくなり、剃らねばならんときがきた。

「きみが尾行をおこなうのは観察のためであって、不快な事件をひきおこすためではない。目立ってはならん」

彼の手が口髭をかばうかのように伸びた。

わたしは柔和な、ものわかりのよさそうな声でいった。「それは落とししたほうがいい、どうだね、チャーリー」

「落とすのですか、殿下？」

わたしはうなずいた。

彼は肝をつぶした。「完全に？」

「一本のこらず」

彼は鏡のほうに向き直り、じつと自分を見つめた。『なるほど、すこぶる目立ちますな。』

わたしはいった。「二百ヤード以内の地点ではね。郷土と手下どもがそなたの盗み聞きに気づいたら、その髭をどうするか、わかったものではない」

一瞬、おびえたような沈黙が流れた。

わたしはさらにたたみかけた。「マートルがスパイをやると申しでくれたが、わたしとしては、きみを当てにしているのだ、チャーリー」

彼は引出しのところへ行つて、はさみをだしてきた。これが英国騎兵士官たるものの忠誠なのだ。

悪人どもに無理矢理ヒゲを剃らされる屈辱をおもえば、われとわが手でヒゲを剃るほうがましである——ヒゲ剃りは意地を張るのに有効な手段だ。

(08) エルキュール・ポアロのヒゲ

ミステリーのヒゲということで真つ先にあげねばならないのはアガサ・クリステイーが創造した探偵エルキュール・ポアロのヒゲである。

ポアロのほかの探偵ならヒゲがなくてもかまわないが、ヒゲのないポアロは探偵とはいえない。

— 4 5 —

彼は自分でも美男子になりたいとは思わなかった。そういう機会がないでもなかったのだが、自分の容貌に関してエルキュール・ポアロが本心から満足しているものが一つだけあった。それはひげが濃いことと、手入れをし、刈りこんでやると、それだけの苦勞のしがいのある、みごとなひげになることだった。まさに、それはすばらしいひげであった。その半分もりっぱなひげを持っているものを、彼はほかに知らなかった」(『ハロウィーン・パーティー』中村能三訳 ハヤカワ文庫)

ポアロのまえに出るひとは、例外なしにポアロの

ヒゲを称賛する。

「なるほど、あなたは服装にやかましいんですね」  
マイケルはポアロをつくづくと見た。「全体的効果、  
こんなふうにするのを許していただければ、あなた  
の壮大なおひげは、じつにみごとで、ほかでは見ら  
れませんね」

「お眼にとまりまして光栄です」

「そんなことより、眼にとめないでいられるか、と  
いうことのほうが重要ですね」

ピーター・ラヴゼイが書くイギリス皇太子アルバート  
は、できうるならばヒゲを剃り、正体を隠して探偵をや  
りたいとおもっているが、アルバートにたいして国民が  
抱く われらが皇太子のヒゲ のイメージに背くわけに  
はいかないから、ヒゲ剃りのほかの手で変装しなければ  
ならない。

イギリスそのもの、といってもいいアルバート皇太子  
とはちがい、イギリスに住んではいるが、じつは戦禍を  
のがれてイギリスに疎開しているポアロだ、探偵とヒゲ  
の関係についてアルバートとは異なる見解をもっている。

「ポアロ。あなたはまさしく人の目につく個性を持  
っているんだよ。そんなに目立って、よくあなたの  
ような仕事ができると思議に思うほどだ」

ポアロは溜息をついた。「それは、あなたが、探  
偵とは付け髭で変装して柱のかげにかくれているも  
んだというまちがったかんがえを持っているからで  
すよ。」

付け髭なんて旧式の遊びですよ。人の跡をつける  
ことなども、もっとも下等な探偵がやる仕事です。

エルキュール・ポアロは、ね、ヘイスティングス、椅子に腰かけて、この頭で考えさえすればいいんだ」  
（『もの言えぬ証人』加島祥造訳八ヤカワ・ミステリ文庫）

ポアロはヒゲを大切にしている。ヒゲがだめになると、自分が自分でなくなってしまうのを知っている。

ロンドンへ向かう車中、わたし（親友のヘイスティング）たちはほとんど口をきかなかった。わたしは運転しながら話をするのをあまり好かなかったし、ポアロはポアロで、風や埃で髭がだいなしにならないよう懸命にマフラーでかばうことに気をとられ、話どころの騒ぎではなかった。

生えているヒゲを剃るのが変装術だが、その反対、つまり、生えていないヒゲを剃ることで、いかにもヒゲ男であるかのようにみせるのも変装術として有効だ。

アルフレッド・ヒッチコック監督の冒険映画「北北西に進路をとれ」の主人公、ケーリー・グラント扮するロジャー・ソーンヒルはひよんなことで殺人事件にまきこまれ、自分で犯人を追跡しなければならぬことになった。犯人はロジャーの命を消そうとしているから、身を隠して犯人を追う困難に耐えねばならない。

洗面台がずらりとならぶ公衆トイレで犯人に遭遇、あやうく正体を見破られる危機におちいった。

ロジャーはどうしたかというところ、トイレの鏡にむかっでシャボンの泡を顔一面に塗りたくり、辛うじて正体を隠すことに成功した。ふだんはヒゲを生やしていないロジャーがシャボンの泡を塗ったからロジャーではない

ヒゲ男 に化けられた。

(09) ヒゲは生命力のシンボル

お坊さんや尼さんはヒゲや髪の毛を剃る、それはなぜか？

松尾剛次『「お坊さん」の日本史』（NHK出版）は「浄土真宗は別として、他の宗派の僧侶たちはなぜ髪の毛を剃るのか」という問いを発し、みずから答える。

戒律書には、釈迦のある弟子が髪を伸ばしすぎて鬼のように見えたので、釈迦が弟子に髪を剃るよう命じたとあります。

釈迦自身は髪の毛をどうしていたか、ここには書かれていない。髪の毛を「伸ばし過ぎた」にこだわれば、髪の毛を伸ばしても、鬼のようにみえなければよろしいのかもしれない。つまり、程度の問題かもしれない。

普通は『過去現在因果経 二』などに基づいて、世俗の虚飾や驕慢を離れるためと説明されています。

ここで松尾氏は「もうすこし宗教学的な分析をしましょう」と前置きして、つぎのように説明する。

実は、髪の毛は生命力を象徴しています。髪の毛の薄い人や白い人が年より老けて見られるのも、髪の毛に生命力を見ているからです。老けて見えるというのは、生命力の後退を意味します。ですから、髪を剃るとするのは、生命力をなくす、いわば擬似的に『死』ぬことを象徴しているのです。すなわち、俗



人としては擬似的に死んで、僧となるのです。それゆえ、髪を剃ること（剃髪）は、出家の象徴的な行為とみなされました。

つぎに、「むかし、合戦に際して、寺にはいり、髪を剃ると降参したとみなされ、死刑を免れる習慣がありました」として、足利尊氏の例が紹介される。

後醍醐天皇が派遣した新田義貞の軍が鎌倉に迫り、尊氏は窮地におちいった。尊氏は天皇に恭順の意をしめすために髻を切り、建長寺にはいった。

髻を切るとざんばら髪、ざんばら髪をおおざっぱに束ねると総髪になるが、髻を切っただけの段階ではまだ剃髪とはいえない。

出家をする意志があることを公的に宣言し、承認されれば剃刀で剃るか、毛抜で抜いてつるつる頭になれば本式の剃髪出家である。

尊氏は髻を切って後醍醐天皇にたいする服従の意思表示とした。「足利一族を滅亡させぬと約束していただけなら、わたくしはこのまま剃髪出家いたします」という意思表示だ。

それからどうなったかというところ、『太平記』によれば、尊氏の周囲の者が一計を案じて後醍醐天皇の名の贋の綸旨（りんじ）をつくった。贋の綸旨には「たとえ尊氏が剃髪出家しても尊氏や弟の直義の罪はゆるさず、足利一族を剿滅（そうめつ）する」と書かれていた。

これで尊氏は、もはや戦うしか途はないと決意し、新田義貞との戦いに出てゆく。

総髪の尊氏が太刀を肩に担いで馬に乗っている絵がある。天皇との戦いに出てゆく尊氏の悲壮な心境を描いたものではないかと解釈される、肖像画の名品だ。

髪は総髪だが、ヒゲはまだ剃っていない。いよいよ剃髪出家となれば、髪の手はもちろん、ヒゲも剃るか、抜くかしなければならぬ。

尊氏はこの姿で義貞との決戦に勝利し、武士の最高の地位にのぼって天皇を圧迫し、室町幕府をひらく。そのころには髪の手も復旧して、髻をむすべるようになってくるはずだ。

(10) 毛抜

後醍醐天皇の名の贖の論旨が登場しなければ、尊氏は髪の手とヒゲを剃るか、抜くかしてして、本物のお坊さんになったはずだ。

このころにはもう剃髪とヒゲ剃り専用の剃刀が登場していたが、では、武士が戦場に剃刀を携帯したのかという、ちがうだろう。

お坊さんの世界なら剃髪とヒゲ剃りは日常の作務だ。同僚のヒゲを剃ってやったり、自分で自分のヒゲを剃るうちに剃刀をあつかうテクニクが上達して、傷つけることは少なくなるが、武士はそうはいかない。刃物―負傷―戦死の不吉な連想もはたらき、戦場に剃刀は似合わないとかんがえられ、剃刀ではなく毛抜をもって戦場に出かけたはずだ。

尊氏のころ、ヒゲを剃る武士は少数派だが、そうであればなおさらに毛抜は大切にしなければならぬ。

琵琶湖畔の夏見城遺跡から真鍮製の毛抜が発掘された。とつたえるのは平成十九年八月十一日の京都新聞である。

毛抜の長さは現在のものとほぼおなじ八センチの撥型、はさみ部は一・五センチ、重さは十五・五グラム。表にオモダカ紋様、裏に羽をひろげた鶴がきざまれている。

室町時代後期の製造、国内最古の真鍮製品とみられると

いう。

室町後期の製造と判断されるなら、足利尊氏がこの毛抜をもって出陣した可能性はないが、美術品としてはすぐれている。

剃刀と毛抜——片方は刃物、片方は化粧と医療の小道具、まったく別のものだから比較をするのはおかしいが、あえて比較するならば、毛抜は装飾品、美術品としてあつかわれる面があった。上等な毛抜を所有し、ときには手にとって眺めて楽しむことがあった。

毛抜は鑑賞と実用をかねていたが、剃刀ではそうはいかない。

成人女性は眉毛を剃るか、抜いて、跡へ眉墨を入れる。これを眉剃り、眉払い、眉抜きといった。顔や目に傷つけるおそれがあるから、ここでも剃刀よりも毛抜が安全、そして便利であった。

女子がはじめて眉を抜くのは男子の元服とおなじ成人儀式の意味があり、少女の眉毛を抜く役には、なるべく身分の高い成人女性をえらぶことになっていた。男子の元服にたちあうのが烏帽子親または元服親、女子のそれが眉抜親である。

毛抜が装飾品として扱われるのは祝儀にかかわるからだ。

剃刀にたいして毛抜が優位にたつ条件のもうひとつが、頭髪でもヒゲでも、毛抜は一度に一本ずつしか抜けないこと。これは毛抜の弱点のようにおもわれるが、じつは反対で、一本ずつ、丁寧に抜くことで髪の毛やヒゲのスタイルを自分の好みに整えられる利点がある。

毛抜でヒゲを抜く習慣のひとつは、時間をもてあますことがない。ちよつとでも暇ができると、ふところから毛抜を出し、指先でアゴを撫で、ホホをさすり、これと狙

いをつけたヒゲの根元に毛抜の先をあてて、クイツと抜く。痛くないはずはないが、慣れれば快感にかわるタイプの痛さだ。

——危険で野蛮な剃刀なんか使って、ときには傷つけて血を出しながらヒゲを剃るなんて、理解できん！

こういった優越感にもひたれる。

お客さまがお出でになった。「しばらくお待ちを」と待たせるあいだ、タバコ盆に毛抜をのせて客の前に置く。「主人が出てまいるまで、手持ち無沙汰でございましょう。よろしければ、おタバコを召しあがるなり、おヒゲをお抜きになるなり、どうか、おゆるりと」

こういうわけだから、実用一点張りの毛抜ではよろしくない。お客さまをして「これは上等な毛抜だ」と感服させる大切な接待道具なのだ。粗悪な毛抜をお客さまのまえに出して、

「こんな粗末な毛抜で、おれの大切なヒゲを抜けというのか！」

怒らせては、元も子もない。

(11) 歌舞伎十八番「毛抜」

現代でも毛抜は依然として健在である。男性のヒゲ抜きよりも女性の化粧の準備の毛抜専用としての需要は旺盛であり、製造販売事業の市場もかなり広い。

歌舞伎に出てくる毛抜といえば、演目もずばりその名の「毛抜」がある。寛保二年(一七四二)に二代目市川團十郎が大阪の佐渡島座で演じた「雷神不動北山桜」の第三幕目の「小野春道館」が独立し、歌舞伎十八番のうちに入れられた(東京創元社版『名作歌舞伎全集第十八巻』「毛抜」解説)。

小野春道(おのはるみち)の娘の錦姫と大君豊秀の

婚約がととのったが、錦姫には髪の毛が逆立つ奇病があるとわかって、破談になりそうな気配。鳴神上人のお守りを縫いこませた薄衣をかぶっていれば奇病はおこらないが、薄衣を脱ぐとたちまち髪の毛が逆立つ。

春道の忠臣、桑寺弾正が毛抜でヒゲを抜きながら、錦姫の奇病の謎を解こうと呻吟している。

そこへ姫の侍女が出てきたので、毛抜を床においてからかっていると、とつぜん毛抜がピョンピョン、上がりたり下がったりして踊りだした。

手に持っていれば踊らないが、手から離して床に置くと踊る。

ためしに、煙管を床におくと、踊らない。

脇差の小柄はどうだろうかと、小柄をぬいて床におくと、ピョンピョン踊る——かんがえてかんがえぬいたすえに、弾正は毛抜や小柄が踊る謎を発見した。

そこへ、髪の毛の逆立った姿の錦姫があらわれる。弾正は姫の蝶花形の櫛笄（くしこうがい）を怪しいと見破った。

姫は銀（しろがね）づくりの櫛笄だというが、弾正のみるところ、銀づくりとは真っ赤な偽り。

弾正が姫の櫛笄を抜き取ったその瞬間、姫の逆立つ髪の毛は静かにおさまった。

悪人が鉄の薄板でつくった櫛笄を姫に挿させ、鉄粉を練りこんだ蠟を髪油と称して姫の髪の毛に塗り、天井に巨大な磁石を持った男を隠しておいて、姫の頭のうえから磁石のちからで髪の毛を引っ張りあげていたのだ。

磁石は十一、二世紀に中国で発明されたそうだ。日本にはいつてきたのは戦国時代だろう。舶来の珍品を舞台に出して観客をよろこばせる歌舞伎のセンスはたいしたものだ。

ところで、「毛抜」の主役は磁石だといって異論は出ないはずだが、演目が「磁石」ではなく、「毛抜」になったのはどういうわけだろうか。

——こんどの芝居にゆくと、なんと珍しい磁石というものがみられる、これをみずには死ねんぞ！

こんなふうに盛り上がったはずだが、噂の的の磁石が演目にはならず、珍しくもなんともない「毛抜」が演目になった、どういうわけなのか。

おそらく、たぶん、つぎのようなわけなのだ。

磁石が珍品なのはいうまでもないが、こういうものは邪気に満ちた、まがまがしいものであり、歴史の重みをたくわえておらず、ひとびとの熱い想いをうけとめてもいない。

歌舞伎の主役を演じる役者の聖なる資質には似合わないものであり、もしも主役級の役者と同等のものとして扱おうものなら、舞台には抗議の紙礫（かみつぶて）が飛んでくる。

『名作歌舞伎全集』第十八巻「毛抜」の台本には、最後の場面の舞台写真が掲載されている。

糸寺弾正の炯眼と奮闘によって正体を暴露された馬蹄形の磁石が天井からひきおろされ、悪人の手下となって磁石を使った奴やつこのからだを挟んで懲らしめている。糸寺弾正役の二代目河原崎長十郎が長槍をもち、奴の首根っこをおさえつけている。

磁石は珍品にちがいないが、所詮はこんな程度のものである。役の名もつかないケチな奴とは同格だが、主役が扱う小道具とはレベルがちがう。

長十郎演じる糸寺弾正にはヒゲが生えていない。

ヒゲがないのに、なぜ毛抜が必要なのかと疑問が出るだろうが、毛抜の得意わざは長いヒゲを抜くことではな

い。てのひらでアゴやホホを撫でて、ちよつとでも生えてきたヒゲの芽を発見すると、これ以上は伸びないように早いうちに抜くのが得意なのである。

毛抜でヒゲを抜きながら弾正は、姫の髪の毛が逆立ち、小柄や毛抜が踊りだす奇怪なる謎を解きあかそうとし、成功した。謎解きを成功させたのは、弾正の

毛抜の聖なるちからだ。

河原崎長十郎演じる弾正の毛抜はただの毛抜ではない、聖なる毛抜だ。

聖なる毛抜 である証拠に、十一代市川団十郎演じる桑寺弾正が使う毛抜は長さが五十センチほどの巨大な毛抜にデフォルメしてある。

聖なる毛抜 だからこそデフォルメに耐えられる。弾正の毛抜を 聖なる毛抜 に格上げするのは、舞台をみつめる男女の観衆が日々に使ってヒゲや眉毛——ひ——とによつては陰毛も——を抜く 俗なる毛抜 である。

俗なる毛抜 をぜんぶあつめて積んで小山として、その頂上で一本だけ輝く毛抜、それが桑寺弾正の 聖なる毛抜 なのだ。

聖なる毛抜 の存在理由を理解できないひとには裁縫用語「毛抜合わせ」の意味をかんがえていただくのがよろしい。

二枚の布を合わせて縫うとき、表と裏の布の出入りがないようにびったりと合わせる、それが「毛抜合わせ」だ。

毛抜の二本の先（刃）がびったりと合うようにつくられていてこそ、ヒゲも眉毛も髪の毛もよく抜ける。

つくりの粗末な毛抜ではヒゲは抜けずに抜（よじ）れ、切れてしまう。切れて短くなったヒゲののこりはますます抜けにくくなり、始末に負えない。

ものごとの正邪を分ける基準であること、それが 聖なる毛抜 の存在理由だ。

(12) 「自剃り弁慶」

僧の世界で自分のヒゲや頭髪を自分で剃るのを「自剃り(じぞり)」といい、怪しげで侘しい境遇にいる僧を嘲り、または自嘲する表現としてつかわれた。『新選犬筑波集』につぎの句がある。

毛の有る無きは探りてぞ知る

弟子もため坊主は髪を自剃りして

弟子がいる僧はいつでも髪やヒゲを剃ってもらえるから、伸びているかどうか、自分のてのひらで撫でて知る必要はない。弟子が察して、「お師匠さま、おつむを剃りましょうか、おヒゲ剃りは如何ですか」といつてくれる。

- 5 6 -

弟子のない僧は、そうはいかない。

ヒゲや髪の手が伸びているのは不徳のしるしとして批判の対象になるから、自分の手で頭や顎を撫でて、伸びているなとわかったら自剃りしなければならぬ。

そもそも、自分のてのひらで頭や顎を撫でる姿は侘しい、弟子を持つほどの徳も財もないしるしだから。

俗人が出家するときの理想のかたち、それは先輩の僧にたちあってもらい、髪の手やヒゲを剃ってもらうことだった。

そうでなければ自剃りするしかないが、これもやはり侘しく、切ない姿になる。

武蔵坊弁慶は若いときに比叡山で修行していた。大力をたのんで暴れてばかり、衆徒からは憎まれ、師の僧か



らは愛想をつかさ、僧にならぬうちに——頭髮もヒゲも剃らぬまま——山を降りねばならぬことになった。

俗体のまま下山すれば恥をさらすから、どこか適当な庵にはいり、ひとを頼んで剃髪してもらおうとかんがえたが、それは不可能と気づいた。

尊敬されていればこそ他人の手で剃髪してもらえるが、暴れん坊の名のついた弁慶を相手にしてくれる僧はいない。

ならばいつそ自剃りのほかになしと覚悟して、西坂本の千手院から流れてくる清水を鏡として顔を映し、髪とヒゲを自剃りした。この清水は「弁慶水」と名づけられる。『じぞり弁慶』『室町時代物語大成 第六』

自剃りしたあとがわれわれになじみの弁慶である。自剃りで僧になるいきさつが、その後の弁慶の異様な活躍を予告するのはいうまでもない。

ついでながら、後半生の弁慶が持っていた五尺八寸の長刀は、室町時代の小説『じぞり弁慶』によれば三条小鍛冶宗近（むねちか）が百日のあいだ精進潔斎して鍛えた業物（わざもの）である。

宗近が聖剣の小狐丸（こぎつねまる）をつくるドラマはいずれ紹介するが、弁慶が宗近が鍛えた業物を佩刀とするのは 異様な弁慶 Ⅱ じつは聖なる弁慶 の状況設定のしるしであるのに注目していただきたい。

（13）歌舞伎十八番「鎌髭」

ヒゲ剃りは剃刀にかぎったわけでもあるまい、剃れさえすればいいじゃないかと広角度の発想をしたひと、それは歌舞伎十八番「鎌髭」の作者だ。

「鎌髭」には鎌が登場する。四〇五センチの長さの木の柄に二十五センチほどの刃をほぼ直角に嵌（は）め

た草苅鎌、むかしの農作業の基本的な農具だった。草はもちろん、稲も麦も、みんなこの鎌で刈り取った。

農家の子がおおきくなって農作業ができるようになる、祝いも兼ねて専用の鎌を買ってもらおう。研ぎ方をおしえてもらい、刃を縄で巻いて腰にさし、高ぶった気分で田や畑に出てゆく。

ありふれてはいるが、これがなければ農作業がはじまらない。それくらい貴重な農具の草苅鎌が檜舞台で脚光をあび、聖なる鎌になるのが「鎌髭」のあらすじだ。

平将門（まさかど）は奥州で反乱をおこし（天慶の乱）、みずから「新皇」と称したが、藤原秀郷（ひでさと）に攻められて戦死した。

将門の遺児の良門（よしかど）が諸国巡礼の六部（ろくぶ）に変装して京都に潜入、父の仇敵の秀郷を討とうとしている。

秀郷の子の守郷（もりさと）は鍛冶師に化けて、良門を返り討ちにしてやろうと、手ぐすねひいている。

守郷の鍛冶の仕事場に良門があらわれ、ヒゲを剃りたから剃刀を研いでくれと頼む。

守郷は、剃刀ではなく、自分が鎌で剃ってやるが、どうかと勧める。

良門は承知し、守郷は鎌を研ぐ。

良門は盥（たらい）の水でヒゲを濡らして待ち、守郷は良門のうしろから鎌を出してアゴにあて、「今宵は名月」といって良門を油断させ、鎌を良門の喉にあてて切るうとするが、じつは良門は不死身である、守郷の鎌の刃は良門の喉に刺さらない。つぎの対決を約束して、ふたりは別れる。

山本二郎氏の解説によると、「鎌髭」の脚本ははやういうちに行方不明となり、明治四十三年に市川猿之助に

よって復元上演され、はじめて歌舞伎十八番のうちに数えられたそうだ（『名作歌舞伎全集 第十八巻』 東京創元社）。

復元が充分でなかったらしく、剃刀が鎌に代わる前半部が説明不足となった憾（うら）みがある。

喉を切るなら剃刀でも切れる、剃刀のほうが切りやすいはずだが、荒事の舞台の小道具としてデフォルメに耐えられるかとかんがえると不安がないわけではない。「毛抜」の毛抜は巨大化のデフォルメに耐え、成功したが、剃刀はそうはいかない。グロテスクになるばかりだ。

そこで、意外や意外、田舎鍛冶の守郷の商品の草苳鎌でヒゲを剃らせる筋書きにしたのだろう。

「鎌髭」の幕開き、上手から出る鹿島事触（かしまのことふれ）れと下手から出る金毘羅参りがゆきあい、「良門にちがいない六部があらわれた、われらの手で取り押さえて手柄にしよう」と打ち合わせる場面がある。

場所は特定できないけれども、社寺参詣の百姓が、守郷がつくる商品の鎌を土産に買って帰る風景が下地になっているのではなかったらうか。

（第2章・終）

『ヒゲは助六』

第3章「天皇・貴族のヒゲ」

(01) 後白河法皇のヒゲ

京都の泉涌寺（せんにゅうじ）の塔頭、今熊野観音寺（いまくまのかんのんじ）の本尊は一寸八分の観音像。弘法大師空海が熊野権現の化身の老翁からさずけられたとつたえられる。

後白河法皇（天皇）が熊野権現を勧請してから観音寺は那智の青岸渡寺に擬せられ、繁栄した。

後白河法皇には頭痛の伝説があり、頭痛持ちになったいきさつが観音信仰にからむかたちでさまざまに語られる。

法皇は熊野御幸の帰りに行き倒れ、遺骸の頭骸骨をつらぬいて柳が芽生えて大木となった。風が吹くたびに柳が揺れて脳の神経を刺激するので、法皇は頭痛持ちになつてしまった。

柳の大木をひきぬいて京都にはこび、おりから建造中の法住寺殿の仏堂、三十三間堂の棟木にした。これが浄瑠璃「三十三間堂棟木由来（むなぎのゆらい）」の大筋である。

柳の木がひきぬかれて法皇の頭痛は平癒したと解釈できるわけだが、法皇の観音信仰が観音さまによって認められ、観音の加護によって頭痛がなおつたのだとする解釈もあるようだ。

今熊野観音寺に、頭痛に悩む後白河法皇のうしろから観音の靈光がさす光景を描いた額が掲げられている。

天皇、法皇の肖像といえば正装に威儀をただしたものとスタイルがきまつているが、この額はなんともユニーク、病気の先入観があるせい、法皇は苦しんでいる。

髪は総髪、つまりざんばらをちよつと束ねているだけで、八の字ヒゲを生やしている。明治以前の天皇、法皇のリアルな肖像が観音寺で見える。

後白河法皇は天皇在位のあいだはヒゲを生やしていたはずだが、退位し、出家してからは剃髪し、ヒゲを剃った。神護寺蔵の法体肖像や宮内庁書陵部蔵の法体木像にもヒゲや頭髪はない。

天皇、法皇、皇太子のヒゲについて特別の規定のようなものがあつたのか、どうか、わからないが、趣味や好みで生やしたり剃ったりするものではないのは想像できる。剃らないのが普通だ。

天皇の肌は刃物を当てるべきではないとするタブーもあつたはずだし、剃られたヒゲや頭髪、手足の爪などが悪人の手にはいると呪詛（のろい）の具となるおそれもある、剃らず切らずが無難なのだ。

（02）古人大兄皇子

剃髪出家した皇族の、おそらく最古の記録は古人大兄皇子（ふるひとのおおえのおうじ）ではなかるうか。第三十四代舒明天皇と妃の法堤郎媛のあいだに生まれたのが古人大兄皇子だ。

舒明天皇と皇后宝皇女とのあいだには中大兄皇子、間人皇女、大海人皇子がうまれており、舒明天皇の死後、中大兄皇子と大海人皇子、それに聖徳太子の子の山背大兄王をまきこんで皇位争いがおこった。皇位争いが嵩じて朝廷分裂にいたるのを避けるため、舒明天皇の皇后の宝皇女が即位して皇極天皇となった。

皇極天皇はじめ、中大兄皇子に皇位をゆずるつもりだったが、天皇の意中を知った中大兄は藤原鎌足（かまたり）に相談し、即位を辞退して、自分の代わりに叔父

の軽皇子（かるのみこ）がふさわしいと推薦した。軽皇子は皇極天皇の同母弟だ。

中大兄の推薦をうけた軽皇子は、自分よりも舒明天皇の長子の古人大兄皇子がふさわしいとして、即位を辞退した。

すると古人大兄皇子はただちに席を去り、拱手礼拝して辞意をのべた。

「道理にそむいてまで、わたくしごときに讓位なさるべきではありません。わたくしは出家して吉野に入り、佛道を勤め、修行して天皇をおたすけいたします。どうか、天皇の許しをいただきたい」

「いやいなや、古人大兄皇子は佩刀を外して地に投げ捨て、従う者のすべてにも刀を捨てさせ、法興寺（飛鳥寺）に参詣してヒゲを剃って袈裟を着た。」

ヒゲを剃った様子は『日本書紀』には書かれていないが、法興寺で剃ったのだから、法興寺の僧の手を借り、僧のヒゲ剃り専用の剃刀で剃ったとみていい。

即位辞退を宣言してすぐに古人大兄皇子は皇族のしるしの佩刀を捨て、剃刀でヒゲを剃った。一瞬のうちに佩刀が剃刀に入れ替わる光景の印象が鮮やかだ。

もしもあのとくに即位を承諾していれば、古人大兄皇子の佩刀は天下をおさめる聖剣になっていた。

聖剣になるべき剣を地に投げ捨てたあとはふりむきもせず、法興寺で使った剃刀で毎日ヒゲを剃る習慣を身につけていたならば古人大兄皇子はスサノオの後継者になったわけだが、事実の経過はそうではなかった。

軽皇子が即位して孝徳天皇になってまもなく、古人大兄皇子は謀叛を企てたとして中大兄皇子に攻めほろぼされてしまう。

(03) 大海人皇子

古人大兄皇子を攻めてほろぼした中大兄皇子は、孝徳天皇と斉明天皇のつぎに即位して天智天皇となる。

即位後十年、病の重くなった天智天皇は皇太子の大海人皇子（おおあまのおうじ）を枕辺によび、皇位継承を促した。

大海人皇子はただちに辞退し、皇位を皇后の倭媛にゆずり、大友皇子を皇太子にすることを建言したあと、自分分は出家して天皇のために佛道を修行したいから許可してほしいと願った。皇后の倭媛は古人大兄皇子の娘、大友皇子は天智天皇と伊賀采女宅子娘のあいだの子である。天皇の許可をえた大海人皇子は内裏の佛殿の南に出て、床几にすわり、ヒゲと髪を剃って沙門になった。

古人大兄皇子とおなじく大海人皇子の剃髪の詳細はわからないが、内裏の佛殿または道場につとめている僧の手を借りたのだろう。沙門になった大海人皇子に、天智天皇は袈裟を贈った。

やがて大海人皇子は天皇に拝謁し、吉野で佛道修行をする許可をもとめた。

天皇の許可をえて大海人皇子は吉野にゆく。この訣別が壬申の乱につながることは、だれも予想しなかった。

内裏の佛殿でヒゲと髪を剃ったとき、大海人皇子は佩刀を地に捨てたはずだが、ここらうちでは、捨てなかつたのだ。佩刀を拾いあげて揮い、政敵をほろぼして即位し、佩刀を聖剣とする計画をそだてていたにちがいない。

(04) ヒゲは人間の内面を映す

ヒゲは自意識のシンボルだ。

「おれはダメだなあ」と嘆く自虐のシンボルともなる

し、「ひとかどの男といえば、まあ、おれぐらいのものだ」と自尊するシンボルともなる。

ヒゲの有無と自虐、自尊の相違に相関関係はない。ヒゲがあるから自虐とかぎったことでもなく、ヒゲがないから自尊ときまつたわけでもない。

だがしかし、自虐でも自尊でも、ヒゲがあれば自意識の確認、強調の道具になるのはたしかだ。

万葉歌人の山上憶良（やまのうえのおくら）の有名な作品「貧窮問答歌」、末尾に「頓首謹上」とあるから、自分の窮状を無名架空の第三者に託して長上に訴える体裁になっているのがわかる。長上とは天皇だとかんがえていいのだろうが、無名架空の第三者はヒゲを生やしていた。

風雑（まじ）へ 雨降る夜の 雨雑へ 雪降る夜は  
術（すべ）もなく寒くしあれば 堅塩（かたしお）  
を取りつづしろひ 糟湯酒（かすゆざけ） うち  
噉（すす）ろひて 咳（しわぶ）かひ 鼻（び）しびし  
に しかとあらぬ 鬚（す）かき撫（な）でて 我を除きて 人  
は在らじと 誇（たか）ろへど 寒くしあれば 麻衾（あ  
さぶすま）ひき被（か）り 布肩衣（ぬ）有（あ）りのことごと 服  
襲（きそ）へども 寒き夜（よ）すらを 我（わが）よりも 貧（ひ  
き）人の 父母（ふぼ）は 飢（う）え寒（さ）（こ）こ（こ）ゆらむ 妻（つま）子（こ）め  
こ（こ）どもは 吟（うた）（によ）び泣（な）くらむ 此（この）時は 如  
何（いか）にしつつか 汝（なんぢ）が世（よ）は渡（わた）る

「我を除きて 人は在らじと 誇ろへど」だから、このひとは競争社会に生きる官人、しかし下級である。

高位高官者の堆積の圧迫感を頭上に意識せざるをえないから、それが自虐となり、耐えられずに爆発しそうに



なるのを、「しかとあらぬ鬚」を撫でることで辛うじて抑えている。「我よりも貧しき人」を下にみすえ、威張ってヒゲを撫でるタイプの官人ではない。

ヒゲがなければ、かれは自暴自棄になってしまう。だから、まちがってもヒゲを剃ることはない。ヒゲを撫でることで自分の存在意識を強調し、自己抑制の呪術ともしている。

(05) 柳里恭

万葉歌人の山上憶良の名と歌をもちだし、ヒゲをテーマに自己抑制を論じると、「それぞれ日本精神の発露！」なんて誉められそうだが、ぼくの目のついたかぎりというと、「日本」と「非・日本」のヒゲ意識に、どういふほどの差異はない。あえていえば、日本よりは欧米の文学、それもミステリー作品でヒゲと自己認識の関係が強調される傾向にある。

日本人では柳澤淇園の『独寝』、表現はやわらかく、簡潔だが、意識は強烈。淇園は大和郡山藩家老の子、柳里恭（りゅうりきょう）と称して文や絵、本草など十六芸に達したといわれる。

男も髭有るはにくらしきものなり、髭は無きがよし。

江戸の中期、大名のご家老さまのご子息とあってはヒゲは剃らぬわけにはいかない。あなたの好き嫌いより、身分に課せられた義務ではありませんかと、失礼ながら反論したいくらいに簡潔、強烈な言い方だ。

(06) 『ハゲの哲学』

昭和五年に東京で生まれ、文藝春秋社の編集委員をし

ていた金子勝昭はハゲ人生なかにさしかかって、『ハゲの哲学』なる書物を刊行した。「あるいはハゲてしまった・ハゲつつある・ハゲるかもしれない人々へのメッセージ」なる長いサブタイトルがついている。(田畑書店)

自分の頭髪のハゲ状況を意識するとヒゲに触れないわけにはいかぬ心理の原則のようなものがあるらしく、金子はいう。

男は髭を剃らねばならぬ宿命のもとにあり、それは必ず鏡をともなう。ぼくはその時、鏡の中の髭の部分だけを見、自分の顔全体からは目をそむけるようにしている。直面することは恥ずかしいし、薄気味わるいことだ。鏡の中の自分をまともに見つめることができないのは、心によこしまなものがあるのかもしれない。

自意識過剰ということでもあろう。客観的な視覚を持ちながら、しかも完全には客観的になり得ないところに、テレルという感情が生ずるとすれば、テレているのだともいえる。

すると、テレないで鏡の中の自分の向かいあうことができない女性は、全く客観的か、全く主観的(つまり、うぬぼれ鏡)か、あるいは全く自意識がないということになるう。

『ハゲの哲学』のカバー裏には著者のヒゲを伸ばした写真が出ている。頭髪が少なくなってきたころ、社内の演劇サークルで「村人3」の役を坊主頭で演じたのがきっかけとなり、丸坊主スタイルになってから、ヒゲを伸ばしたそうだ。

鏡のなかの自分の顔を全面凝視する勇氣はなくても、ヒゲに視線を集中すればなんとかなるものだというのがヒゲとともに四十八年のぼくの体験からくる見解だが、金子勝昭の場合はどうだったのだろうか。

(07) 『ユリシイズ』

「20世紀ヨーロッパ小説屈指の大作」と評される(『広辞苑』)、ジエイムズ・ジョイスの『ユリシイズ』。ぼくが読んだ集英社版日本語訳、極々の長編は主人公のヒゲ剃りからはじまる(丸谷才一・氷川玲二・高松雄一訳)。

重々しくて肉付きのいいバツク・マリガンが、シヤポンの泡立つボウルを捧げて階段口から現れた。

十字に重ねた鏡と剃刀が上に乗っかっている。はだけたままの黄いろいガウンがおだやかな朝の風に乗って、ふわりと後ろへなびいていた。

彼はボウルを高くあげて唱えた。

——「ヘワレ神ノ祭壇ニ行カン」。

神の祝福をうけにゆくのか、神の裁きをうけにゆくのか、バツク・マリガンは、ヒゲを剃らずに神の祭壇にはゆけぬと自己規制している。神聖な行為としてのヒゲ剃りである。

探偵が女性のミステリー作品では、彼女とかかわる男のヒゲが重要な役割をになう。

ジル・チャーチル『愛は売るもの』で女探偵として活躍するのがリリー・ブルースター。

ホテルで殺人があり、リリーが登場する。被害者の仲間ひとり、エドワード・プライスはヒゲを生やしている。

リリーが玄関にいと、さっきのブロンドの若い男（プライス）が階段を駆け降りてきた。着替えをすませたが、ネクタイが曲がっている。髪は撫でつけられており、ひげも剃ろうと試みたようだったが、顔の半分を傷つけてあえなくあきらめたようだった。今は小ぶりの金縁眼鏡をかけている。

（略）

ハワード・ウォーカー（警察署長）も大急ぎで服を着替えてきたようだが、エドワード・プライスよはずっときちんと着込んでいた。それでもひげまでは剃らなかつたため、かなりむさくるしい雰囲気だった。

（略）

「あなたはひげを剃っていますね」ウォーカーはおもむろにいった。

プライスはばつが悪そうに肩をすくめた。

「馬鹿げたことだと自分でもわかっているんですが、どういうわけか、こういうときでもひげを剃るのが立派な行為だという気がしたんです。遺体を見なければちゃんと剃れたと思いますが、見てしまったので最後まできちんと剃ることはできませんでした」片手を頬にあて、すこし血が出ていることに気づくと、ハンカチで頬をぬぐった。

ウォーカーは顔を横に向けるように言い、プライスの頬をじっくりと調べた。

「どうやらあなた自身の血のようだ。昨日は何時に寝ましたか」

（戸田早

友人の殺害死体を見たあとでもヒゲを剃るのが立派な行為——ブライスが真犯人ならば苦しい言い訳だが、真犯人でなくても、こういう言い方をするケースは多いはずだ。

ヒゲは、ヒゲ剃りは内面の正義を映しだす、または覆い隠す、のである。

(08) 毛抜形の太刀

ヒゲに固有名詞がつくことがある。

天神ヒゲと名がつくのは普原道真のヒゲ、クチヒゲの両端が長く垂れて下がる。

天神とヒゲは切ってもきれぬ関係がある。

ヒゲのない天神さんなんか想像もできないが、ここにとつぜん「ケヌキ——毛抜」が出てくると、ちょっとした混乱になる、天神さんの天神ヒゲを抜く専用の毛抜があるのか、と。

太宰府天満宮に「伝・菅公遺品の毛抜形太刀」なるものがある。そうときいて、「毛抜を持っていたのなら、道真は毛抜でヒゲを抜いていたわけだ。それなのに、どうして天神ヒゲなんていうヒゲが存在するのか？」と疑問をもつひとがいるかもしれない。

じつはこれ、単純な錯覚だ。抜形の太刀であって、毛抜そのものではない。

毛抜形太刀は衛府（えふ）の太刀ともいい、衛府の役人に官給される帯刀だから衛府の太刀とよんだ。儀礼用の太刀である。

刀身を延長して柄とした、いわゆる共柄（ともつか）づくりの太刀であり、柄の部分に毛抜の形が透かし彫りされているので毛抜形の太刀の呼称がついた。

刀身の柄の部分はもちろん鋼鉄であって重いから、軽

くするために細く長い——長さは二十センチほど——透かし彫りをした、その透かし彫りが毛抜のかたちになつたわけだが、なぜ毛抜なのか、の疑問が出てくる。

横長のかたちの柄に透かし彫りをして重量を減らそうとすれば、柄と同形縮小の横長の空間——右手の親指と左手の親指、人指し指と人指し指の先を合わせてできるかたち——を透かすほかに手はない。つまり毛抜のかたち。

だれかが「こりゃ、毛抜にそっくり！」と叫んで毛抜形太刀の呼称になつたのだらう。

毛抜は貴人の持ち物であつたはずだ。

男のヒゲを抜き、男女の頭髪と眉毛の生え際をととのえるのが毛抜だが、毛抜がなければ困るのは貴人であつて庶民ではない。毛抜——高貴のイメージは確固たるものであつた。

衛府の長官は中納言と同格、高貴にはちがいないが、武官なるがゆえの劣等感がある。毛抜のかたちを透かし彫りした太刀を帯びることで上昇感覚を味つたのだ。

神護寺蔵の平重盛・源頼朝とつたえる束帯姿の画像も毛抜透かしの柄の太刀を帯びている。

さて、菅原道真の遺品のなかに毛抜形太刀があつた。

これは太刀であつて毛抜ではないが、だからといって道真が毛抜でヒゲを整えなかつたと断言できるわけではない。

ヒゲの生え際を美しく整えるには剃刀よりは毛抜が向いている。正統で立派な儒学者を自任していた道真は、観方をかえれば、おしやれだったにちががなく、ヒゲのかたちをヒゲ任せにはせず、毛抜を使って生え際を綺麗にしていたと想像するほうが理屈に合う。

道真は太宰府に流罪された。

名目は流罪ではなくて配置転換なのだが、実態は流罪、ゆるい幽閉、明けても暮れても任務というものがない。殺されはしないが、明日を生きる意味を奪われたままの残酷な処罰の日々を生きてゆくには、ヒゲの手入れは有効で不可欠のひまつぶしだった。天神ヒゲの基本スタイルは京都ではなく、太宰府できまつたとかんがえていい。

道真の現役時代の最高官は右大臣である。毛抜形太刀しか帯びられない衛府の役人とは比較にならぬ顯官だが、太宰府にきてからは心境が変わったはずだ。

——毛抜形太刀を帯び、衛府の役人となったつもりで天皇の御身を守護する覚悟であります！

この決意が遺品の毛抜形太刀にこめられてはいなかったらうか。

(09) 天神ヒゲ

天神ヒゲ——両端の下がる口髭を生やした男はかぞえきれないほどいたのだが、道真の両端下りのヒゲがあまりにも有名だから、すべてをひっくりくるめて天神ヒゲと呼ばれる。

肖像——写真をふくめて——の数の多少ということをかんがえてみる。

——そのひとのヒゲの肖像は、あっちこっちで、たくさん観た。もう、うんざり！

こういう印象が強いのは、だれの肖像であるか？

鍾馗（しょうき）や達磨（だるま）、関羽（かんう）や意休、そして天神さまやチャールズ・チャップリンだろ。

聖徳太子のヒゲの画像も少なくはないが、天神さんほど多くはない。

意休は悪役だから記憶にのこりにくい、いや、悪役だからこそ印象は深いのかな。鍾馗や達磨、関羽は遠いむかしの外国人であって親近感に欠ける憾みがあるとする、のこるのは菅原道真の天神ヒゲだ。

2001年に全国天満宮梅風会が展覧会「天神さまの美術」を企画し、東京国立博物館を皮切りに福岡市博物館、大阪市立博物館で開催された。

パンフレット『菅原道真没後千百年 天神さまの美術』、アート紙三百五十ページにおよぶ大型で分厚く、ずっしりと重いのをひらくと天神ヒゲが満載、天神ヒゲだらけだ。

天神が唐に渡った伝説があり、その名は渡唐天神（ととうてんじん）、その渡唐天神でさえも天神ヒゲを生やしている。

唐に渡る——環境激変だが、それくらいで剃られてしまふ脆弱なヒゲではなかった。

江戸時代のはじめ、後水尾天皇と東福門院和子とのあいだに生まれた興子内親王が寛永六年（一六二九）から二十年まで在位し、諡（おくりな）は明正天皇。

明正天皇は押絵の渡唐天神像をつくり、内側に金箔をはった厨子におさめた。いまは大阪の佐太天満宮に所蔵されているが、この天神さんももちろん天神ヒゲを生やし、梅花一枝を手にしたおなじみの姿である。

道真は天皇によって有罪と判定され、追放処分をうけたのだから「スサノオ」道真」の等式がなりたつ。そしてまた、道真が追放されるまえにヒゲ剃りを強制されなかったのだらうかと連想がはたらくのもたやすいことだ。付加刑罰として無理矢理にヒゲを剃らされたのか、どうか、事実はともかく、道真がヒゲを生やしつづけたということ、これが肝腎だ。



——わたしはヒゲを生やす。ヒゲを剃ればわたし自身が有罪であると認めてしまうことになる。わたしは無罪なのだから、ヒゲを生やさぬわけにはゆかぬ！

さまざまのタイプの天神縁起絵巻がつくられた。

ヒゲの有無についていうと、「われは無罪なり」との意味の告祭文を書いて太宰府の天拝山（てんぱいざん）にのぼり、七日のあいだ天道に祭文を捧げて祈ったあとで絵巻に登場する道真はほとんどヒゲを生やしている。

七日目に祭文がかれの手から離れて雲の彼方に飛んでいったとする天神縁起絵巻（建保本）があつて、これはたぶん道真の死と、天満大自在天神の神号をうけて天神となることの暗示であろうから、天神の道真はヒゲを生やしている設定が固定化された。

天拝登山の以前はどうかというと、ヒゲを生やしたのもあり、剃つたのもあり、ばらばらだ。

生身の道真のヒゲの有無、それははどちらでもかまわない。天神の道真にヒゲがありさえすれば、生身の道真にヒゲがあろうとなかろうと、どっちでもかまわないということ。

ヒゲあつてこそ、肖像の道真は天神さまである。

ヒゲがない肖像の道真はただの道真であつて、天神さまではない。

#### （10）道真は僧侶

菅原道真を、というよりも道真の天神さんを、というのがいいだろう、道真の天神さんを僧侶に見立てるころみもあつた。天神縁起絵巻のなかには佛教にかかわる説話や光景が多いから、道真を僧侶とするところみがかならずしも荒唐無稽とはいいきれない。

滋賀県の大田神社にはお坊さんの姿の天神さんの、高

さ二七・九センチの座像がある。製作は室町時代、将軍が足利義量（一四二四）の応永三十一年（一四二四）。

お坊さんの天神さんだから髪の毛もヒゲも剃って、つるつる頭、つるつる顔の天神さんだ。胎内には法華経や佛頂尊勝陀羅尼、金剛般若波羅蜜経などが納められている（『天神さんの美術』）。

（11）銀の毛抜

ヒゲは手入れが必要だ。

手入れなんかヤボである、ボヤボヤだろうがモジャモジャだろうが伸びるままにしておくのが自然美のルール、ハイセンスなのだとする意見はありうるけれども、クチヒゲを伸びたままにしておく唇がふさがってしまつて飲食摂取にトラブルがおこる。

ヒゲの手入れは鋏と毛抜。

アゴヒゲは伸びるにまかせる手があるが、クチヒゲは7  
そうはいかないから、鋏で切つて短くする。クチ、アゴ、  
ホホのヒゲは毛抜を使って輪郭を整える。

ヒゲを生やさないひとは、手のひらでクチ、アゴ、ホ  
ホを撫でて、ちよつとも生えてきたヒゲを摘発してク  
イツと引き抜く。

毛抜について、清少納言はきびしい見解を述べる。

ありえないもの、それは鬘に蓄められる婿、姑に  
蓄められる嫁、毛がよく抜けるしろがねづくり（銀  
づくり）の毛抜、主人の陰口をいわぬ従者。

（『枕草子』

意訳）

銀でなければ毛抜がつかれないときまつたわけではな

いが、男のヒゲ抜き、女の眉抜きは深刻な感情と、いうにいわれぬ快感の期待をこめた格別に甘美な行為なのである。

なるべくならば希少高価な材料の毛抜を使って快感にひたりたいから、銀の毛抜が望まれる。

(12) 三條小鍛冶の薙刀

下部(しもべ)とは下男、従者の別称。

下部はヒゲを剃らない、ヒゲを抜かないのが普通だ。

自分専用の毛抜を持ち、仕事の際にヒゲを抜いている下部があるとすれば、それは自分から「わたしは正体を隠している怪しいものですが、気がつきませんか」と世間にむかって挑戦しているしるしだ。

歌舞伎「鬼一法眼三略巻(きいちほうげんさんりやくまき)」は陰陽師の鬼一が秘蔵する兵法書『六韜三略(りくとうさんりやく)』を牛若丸(義経)と鬼若(弁慶)が盗み取り、これをテキストにして源氏の軍力強化を実現し、平家をやっつけようと奮闘するドラマ(『名作歌舞伎全集 第三巻』東京創元社)。

前半のヤマ場は鬼若(おにわか)と名のる小僧が弁慶に変身するところ。

鬼若の姉が乳母に姿を変えて弟の行方を探したところ、播磨の書写山円教寺(しよざんえんきようじ)で小僧をしている鬼若が弟だと知った。

姉は鬼若に、父の弁真の形見の薙刀をつきつけ、「これぞ三條小鍛冶(さんじょうこかじ)が鍛(う)った薙刀ぞ」といって、父の仇討ちを決行せよと弟を激励する。

三條小鍛冶といえば小鍛冶宗近、「じぞり弁慶」では弁慶の五尺八寸の薙刀をつくったとされる、あの宗近にほかならない。

鬼若は紀州の熊野のうまれだ。

熊野権現の別当の弁真が男子出生を権現に祈願し、ある夜の夢に「男子を授ける」との神託があり、目がさめると枕元に薙刀が置いてあった。

願いが神にとどいたと知った弁真はよろこび、妻の妊娠もたしかめられたが、弁真は子の鬼若の誕生をまたずに敵の刃に倒れた。鬼若が七歳のとき、母も敵の刃にかかって死んでしまう。

鬼若は書写山で小僧をやっているが、イヤでイヤでたまらない。そこへ姉がたずねてきて、父母の非業の死を知らせてくれたが、その姉も殺されてしまう。

いまはこれまで、鬼若はほんものの僧になって父母、姉の菩提を弔おうと決意し——ここまでくれば、事態のつぎの展開は読みやすい——鬼若は父母の形見の小鍛冶の薙刀を使ってヒゲと髪の毛を自剃りして僧になり、父の弁真の「弁」と、師の性慶阿闍梨の「慶」をあわせて弁慶を僧号とした。「鬼一法眼三略巻」の前半は「じぞり弁慶」の拡大改変なのだ。

そしてさて、牛若丸と智恵内こと鬼三太の出会いが後半のヤマ場である。

京の今出川の鬼一法眼屋敷の菊畑、下部の智恵内（ちえない）は菊畑の掃除をサボッて床几にすわり、毛抜でヒゲを抜いている。

毛抜でヒゲを抜く習慣の男性は少ないだろうから、説明が必要だ。

ヒゲ抜きはヒゲを選別することからはじまる。このヒゲは抜く、このヒゲは抜かずのこすと選別し、抜くときめたヒゲを毛抜で抜くのがヒゲ抜きだ。

毛抜はもちろんヒゲや眉毛を抜く専用の道具だが、江戸時代——成人男性が月額（月代・さかやき）を剃って

チヨン鬻を結っていた時代——には毛抜で月額も抜いていた。土農工商の身分差にかかわらずない共通のしきたりだ。

月額がどういうものか、映画やテレビの時代劇を観ればわかる。頭の天辺から額にかけて頭髪を半月形に剃りおとし、または抜き、両側と後頭部の髪を結い上げてチヨン鬻にするヘアスタイルが月額。

月額は成人のしるしだから、少年が前髪を落として月額を剃るのは成人式の意味もあった。月額の初剃りはもちろん剃刀でやってもらうが、そのあとは髪結床に力ネを払って剃刀で剃ってもらうか、毛抜を使って自分で抜く。

ヒゲを生やさない習慣の男なのに、なにかの事情でヒゲ剃りができなくてもじゃもじゃヒゲになったり、月額を剃れなかつたりすると、むさくるしい。

むさくるしくても暮らしに支障はないひとと、日ごろの自律が乱れているからむさくるしいのだとして社会的な制裁をうける身分との相違が、ここに出る。

むさくるしいのが制裁につながるおそれのあるひとは身分の高いひとである。いいかえれば、むさくるしくなるのを避けるためにいつも毛抜を携帯して、暇をみつけては月額やヒゲを抜くひとだ。

今出川の鬼一法眼屋敷ではたらく知恵内は下部である。月額の手入れをせず、ヒゲは伸ばし放題があたりまえ、むさくるしいと叱責されない身分の男なのに、仕事をサボって毛抜でヒゲを抜いている。

——ほんとうは身分あるものなのですが、正体を隠すために、わざと下部に扮しているんです。

身分を隠し、鬼一法眼が秘蔵する『六韜三略』を盗み取る機会を狙っているが、ヒゲを抜く習慣はからだに染

みついでしまつて、やめられない。

鬼一法眼はもともとは源氏に味方していたが、保元の乱のあとの源氏劣勢、平家優勢の政情に流され、こころならずも平家の味方に転じた。

ふたたび源氏に味方する日がくるとはかんがえていないが、秘蔵の『六韜三略』は然るべき源氏方の者に手にわたし、平家打倒の有力な資料に使つてほしいと切望している。

病後のからだを養おうと菊畑に出てきた鬼一は、智恵内とはなすうち、智恵内こそ幼いときに別れたままの実の弟にほかならぬと知り、あれこれと智恵をめぐらして、『六韜三略』を智恵内と、智恵内の主人牛若丸の手に渡すことに成功する。

もしかすると智恵内は平家の味方であるかもしれないが、観客は、冒頭、毛抜でヒゲを抜いていた智恵内の姿をおぼえている。智恵内がれっきとした身分の者であり、ウソをいうような男ではないと知っている。

そうであるからこそ、『六韜三略』を智恵内に渡して死んでゆく鬼一の満足の心境もまた理解される仕掛けになつている。

『ヒゲは助六』

第4章「一条院と源満仲 伝家の宝刀 の登場」

(01) 稻荷明神の使い

高天ヶ原から追放されたスサノオノミコトは出雲にあらわれ、十拳剣を揮ってヤマタノオロチを退治した。

オロチの尾から出てきた剣はスサノオからアマテラスオオミカミに献上されて天叢雲剣と名づけられ、皇室の三種の神器のひとつ、聖剣になった。

聖剣は数多くは要らない、一本でじゅうぶんだ。聖剣の役割は物体としての敵を斬るのではなく、神聖の象徴のちからで邪悪を祓うことだから、一本でじゅうぶんのはずだ。

二本以上の聖剣があるなら、それは聖剣みずからによる聖剣の否定だ。

それにもかかわらず、自分で新しい聖剣をつくった天皇があらわれた。六十六代の一条天皇だ。

聖剣に関する天皇の任務、それは聖剣の護持と継承である。聖剣を新しくつくるのは天皇の任務ではない。そもそも、天叢雲剣のほかの新しい聖剣が必要とされることはありえない。それにもかかわらず、一条天皇は新しい聖剣をつくった。

一条天皇は実在の天皇だが、聖剣づくりはたぶん事実ではなく、謡曲『小鍛冶(こかじ)』で展開されるストーリーイである。一条天皇はすでに三条天皇に譲位して上皇となり、謡曲『小鍛冶』には「一条院」として登場する。

一条院に神の夢告があった、「三条の小鍛冶宗近に御剣を打たすべし」と。

謡曲『小鍛冶』の表現は簡潔だが、簡潔な表現の裏で、

深刻このうえない、容易ならざる事態が進行していた。皇室の聖剣が聖剣のはたらきを失くなり、そのために人間の世が壊滅の危機に瀕していた。

人間の世に危機がせまっているのを、人間は知らない。そもそも『小鍛冶』は、人間には危機を悟る能力がそなわっていないのを前提とするドラマなのだ。

そうであるからには、神が人間に危機切迫の状況を示してやらねばならない。

神は一条院を通じて人間に警告したのである、「新しい聖剣をつくって邪悪を祓いのけ、正義の道をひらくべし。そうしなければ世の破滅はふせげぬぞ」と。

神託をうけた一条院は使者を小鍛冶宗近に遣わし、「新しい聖剣をつくれ」と院宣（いんぜん）をつたえさせた。小鍛冶宗近の聖剣鍛練がはじまるわけだが、鍛練のいきさつはあとにまわし、はつきりしておかねばならぬことがある。

神託がくだったのが一条 天皇ではなく、一条 上皇だったのはなぜか？

第一義的な意味での皇室の代表は天皇だとすれば、神は一条上皇ではなく、一条天皇に新しい聖剣の製作を命じるべきではなかったのか？

一条上皇の政治に特筆大書しなければならぬ美点があり、それは天皇在位のあいだの政治を数等上回るものだという事実でもあればともかく、そんな事実はない。

一条天皇の代は藤原道長の全盛期であり、天皇は朝政にはほとんど関与できぬまま三条天皇に譲位し、わずか十一日後に亡くなった。天皇としてはともかく、上皇としての存在実態はゼロに近い。

おおげさを承知のうえでいうなら、藤原氏に邪魔されてなにもできなかった、それだけが一条上皇の実態だ。



そういう一条上皇に、神はなぜ、世の破滅の危機が迫っていることを教え、危機の回避あるいは危機からの脱出のために新しい聖剣をつくれと命じたのだろうか？

なぜ、天皇にではなく、上皇に？

謡曲『小鍛冶』の作者が混乱、錯覚していたとはかんがえられない。一条天皇と一条上皇との相違をはつきりと認識したうえで、神が一条上皇に聖剣製造の勅命をくだしたストーリーイを書きあげた。

混乱も錯覚もない。

天皇にはアレ、上皇にはコレと、明確な役割分担を設定したところに神——作者の凄腕がある。

アレ——一条天皇よ、あなたには退場してもらわなくてはならない。藤原の横暴に押されたとはいえ、朝廷政治の規模縮小、威勢減退をまねいたのはあなたの失政である。であるから、皇室の威厳を維持するはずの聖剣が機能を失い、新しい聖剣を製造しなければならぬ事態となった。新しい聖剣をつくる聖なる仕事がだれに命じられるのか、気になるではあるうが、あなたではないこと、それはあきらかだ。

コレ——一条上皇よ、新しい聖剣製造の聖なる仕事を、あなたに命じる。天叢雲剣の聖なる機能を損なった天皇としての失政、これをとりかえさぬまま譲位して上皇となって新しい聖剣をつくるのは無責任ではあるまいかと自己嫌悪におちいることもあるだろうが、悩むことはない。以前に天皇であったことは忘れる、それが上皇として、神にたいする最低の義務である。脇目をふらずに聖剣製造の義務を遂行してもらいたい。

そして、さて、小鍛冶宗近は院宣に服して聖なる御剣を打ちたいとおもうが、聖なる御剣を打つにふさわしい相槌役がないために、ここらならずも辞退する。

「辞退とな！ 院のおめがねにかなって御剣を打てとの院宣、ありがたくおうけするのが当然のところ、なにゆえに——」

「ご指名にあずかったのは望外のよろこびながら、聖なる御剣を打つには、われに劣らぬ器量の相槌役（あいづちやく）が不可欠でございます。その相槌役が、ただいまはおりませぬ。こころならずも「辞退いたさねば——」

「三条小鍛冶宗近ともあるうものが、相槌役の不在になやまされておるとは信じられぬ。なんとか、ならぬか」

上皇の使者がなおも強要するので、やむなく宗近は「このうえは奇蹟にお頼りするしかございませぬ」と、氏神の稻荷明神に祈誓した。

宗近の祈誓にこたえ、稻荷明神は神託をください。

「主上の恩恵によって、みごとに御剣は打たれるであろう。一心にわれを頼め」

宗近の祈りのあいだに、ヤマトタケルノミコトが草薙剣（天叢雲剣）を揮って東国の強敵に打ち勝ったいきさつが語られ、稻荷明神は宗近に告げる。

「汝が打つ御剣も草薙剣に劣らぬ名刀になるにちがいない。安心して家にもどり、御剣を打つ壇をつくって浄（きよ）よ（め）、われを待つべし。神通力を身につけたわれである、われが汝にちからを付けてやろうぞ」

宗近は御剣を打つ壇をつくった。

七重の注連縄をはって不浄を祓い、本尊を四方に掛けて幣帛をささげ、祈って壇にのぼった、そのとき、

「いかにや宗近、勅の剣、いかにや宗近、勅の剣、

打つべき時節は虚空に知れり。頼めや頼め、ただ頼め」

虚空に声がしたかとおもうと、ひとりの童子があらわれて壇に上がり、宗近に三拝して膝をくずし、

「さて、御剣の鉄の用意は――」

宗近は恐悦、用意の鉄をとりだし、相槌役を導く最初の一打をハッタと打てば、相槌の童子がチヨウと打つ。ハッタ―チヨウ―ハッタ―チヨウと打つ槌の響きが天地をゆるがした。

かくして御剣はできあがった。

表には「小鍛冶宗近」と刻み、相槌の童子の正体は稻荷明神のお使いの狐だから、裏には「小狐」と刻んだ。

小狐の刃には乱れ雲の模様がみえ、神器の天叢雲剣にもこのような乱れ模様がみえるとつたえられからには、小狐丸も天叢雲剣に劣らぬ新しい聖剣であることが証明された。

童子は小狐丸を勅使に捧げ、「これまでなり」と告げて雲にとびのり、稻荷の峰にもどってゆく。

京都の東山三条のすこし東、北側のせまい小路の奥に相槌稻荷明神があり、宗近と稻荷明神の化身の童子が一条院の聖剣を打った跡地とつたえられる。

(02) 源(多田) 満仲

謡曲『小鍛冶』はフィクションだ。

フィクションに託された作者の意図をさぐるのはヤボだが、『小鍛冶』にかぎっては作者の意図をさぐらずにはいられない。

われらにたいして作者が、「このところをこういうふうにしたのはなぜか、探りたいとはおもわないのかね！」

そそのかし、挑戦しているのではないかとさえ、おもわれるから。

たとえば、小狐丸をつくる天皇として、なぜ一条上皇（天皇）がえらばれたのか、ほかの天皇（上皇）がえらばれなかったのは、なぜなのか、といったことなど。

なぜか、なぜなのか——かんがえているうちに、ヒントのようなものが浮かんできた、源（多田）満仲に関するところがあるので、源（多田）満仲に

『新潮日本人名辞典』では源満仲についてつぎのように述べられている。

延喜一二〜長徳三（九一二〜九九七）平安中期の武将。源経基の長男。母は橘繁藤の娘（異説に藤原敦有の娘）。春宮帯刀、左馬権助、左馬権頭、春宮亮などを歴任、伊予・摂津・武蔵・信濃・下野・陸奥などの守を歴任し、従四位下鎮守府將軍にまで昇った。摂津守を契機に摂津多田に住し、多田源氏の祖となった。摂関家に接近し、安和二年（九六九）橘繁延・藤原千晴を密告し、これが安和の変に発展するきっかけとなった。また寛和二年（九八九）花山天皇出家事件では警固にあたった。同年出家。

必要十分な記述である、「花山天皇出家事件では警固にあたった」のところに、ヒントのようなものがひっかかっている。

冷泉天皇の第一皇子、師貞親王が円融天皇の譲位をうけて永観二年（九八四）に即位した。六十五代の花山天皇である。

女御の祇子（しし）が妊娠八ヶ月で亡くなり、花山天皇は懊惱する。

天皇の精神の裂け目に右大臣の藤原兼家がつけこみ、「ともに出家いたしましょう」と欺き、誘った。

花山天皇を騙して譲位、出家させ、孫の懐仁親王の早期即位を実現して天皇の外戚の椅子におさまるのが兼家の魂胆だ。懐仁親王の母は兼家の娘の詮子、円融天皇の皇子で花山天皇の皇太子である。

寛和二年（九八六）六月二十三日、夜のあけぬうちに天皇は内裏を出て東山の花山寺にはいり、剃髪出家した。兼家はもちろん知らん顔をきめこみ、出家などしない。

天皇が内裏を出るとすぐに三種の神器は皇太子懐仁親王のもとに遷（うつ）され、親王が即位して六十六代一条天皇になる。

内裏から花山寺までの行幸を警固し、邪魔がはいらぬようにしたのが満仲だった。花山天皇が気持を変えて、「譲位はせぬ、出家もせぬぞ。内裏にもどる」というなら、それを暴力で押さえこむ荒技が満仲に期待されていた。

満仲の警固があつたからこそ花山天皇の譲位、剃髪出家、懐仁親王の即位が実現した事実。

もうひとつ、これは『新潮日本人名辞典』には書かれてはいないが、満仲は苦心のすえに二本の銘刀をつくり、これが皇室とは別の次元の、武家の聖剣ともいうべき流れの祖になった伝承がある。武家の聖剣の祖の一本が髭切（ひげきり）もう一本が膝丸（ひざまる）と名づけられた伝承は『平家剣巻』としてまとめられている。

満仲の活躍があつたからこそ一条天皇の即位が実現した事実を念頭において、髭切と膝丸を合わせれば、小狐丸にならないか？ 小狐丸を二分すれば髭切と膝丸にならないか？

一条上皇と多田満仲が聖剣とともに登場してくる、そ

れが聖剣伝承の神髄にちがいない。

(03) 『平家剣巻』

一条上皇の境遇を、やや詳細に検討してみる。

藤原氏の諸流のうち、北家の政治力が格別に強烈であった。

清和天皇の代に藤原良房が人臣で最初の摂政になったのを皮切りに、摂政と関白は藤原北家の世襲の役であるかのごときありさまになった。

藤原氏の有力者は自分の娘をつぎつぎと後宮に送りこみ、皇子を産ませて自分は外戚となり、摂関の職を独占する。

一条天皇はわずか七歳で即位した。母方の祖父、つまり外戚の兼家は摂政となった。

兼家の娘で天皇の生母の詮子(せんし)は皇太后となり、兼家のもうひとりの娘の超子と冷泉天皇(63代)とのあいだに生まれた居貞親王は一条天皇の皇太子となり、兼家の孫娘の妍子(けんし)が皇太子の後宮に入内した。兼家は一条天皇の皇室を丸抱えした。

兼家が亡くなったあとは子の道隆、道兼が摂政、関白となり、道長が内覧の右大臣、左大臣を歴任するときまった時点で藤原氏の権勢は頂点に達した。

道隆の娘の定子は入内して一条天皇の中宮となっていたが、さらに道長の娘の彰子も入内した。天皇ひとりに中宮ふたり、異例の事態になったが、道長は定子を皇后、彰子を中宮とする策を講じた。

定子、彰子の後宮には紫式部や和泉式部などが女房として仕え、はなやかな宮廷文化の華が咲くが、皇室の在り方としては異例だ。異例のかたちの皇室の、異例のかたちの存在の一条天皇を、どのような視点から観るの

が正しいか——最初に模範をしめしたのが謡曲『小鍛冶』であり、『小鍛冶』を遠方に、多田満仲を手近に置いた観察と思案の結果が『平家剣巻』になったにちがいない。一条天皇——『小鍛冶』——多田満仲——『平家剣巻』をつなぐのは聖剣という名の紐だ。紐の先端にはスサノオが、こちら側の末端に近いところに曾我兄弟や源頼朝、花川戸助六が、そのまた手前に二十一世紀のわれわれがいる。

(04) 小狐・髭切・膝丸

一条天皇が上皇「一条院」として『小鍛冶』に登場する、これが多田満仲と一条天皇をつなぐ最も濃厚な縁である。

一条天皇は寛弘八年(一〇一一)六月十三日に67代三条天皇に譲位し、六月二十二日に亡くなったとされている。十三日から二十三日まで、わずか十一日間の上皇在位だった。

十一日間だけでは上皇とはいえない、なんていうことはないから、まさしく一条院は存在した。

存在はしたけれども、上皇として何をしたかといえれば、おそらく、何もしていない。

何もしなかった上皇であること、満仲にとって、これがなによりもありがたい。

現実には何もしていない一条上皇を幻想の世界に移せば、どんなことも可能だ。

現実の天皇ではありえない聖剣づくりも、幻想の上皇としてならば可能だ。

幻想の世界の上皇の一条院は皇室の新しい聖剣の小狐丸をつくった。

一条院の聖剣幻想を土台として、満仲は武家の聖剣の髭切、膝丸をつくった。

満仲は皇室のメンバーでないどころか、せいぜいが中級貴族だが、聖剣製造を共通点として、一条上皇と並立する存在にのしあがろうとする。

(05) 軍事専門の新興貴族 源満仲

多田満仲はどのような存在であるか。

五十六代の清和天皇の六番目の皇子を貞純親王といい、貞純親王の子が経基である。

清和天皇の第六皇子の系統の孫だから、基経は六孫王(ろくそんのう)と通称された。

六孫王経基が武蔵介として赴任していたとき、徴税をめぐって足立郡司の武蔵武芝とのあいだに争いがおこり、そこへ常陸の平将門が介入して、争いは私闘のレベルから変質して朝廷にたいする反乱の色彩をおびた。

だれが敵で、だれが味方か、判別のつかぬ混乱状況になった。承平五年(九三五)にはじまった騒乱だから、承平の乱とよばれる。

経基は混乱を避けて山地にかくれたが、調停しようとする将門の意をくんだ武芝が後を追ってきたのを武芝に攻撃されると誤解して京都に逃げかえり、「平将門が反乱をおこしました」と報告した。

このころ経基は「源」の姓を下賜されたい。皇室の藩屏族から中級の貴族、いうならば軍事官僚に移籍した。

平将門が経基の報告を知って怒り、事実を偽って告訴したことに對抗する誣告罪で経基を訴えた。

経基は有罪と判定され、禁固処分となった。軍事官僚としての経基のスタートは芳しくはない、汚れたスタートだ。

ところが、常陸の政情は激変し、平将門はほんとうに



反乱をおこしてしまう。

京都における経基の評価は一転上昇、将門の反乱を素早く報告した功労者として従五位下、大宰権少弐に叙任される榮譽にあずかった。

おおざっぱにいうと五位から上が上級貴族、五位より下が下級だから、源経基はともかくも上級貴族の末端に席をしめた。

将門を追討する征東大將軍に藤原忠文が任命され、経基は五人の副將軍のひとりとなって遠征したが、出発してすぐ、将門は下野掾・横領使の藤原秀郷と、将門の従兄弟にあたる平貞盛によってあっけなく敗退する。将門追討作戦で、経基は戦功をあげられなかった。

将門とほとんど同時に、前伊予掾の藤原純友（すみとも）が西海で反乱をおこした。天慶二年（九三九）のことだから、将門の反乱とあわせて承平・天慶の乱とよばれる。源経基も将門鎮圧軍の指揮者に任命されるが、東国の反乱とおなじく、たいした戦績ものこさぬうちに純友は撤退する。

東国でも瀬戸内でも戦功をあげられない経基だが、事実とは裏腹に、武人としての名は高めた。将門追討のあとで大宰権少弐に任じられ、純友追討では重要な役割をあたえられた。

著しい戦功はあげなかったが、肩書だけで戦闘力のない公卿の武官よりは戦場における行動が実務的であり、武官の上司にたいする態度がよろしいと評価されたのだろう。

それがつまり、軍事専門の実務家、武人ということだ。武官はあくまでも官僚であり、法の範囲内ではしか行動しない、行動できないのに対比して、かなりの程度まで自主独立の判断で行動する勢力、それを評して武人とよ

ぶようになった。武官の軍事行動の下請け業者とかんがえればいい。

従五位下、大宰権少貳の経基はれっきとした官僚である。大宰権少貳としての公務遂行を優先すべき義務があるが、それよりは、自分より上級の官僚とのあいだに軍事行動請け負いの提携をむすんで実行することを優先する、これが武人だ。

(06) 中央政界に登場する満仲

藤原純友の敗退は天慶四年(九四一)、その二十年後の天徳四年(九六〇)、経基の嫡子の満仲(みつなか)が政界に登場する。

父の経基が手をつけた武人化の途をさらにおしすすめ、軍事行動なら武門源氏の満仲に請け負わせるのが効果的で安上がり、そして安全だと官僚におもわせるようにしたのが満仲だ。

武人として名をあげたのは満仲だけではない。承平・天慶の乱では源経基に勝る功績をあげた平貞盛や藤原秀郷(依藤太秀郷)も武人として評価された。

満仲や貞盛は京都政界での一定の地位をたもちながら武人化の途をすすむが、秀郷はもっぱら下野(しもつけ)に住んで上京せず、地方官に任命されはしたが、政界での地位も無に等しかった。

秀郷の子の千晴が上京し、経基の子の満仲と勢力をあらそうことになる。

満仲の政界登場のいきさつはつぎのようなものであった。

天徳四年の秋、平将門の遺児が上京するという噂が出た。

将門の遺児が単身で上京するはずはない、数十、数百

の家来をひきいているにちがいないとおもわれ、京都は不安と緊張につつまれた。

右大将藤原師尹の報告にもとづき、朝廷は右衛門督で検非違使別当の藤原朝忠に命じて一同の行方を探索させた。

公的警察機関の検非違使が探索を命じられるのは当然の処置だが、これとは別に蔵人頭の源延光を通じて源満仲・義忠・大蔵春実などにも将門遺児の探索、逮捕が命じられたのである。

義忠の身分や姓、官職はわからない。満仲の官職もわからないし、春実とは藤原純友追討使主典の大役をつとめ、軍功をあげた大蔵春実だろうと推測はつくが、当時の官職はわからない。警察や軍事の官でないのはたしかだ（熱田公・本木泰雄『多田満仲公伝』多田神社）。

危機が生じたら満仲や春実に命じて、かれらの私的な軍事力を動員する——このような体制ができていたのだ。1  
満仲や春実は武人一族の当主として朝廷と契約していた。

昇進の天井が低い中・下級の公家のなかには、

——満仲や春実のように、われらも正規とはちがう、別途による昇進を目指すべきではないのか。

一族そろって武芸の稽古に精出す中・下級公家が、ここ、あそこに目立ってくる。平高望の孫、将門の弟の将平を祖とする一統が満仲のあとを追い、やがて肩をならべる形勢になるはずだ。

中・下級公家の声望をうけて満仲や春実の盛名はますます高まり、おおげさにいえば、軍事・暴力・警察行為が問題となれば満仲や春実が登場しなければ解決がつかない、そういう状況が京都の政界のなかに生じてきた。

天皇や公家のだれかと軍事力提供の契約をむすび、天皇や公家のために戦って勝って恩賞をうける。保元の乱

からはじまる政争で武人の演じた役割がこれであった。

武人は然るべき官職に就いてはいたが、それはあくまでも、有利なかたちで軍事力発揮の機会を獲得するための条件にすぎなかった。

歌舞伎十八番の「鎌髭」では平将門の遣児が「六部妙典、実は將軍太郎良門」として登場する。

奇想天外の筋だから将門の遣児の入京も想像の産物だともいやすいが、想像ではない、遣児入京の噂は事実だった。

将門遣児の入京の噂を下地に、将門追討作戦で活躍した俵藤太秀郷の子の千晴を「下男茂作、実は俵小藤太守郷」として登場させ、剃刀の代役の草苅鎌と良門のヒゲの組合せによつて、観客の関心を、舞台には登場しない源満仲の幻想にひきこむ、なんともみごとな作為だ。

(07) 満仲とスサノオ

経基が亡くなり、満仲は一家の主となった。

左馬助や武蔵権守をへて、康保二年(九六五)には村上天皇の鷹飼に任命された。これは五位相当の官である。

基経の領地がどこにあったのか、はつきりしないが、満仲は摂津の多田を領地として支配することになる。永観元年(九八三)、満仲は常陸介から摂津守に転任する。摂津守就任と多田領有は関連があつたにちがいないが、江戸時代に編纂された『摂州河辺郡多田院縁起』では満仲と多田の関係がスサノオノミコトと出雲の関係に重ねられている。満仲と多田、スサノオと出雲の関係に共通するものは何かといえ、いうまでもない、剣または武器一般だ。

安和元年(九六八)、満仲が摂津の住吉神社に参詣したところ、夢に明神があらわれ、告げた。

「われは白羽の鏑矢（かぶらや）を射る。この矢の立つところが汝の住むべき地である」

明神の射た矢は多田に届いた。

多田には湖があり、九頭のオロチが住んでいた。

満仲がオロチを退治すると、湖は干上がって平地となったので農地を開拓して領主となり、満仲と名のつた。

オロチの尾から剣があらわれて、といった筋書きならばスサノオのオロチ退治とそっくりだが、そうではない。そうではない事情は、おおかた、つぎのようなことだ。

第一に、それまでの満仲の人生に特定の剣や太刀が出現せず、したがって、特定の剣の物語は語られなかった。

第二に、満仲には皇室の聖剣に関係する意志がなく、新たな武家の聖剣の創造者となることに意識を集中していた。

皇室の聖剣創造者のスサノオを横目にみながら、武家の聖剣創造者としてスサノオにならぶ存在になろうとしていた。

これはもちろん、現実の満仲の意志がどうであったかにはかかわらない。あくまでも幻想、伝承の世界の満仲の意志である。

源満仲よ。あんたがなろうとしていたのは武家の歴史のスサノオノミコトだったのだね？

實在の満仲は、後世のわれわれから、このように質問してもらいたいと切望しているはずだ。

皇室の歴史の第二のスサノオではなく、武家の歴史の第一のスサノオになろうとしていた。

(08) 安和の変

安和二年（九六九）三月、政界に衝撃的な事件が勃発した。『日本紀略』によると、衝撃の強度は「ほとんど天慶の大乱のごとし」であった。平将門と藤原純友の東

西同時反乱のときとおなじ衝撃が政界を襲ったという。

醍醐天皇の皇子、左大臣の源高明（たかあきら）が謀叛の罪で配流された。名目は大宰員外権帥への左遷だが、実質は流罪である。「安和の変」という。

高明に謀叛の意志や計画があつたのか、どうか、などと推測するのは意味がない。この時代、謀叛の意志ありと密告されたら最後、否定する術はない。

高明を密告したのが多田満仲であつた。

満仲の密告をうけた藤原師尹が中心となつて捜査陣が組織され、高明の一味と目された面々がつぎつぎと逮捕される。

満仲の弟で検非違使の満季が相模前司の藤原千晴を逮捕した。平将門を征伐した功績で名をあげた秀郷の子の千晴は、上京して有力政治家との関係を深め、満仲のライバルになりかけていたが、いま、こうして肅清された。政変劇のシナリオを書いたのは、失脚した高明にかわつて左大臣、左大将になつた藤原師尹にちがいない。

密告者の満仲は正五位下に昇進した。師尹と満仲のあいだに、高明や高明味方が反抗すれば満仲の武力で制圧する默契があつたと推測してまちがいはないだろう。

「安和の変」でふたつの花が咲いた。

ひとつは藤原氏の政権独占——他氏排斥——が完了したこと、もうひとつが武門の諸家のなかで満仲が格別の地位を手に入れたこと。満仲による他家排斥といつてもいい。

ふたつの花がかさなつて、ひとつの実をむすぶ。花山天皇の退位、剃髪出家である。

（09）動揺する現実よりも確固たる原理

満仲は三人の息子を持った。

頼光——但馬・伊予・摂津など大国の守を歴任し、摂関政治の頂点をきわめた藤原道長の従者として仕えた。

渡辺綱をはじめとする四人の武勇の家来は「頼光の四天王」とよばれ、酒吞童子を退治したはなしが伝説として語られるが、頼光自身は武人よりは典型的な受領（ずりょう）の面が強い。武門源氏嫡流、多田源氏の後継者

頼親——大和守に任じられたあと、摂津守を望んだが実現しなかったという。大和源氏の祖となった。

頼信——鎮守府將軍になり、上野・石見・伊勢・甲斐・美濃・河内などの国守をつとめた。

長元元年（一〇二八）に上総の平忠常が反乱し、平直方が追討使に任じられたが、失敗。頼信は直方の後の追討使として派遣されたが、忠常は戦わずして頼信に降伏した。

祖父の基経からはじまる武家としての軍事實績は、満仲の三人の子のうち、頼信に最も強く継承されたといえる。

頼光と頼親の二流がはやく衰えたのにたいし、頼信の河内源氏は頼義——義家——義親——為義——義朝とつづき、義朝のつぎの頼朝が征夷大將軍になって相模の鎌倉に武家政権を樹立する。

#### （10）武家政権の存在原理

河内源氏が鎌倉に武家政権を樹立できたのは、なぜか？

軍事力が強かったからだと答えれば正解だが、河内源氏の面々にとっては、これでは充分ではない。

軍事力の強弱は敵対勢力にたいして相対的なもの、決して絶対的なものではない。いま現在では最強であっても、その最強を踏み台にして反対勢力が優勢になるおそ

れがある。

つまり軍事力とは不安の源であり、源頼朝をはじめとする河内源氏の末裔は不安を安心に変える装飾をしなければならなかった。

不安を安心に変える装飾、それが源満仲を伝説の栄光で輝かせることだった。

満仲が武勇の振る舞いを何度も演じられたのは 現実に強かったから ではなく、強い原理に支えられた存在であったから である——この伝説をつくれればいい。

頼りになるのは確固とした原理である、動揺する現実ではない。

満仲が強い原理に支えられた存在であったことを証明するもの、それが武家の聖剣の髭切と膝丸だ。

(第4章・終)



『助六のヒゲ』

第5章「髭切・膝丸」

(01) 皇室の聖剣、武家の宝刀

一条上皇は皇室の聖剣、小狐丸をつくった。

源満仲は武家の聖剣の髭切と膝丸をつくった。

だが、さて、ここで言い訳。

聖剣とはクニのもの、皇室にだけ特有のものだとすれば、満仲が聖剣をつくる ことはありえない。

武家の世界は 国——クニ ではなくて 家——イエ

だから、武家がもつのは聖剣ではなくて宝刀(ほうとう)、宝剣(ほうけん)というのが正しい。「伝家の宝刀をぬく」という、あの宝刀、宝剣である。

皇室は聖剣、源氏は宝刀と区別して書けばいいわけだが、さりとて、割り切って区別するのが正しいとは断言できない事情もある。

満仲は聖剣をつくりたい、聖剣を所有したいのに、天皇ではないから不可能だ。

やむをえず、聖剣ならぬ宝刀をつくって、

——これが聖剣ではなくて宝刀なのは口惜しいが、ただの宝刀ではない。聖剣になる日をめざして永久に昇華しつづける、格別の宝刀なのだ！

決意して肝に銘じる。

髭切も膝丸も、満仲のこころを我がこころとして日夜精進、みずから昇華をつづける決意をかため、緊張に震える。

満仲と髭切と膝丸、三者が三者とも純朴である、せつないほどに純朴なのだ。

皇室の聖剣ははじめから至上の位置にあって固定的である。だから昇華はしない、昇華の必要がない、昇華は

不可能。

武家の宝刀の出自は卑賤だから、昇華することによってしか存続できない。聖剣と宝刀の決定的な相違だ。

であるから今後は、時と場合によって、「武家の聖剣」と「武家の宝刀」の二様を使いわけるつもりである——  
——と言いついておく。

では、さて、新しい聖剣をつくった一条上皇、宝刀をつくった満仲、どちらが先、どちらが後なんだろうか？  
伝説であつて歴史ではないのだから時間の先後はどうでもかまわない、といつてすませるわけにはいかない。  
時間の先後にこだわらざるをえないから伝説が発生した、ともいえるわけだから。

安和の変と花山天皇譲位出家事件で存在を誇示した源満仲に、藤原氏にとってかわる新たな脅威を感じたのが一条上皇だ。

——藤原氏のケシカラン介入の結果として先帝（花山天皇）が譲位させられ、われ（一条天皇）の即位となった。先帝が藤原に欺かれた結果としての即位をわれ自身の慶事としてうけとめるべきか、どうか、それが問題だが、それとは別に、花山天皇を欺いた藤原氏に追隨した源満仲とやらもうす武家は警戒しなければならぬ。  
藤原氏の朝廷介入ははるかなるむかしにはじまったこと、いまさらなんといおうと、なにも変わらないが、武家はそうはいかない。新しいだけに、藤原以上に強力なちからで攻めこんでくるおそれがある。

その証拠に、満仲は武家の宝刀をつくって皇室の聖剣のレプリカとした。

——これを黙認すれば、レプリカのはずの武家の宝剣がほんものの聖剣として威厳を誇る事態にならぬともい

えぬ、放置してはおけぬ！

この認識が一条上皇をして新たな聖剣づくりを決意させたはずだから、満仲が先、上皇が後とかんがえるのはなしをわかりやすくする秘訣だ。

もちろん、逆の事態もありうる。上皇が新たな聖剣をつくったと知った満仲は、はじめは、上皇たるお方がそんな無茶なことをしていいものかなと訝しいものを感じたろうが、すぐあとで、

——そうかつ。古い聖剣を後生大事に継承するのもいいが、だからといって、新しい聖剣をつくってはならん掟はないわけだ！

一条上皇の新・聖剣づくりに触発されて満仲は武家の宝剣をつくった、ともかんがえられる。時間の先後はどうあってもかまわないのではなく、一条上皇を先とするもよし、満仲を先とするもよし、二案それぞれに有効だ。

(02) 擬制であることの悲哀

満仲が武家の宝剣の髭切と膝丸をつくったいきさつは『平家剣巻』または『剣巻』の物語によってつたえられた。

これらは『平家物語』の別巻としてあつかわれてきたもので、長門の壇の浦の源平合戦でうしなわれた草薙剣（天叢雲剣）にまつわる大小の説話をあつめたものが、いつしか一巻の物語として独立したのだらうとかんがえられる。

源氏の姓をあたえられたのは父の源経基ではなくて満仲だと書き、なにやら、この物語はかならずしも事実可依拠するものではありません、そのつもりでお読みくださいよと、後世のわれらに挑戦し、事実にごだわらない姿勢のしるしとして、経基ではなく満仲が源氏の姓を賜

つたと述べる——かのような印象さえ、ある。

源満仲をして髭切と膝丸をつくらせた心情は如何なるものであつたか？

源の姓を賜い、「天下の守護たれ」との勅宣を受けた満仲は、天下の守護たるからには守護にふさわしい名刀を持たぬわけにはいかぬと、宝刀をつくる決意をかためる。

鉄をあつめ、何人もの鍛冶を召して太刀を打たせた。

武門源氏の実質的な初代、そして頭領の満仲である、身辺には武器その他の鉄器をつくる多くの鍛冶師がいた。

だが、かれらの作る太刀は満仲を満足させない。

満仲が悩んでいると、

「筑前国三笠郡の土山に、異国から来朝して評判の高い鍛冶師がおります。このものを召され、太刀を打たせてみてはいかがでしょうか」

「すぐに、召せ」

筑前の鍛冶は何本もの太刀を打ったが、どれひとつ満仲の気に入る作はない。

名誉をうしなつたまま筑前にもどれないと覚悟した鍛冶は石清水の八幡宮に参詣し、八幡大菩薩に、「満仲さまのおこころにかなう名刀を打たせていただきたい」と七日七晩の祈りをささげた。

七日めの夜、八幡大菩薩が示現して、鍛冶に告げた。

「なんじの願いは聴許される。はやく家にもどり、六十一日のあいだ鍛えた鉄で太刀をつくるならば、最上の太刀二振（ふたふり）を得られるであろう」

鍛冶はよろこび、上質の鉄を選んで六十日かかって鍛え、打つと、見事な二振の太刀ができあがって満仲に献納された。

アマテラスオオミカミとはレベルも神格も異なる神で

はあるが、ともかくも八幡大菩薩の加護によつてできあがつたことで、満仲自身は一条上皇の擬制の存在に、二振の宝刀は皇室の聖剣の擬制となりえた。

ところで、さて、みごとな出来ではあつても、じつさに切つてみなければ決定的なことはいえない。

じつは、これが擬制であることの悲哀だ。ほんものなら、切れ味をためさぬうちは聖剣とはいえない、なんていうことはない。

満仲がまず、一振の太刀で罪人の首を切らせたところ、首を切つた勢いあまつて、罪人のヒゲまですっぱりと切つた。この太刀は髭切（ひげきり）と名づけられた。

つぎの一振は罪人の両膝まで切つた。この太刀は膝丸（ひざまる）と命名された。

満仲は髭切、膝丸の二振の太刀の威力によつて武家勢力に君臨した。

（03）ヒゲを切るのは至難の技

出雲のヤマタノオロチの尾から出た剣がスサノオノミコトによつてアマテラスオオミカミに献上され、皇室の聖剣天叢雲剣になつたいきさつを、満仲が知らぬはずはない。

皇室の聖剣にならつて武家の宝剣をつくろうと決意したとき、満仲がまつさきを感じたのは、自分にはスサノオに相当するものが存在しない悲哀であつた。

スサノオがいたから、アマテラスはただ、待てばよかつた。待っていれば、出雲のオロチの尾から出た剣を、乱暴者の弟スサノオが献上してくる筋書きが神話のかたちでできあがつていた。

自分をアマテラスに擬する気持が満仲にあつたとしても、いや、あつたにはちがいないが、スサノオ相当者が

いないことには事態は一步も先にすすまない。「われにはスサノオ相当者がいない」と気づいたとき、満仲の、いや、武士総体の歴史の悲哀の歴史がはじまる。

——— そうであつたか。われは、自分でスサノオの役も演じなければならぬのだ！

剣を献上する擬制のスサノオと、剣をうけとる擬制のアマテラスの二役を演じなければならぬ、これぞ悲哀のきわみ。

しかし、いまさら手遅れだ。満仲は悲哀に耐えて二役を演じ、満仲からあとの武家は、剣を献じる役と、剣をうけとつて宝刀とする役の二役を演じつづけて明治までの長い時間をすごす。

明治のはじめ、武士は消滅したが、あくまでも法制のうえのことにかぎられ、二役を、悲哀の因としてではなく、栄光の幻想の追認行為として演じるひとは消えてはいない。

こういうひとを、ぼくは恐怖する。恐怖するところが、いま、この書を書くエネルギーになっている。

武家の宝剣の悲哀は、アマテラスとスサノオの二役演技のことにとどまらない。

聖剣の擬制としての宝刀であるからには切れ味が神秘的までに鋭くなければならぬとする、俗の次元の条件までひきうけてしまった。これは第二の悲哀である。

罪人の首を切つて切れ味をテストしたところ、罪人のヒゲまで切つた。だから髻切と名づけられた。

長いヒゲや頭髪の一方の先端はしっかりと皮膚に根ざしているが、別の先端はふわふわと宙に浮いている。

両端がしっかりと根づいているならともかく、一方の先端だけでは、微風にさえ、なびく。

柳に風というか、ヒゲに刃というか、めつたなことで

切れるものではないのは長いヒゲを生やしているものの体験的な常識だ。首やアゴの骨を切断するのはなんの造作もないが、ふわふわのヒゲとなると、そうはいかない。めったには切れぬはずのヒゲを切った、世にも稀なる切れ味だから髭切と名づけ、源氏の宝刀とした——このあたりがじつになんともリアルで、リアルだからこそ、哀しい。

罪人の両膝を切ったから膝丸と名づけた、これもまた哀しいはなしだ。

首の骨を切った勢いの刃の下に、脚を折って坐る罪人の膝頭があつたから、そのまま切れただけのこと。これが切れなければ、よほどの駄剣だ。

罪人であれ、無実の者であれ、人間の首を切るのは武士だけの業である。

首を切るのを任務とする武士は、ふわふわと宙に浮くヒゲを刃で切るのがどれほど難しいものか、知っている。かれらはまた、ヒゲを剃るのは簡単だがヒゲを切るのは容易ではないのを知っていた。

武門源氏の祖の満仲が「われらの太刀はヒゲを切ったのじゃ！」と宣言したのを、末裔の武士たちは満腔の敬意を表して歓迎した。ヒゲを剃る機能しかない剃刀にくらべれば、髭切はまちがいに神祕感あふれる剣なのだから。

軽蔑の対象が限定的に、かつ鮮明に提示されてさえいれば、ものごとの権威を維持するのはさほどむずかしいことではない。

(05) 髭切から鬼丸へ改名

髭切、膝丸は武門源氏の宝刀へと昇華する。

満仲の跡をついだのは鬼退治で有名な頼光(らいこう

・よりみつ）である。頼光の家来、渡辺綱・坂田公時・碓井貞光・卜部季武もまた武勇の名があり、頼光四天王（らいこうしてんのう）とよばれる。

京の一条大宮に用事があり、頼光は渡辺綱を使者に任命し、髭切を佩（は）かせた。父の代からつたわる髭切を佩かせるからには、よほど大事な用事であった。

用事はおわり、綱が一条戻橋をわたっていると、橋の東詰から南にむいて歩く美女に声をかけられた。

「どちらへゆかれますか。わたくしは五条へまいります。が、夜も更け、おそろしくなりました。どうか、わたくしを送っていただけませんか」

綱はすぐに承知して下馬し、女を乗せてやり、手綱をとった。

しばらくして、女は、みるもおそろしい鬼の姿にかわり、

「わがゆくさはきは都のうちにあらず、愛宕山こそ！」

「うやいなや、綱の髻をつかんで宙に飛びあがり、綱ともども、愛宕山めざして飛びさろうとした。

宙づりになった綱の頭に浮かんだのは、

——いま、このときのためにこそ、主人頼光はわれに髭切を佩かせなされたのだ！

髭切をすらりとひきぬき、宙を横一線に振ったところ、鬼の片腕を切り取った。綱のからだは、綱の髻をつかんだ鬼の片腕ともどもに北野天満宮の回廊に落ちた。

おなじみ、渡辺綱の鬼退治の一席は、このさき、戻橋ちかくに居をかまえる陰陽師の安倍晴明が出てきてあれこれと説を言い立てるつづきがあるが、それはさておき、ふつう、一条戻橋の鬼退治が語られるときの主人公は武勇の士の渡辺綱であり、髭切はほとんど話題にならない。もともとが長い物語だから、省略が必要になったとき、



まっさきに髭切が削られたのはやむをえない。

ではあるが、タイトルが『剣巻』とか『平家剣巻』と  
なっているのだからわかるように、これはもともと剣がテ  
マの物語なのだ。満仲や頼光、綱は髭切、膝丸を輝かせ  
る脇役であり、脇役が主役をおさえて前面に出てくるの  
は本末転倒だ。

そしてさて、鬼女の腕を切って名をあげた髭切は頼光  
によって鬼丸と名をあらため、いよいよ神秘的な宝刀へ昇  
華する途をあゆむ。

(06) 膝丸から蜘蛛切へ改名

髭切と膝丸の歩みは改名につぐ改名の歩みである、そ  
ういつてもおおげさではない。いつ、どこで、なんと  
う名に変わったか、記憶するのは厄介だ。

ほんものの聖剣の天叢雲剣は、その後のヤマトタケル  
の活躍にちなんで草薙剣の別名をもっている。

髭切、膝丸の頻繁な改名は天叢雲剣が草薙剣の別名を  
もつことの擬制であるのかもしれないが、それにしても  
頻繁すぎる。

罪人の首を切った勢いで、ふわふわと宙に浮くヒゲま  
で切ったから髭切と名づけた、このままのほうが神秘感  
は強烈なはずなのに、と書いた直後に天啓のごとき新鮮  
な教唆にめぐまれた。

髭切も膝丸も、もともと生命力が弱い。

生命力が弱ってきたら、名を変えて新しいスケジュー  
ルに乗せてやる。そうすると生命力がよみがえり、五十  
年百年の時間を生きられるのではないか。もちろん、名  
を変えるにはそれなりの手続きが、つまり新しいドラマ  
をつくるのが必要に迫られる。

頼光四天王の渡辺綱は一条の戻橋で髭切を揮って鬼女

の片腕を切った。そこで髻切を鬼丸と改名したのはいいが、まもなく頼光は原因不明の瘡（おこり）をわずらい、あれこれ手を尽くしても治癒しない。瘡とは間欠熱のひとつ、マラリア熱だ。

四天王がかわるがわる看病してくれるが、夜になり、疲れて眠ってしまった頼光の隙をついたのか、燭台の蔭から七尺ばかりの法師がするするとあらわれ、頼光を縄で縛ろうとする。

「なにものじゃ！ われを縛ろうとは、ケシカラン」  
枕のちかくに立てておいた膝丸をとって切りつけると、手応えがあった。

頼光の怒声に目を醒ました四天王、走って寄って燭台の裏をしらべると、血の流れた跡がある。血の跡は、北野天満宮のそばの大きな塚までつづいていた。

塚のなかに、長さが四尺もある巨大な山蜘蛛が血をながして隠れていた。搦めとつて連れてもどり、鉄の串に刺して河原に立てると頼光の瘡は快癒したので、膝丸を蜘蛛切と改名した。

(07) 家伝の知識

頼光の代がおわって、鬼丸と蜘蛛切は三河守頼綱につたえられたと『平家物語剣巻』はいう。頼光の子が頼国、その子が頼綱だ。

万寿四年（一〇二七）、前上総介の平忠常が上総で反乱をおこし、上総の国府を占領した。

平直方が追討使に任命されたが、三年かかって追討の功はあがらず、更迭された。

後任の追討使となったのが頼光の弟の源頼信である。頼信が攻めてくると知った忠常は必勝の戦略を練った。霞ヶ浦や利根川にあった船をぜんぶ隠して、頼信に徴用

されないようにした。

船が使えなければ頼信は水路を進めず、陸路をおおきく迂回せざるをえない。忠常はそのあいだに防御の態勢をかためる作戦だ。

頼信は、どうしたか？

「浅瀬があるはず。船を使えなくとも、浅瀬なら馬はわたれる」

「浅瀬といつても……どこにあるのか」

いぶかる家来に、頼信は自信たっぷりに説明した。

「東国の湖や内海の浅瀬が、どうなっておるか、すべては家伝として知っておる」

頼信ははじめて東国にきたのだが、東国についての知識は「家伝」として、たっぷりとつめこまれている。どこに浅瀬がある、どこに深みがある、といった知識は先祖からつたえられ、蓄積されていた。

頼信の大軍は霞ヶ浦の浅瀬をおしわたり、防御態勢のととのわない忠常の陣地に襲いかかった。

「頼信の軍勢が、すぐそこまで！」

「そんなはずは、ない。頼信は船を使えぬ。遠回りしなければならぬのだから、こんなに早くやってくるはずはない」

「浅瀬に馬を乗り入れたのです。どこに浅瀬があるか、頼信は知っております。浅瀬をわたって、まっすぐに……」

忠常は抵抗を断念し、名簿みよづぶを捧げて降伏、臣従を誓った。

頼信は戦わずして勝利をおさめ、報賞として美濃守に任じられた（『今昔物語』巻二十五）。

このとき、源氏の宝刀鬼丸と蜘蛛切は嫡流の頼綱が所有していた。傍流（河内源氏）の頼信は宝刀の威力に頼

らず、「家伝の知識」を活かして勝利をおさめた。

(08) 宝刀は嫡流の頼綱から傍流の頼義へ

陸奥の俘囚長として権勢をふるっていた安倍頼時と子の貞任、宗任が反乱をおこした。

陸奥守の藤原登任、秋田城介の平繁成が鎮圧しようとしたが、敗れた。

陸奥守の後任として源頼信の子の頼義が任命され、頼時父子は帰順したので陸奥は平静になったが、それも束の間、天喜四年(一〇五六)に頼時がふたたび叛旗をひるがえし、長期の大戦になった。前九年の役である。

頼義が陸奥守に任命され、陸奥に出征してゆくにあたって、後冷泉天皇は源氏嫡流の頼綱に宣旨をくだし、鬼丸と蜘蛛切を献納させ、あらためて頼義に下賜しようとした。

頼綱は承服しがたい。

「鬼丸と蜘蛛切は先祖の満仲以来、源氏の嫡流たるわれらに伝来の宝刀であります、どうしても手放せましようか。剣をお召し上げなさるなら、わたくし頼綱こそ陸奥守の重職をうけたまわり、宝刀ともども陸奥におもむいて賊徒をたいらげる所存」

「ならぬ。なんじは宝刀を献納すればよろしい」

頼義は勅によって下賜された源氏の宝刀をもって陸奥の戦場にゆき、戦功をあげた。

鬼丸と蜘蛛切は頼義から、子の八幡太郎義家にゆずられた。

陸奥の清原家の内紛が膠着し、またまた大乱になると、義家が陸奥守に任じられ、宝刀二振の威力によって平定した。後三年の役である。

義家の武勇の評判は呪術のレベルにまで高まった。

白河天皇は義家の愛用の弓を枕元において、物怪（ものけ）を退散させる呪具とした（『古事談』）。

白川の水と博奕の賽の目、比叡の山法師のほかはすべてわが意のままになると豪語した白河天皇だが、物怪を恐怖せずにはいられず、義家の弓の神秘に頼って精神のやすらぎを得ていたわけだ。

義家の長子の義宗は若死にし、次男の義親が嫡男となっていたが、対馬守であったときに大宰府に反抗し、白河天皇に任命された追討使の平正盛によって肅清されてしまった。

武家勢力の先頭を走っていた源氏が平氏に追いつかれ、追い越される展開だ。

義家の四男の義忠が嫡流の当主、義親の子の六条判官為義が養子となつて義忠の後嗣となる体裁をとつたが、その義忠が暗殺される事件がおこつた。

犯人捜査がおこなわれ、義家の弟の義綱に嫌疑がかつた。無罪を主張して容れられないのに怒つた義綱は義弘・義俊・義仲・義範・義公らの息子をつれて近江の甲賀に籠もつたが、朝廷によつて義綱征伐を命じられたのがほかならぬ義家の孫、義親の子、義綱には甥にあたる為義であつた。

為義が追討してくると知つた義綱は戦わずして降伏したが、佐渡に流罪されて滅亡する。これもまた宝刀の威力によることだと『剣巻』はいう。

それからしばらく、南都の法師が蜂起し、群れを成して朝廷に抗議しようとした。為義は朝命によつて鎮圧出动し、これまた宝刀の威力によつて法師をおさえた。

為義は義綱追討や南都法師鎮圧の功によつて左衛門尉、さらに檢非違使となり、六条堀川に邸をかまえたから六条判官の異名をとつた。

源氏の棟梁と検非違使の官職は釣り合っているけれども、先祖の事例をかんがえれば、為義がしかるべき国の守に任じられてもおかしくはない。にもかかわらず、為義は国守には任じられなかった。ここに為義の、ひいては源氏の衰退の兆しがみえる。

為義が国守に任じられなかった理由について、『剣巻』はつぎのように解説する。

為義は源氏に縁の深い陸奥守をのぞんだが、朝廷はうけつけない。かつて二度三度と源氏に痛めつけられた陸奥には、源氏にたいする恨みが濃厚であり、いままた為義を守に任命すれば新たな反乱のたねを植えつけかねない。それを朝廷はおそれた。

陸奥のほかの国ならばと内示があつたが、先祖にゆかりの陸奥の守になれないなら、ほかのどんな国も価値がないとして為義が拒否したというのが『剣巻』の解釈だ。為義の強い意志がしめされているが、事實は反対だろう。たとえば為義が「いかなる国の守でもお受けしたい」と望んだとしても、朝廷には応じる気はなかつた。

為義の八男の為朝が九州で反乱をおこし、責任を問われた為義は解官され、家督を長男の義朝にゆづつた。

保元の乱——為義は崇徳上皇方に味方して敗北、子の義朝に処刑されて生涯をおわるのだが、『剣巻』としては、かくもあっさりとして為義に滅亡されては困る。鬼丸と蜘蛛切の行方がきちんと処置されぬうちは、為義を滅亡させるわけにはいかない。

そこでどうするかというと、熊野権現の別当と為義を関係づけることで、鬼丸と蜘蛛切のその後の筋道をつける。

為義と熊野別当が関係をもつにいたったいきさつは、『保元物語』や『剣巻』によると複雑だ。

為義にはおおきな野望があった。六十六人の男子を得て、日本六十六カ国の一国にひとりずつ国守として配置する計画をたてていた。日本の総体を手に入れる壮大なる野望である。

だがしかし、六十六人の男子は無理であつて、男女あわせて四十六人の男女を得たところで止まった。

嫡子の為義朝を熱田大宮司の婿としたほか、熊野別当や住吉神社の神主なども娘の婿とし、そのほかの子にもしかるべき地位をあたえてやった。ここまでは『保元物語』に書かれている、この先についてはなにもいわず、『剣巻』に役目をゆずるかたちになっている。

『剣巻』によると、為義は娘の婿となつた熊野別当の身分、出自が卑賤だとして気に入らず、音信不通になつた。

為義に義絶された熊野別当の履歴について、『剣巻』はじつに詳細にのべる。

はなしは白河上皇の代にさかのぼる。

上皇がはじめて熊野に御幸をしたとき、熊野にはまだ別当役が任命されていなかった。

「熊野権現ともあろう社に別当が任命されておらぬとは、よろしからず。はやく、しかるべき者をえらんで別当とせよ」

むかしむかしの、そのまたむかし、熊野権現が中部インドの摩伽陀（マカダ）国から宙を飛んでやってきたとき、左右の翼の役をはたしたものの末裔がウイ党、スズキ党として熊野の庶務をとりしきっていた。

上皇御幸のおりしも、権現の御前に花を供えて籠もっていた山伏があり、スズキ党が「あの山伏を別当になさ

るがよろしい」と白河上皇に進言した。

山伏は「わが任にあらず」と辞退したが、重ねての院宣が発せられては辞退もならず、別当となって教真と称した。この教真が熊野別当の初代である。「保元物語」では為義は熊野別当を娘の婿にしたとなっていて、すでに別当職が任命されていたように書いているが、それはそれ、ということにして『剣巻』にもどる。

別当は世襲の職だから、妻をもち、子をつくらなければならぬ。

教真に妻をもたせなければならぬ、だれがよいかと詮議になり、候補にあがったのが為義の娘の立田腹（たつたばら）だ。熊野の豪族、立田氏の娘が為義の娘の母だから立田腹と呼ばれたのだろう。

娘が熊野別当の妻となったと知った為義は怒り、嘆いた。

わが娘の婿は平氏との戦いに出陣し、弓矢とつて武功をあげるほどの男でなければならぬ。それがなんと、権現の別当など、先の見込みもない男の妻になるうとは！婿の教真を嫌悪するあまり、娘夫婦と為義は音信不通となった。

(10) 鬼丸は獅子ノ子、蜘蛛切は吠丸と改名

熊野別当の教真と為義の仲が険悪になり、とうとう音信不通になった。

そのいきさつを述べたあとで『剣巻』は、鬼丸と蜘蛛切が奇妙な行動をとりし、手に負えなくなって改名させられる経過をのべる。

そもそも為義が伝え持ちたる二の剣、終夜吠えたることあり。鬼丸が吠えたる声は獅子の声に似たり、蜘蛛切



が吠えたる声は蛇の泣き声に似たりける。ゆえに鬼丸をば獅子ノ子と名をあらため、蜘蛛切をば吠丸とぞ付けける。

夜になると鬼丸、蜘蛛切が吠える。

鬼丸の吠える声は獅子の声、蜘蛛切の吠える声は蛇の泣き声に似ているので、鬼丸を獅子ノ子、蜘蛛切を吠丸と改名したのだという。

なぜ、吠えるのか？

宝刀が理由もなしに吠えるはずはない。

——われら二振の宝刀が夜もすがら吠えるのはなぜか、

かんがえてはどうか？

挑戦されている気配だ。

かんがえてみなければならぬ。

吠えるのは異常行動である。剣にかぎらず、犬でも猫でも、なにかを恐怖するときに吠えるはずだ。

鬼丸と蜘蛛切は、なにを恐怖して吠えたのか？

崇徳上皇と後白河天皇のあいだの軋轢は熱気をはらみ、武力で決着をつけるほかはあるまいとおもわれた。

上皇に味方するか、天皇の軍勢にくわわるか、公家も

武家も去就決定を迫られる。

為義は去就を決しかね、なやみ、悪夢におそわれた。

おびただしい数の重代相伝の鎧——薄金・膝丸・月数・楯無・面高・七熊・八龍などが風に吹かれて四方へ飛び散る夢をみたのである（『保元物語』）。膝丸の名の鎧が出てくる、剣の膝丸とは別に膝丸の名のついた鎧もあったのだ。

重代相伝の多くの鎧が風に吹かれて飛び散るとは不吉である。これは八幡大菩薩が為義に、「上皇、天皇、どちらにも味方すべきではない」と託宣しているのではな

いか。

為義の懊惱が宝刀に伝染し、恐怖の起こることを起こして吠えたのではないか。

われらも風に吹き飛ばされてちりぢりになるのではないか——宝刀は恐怖に耐えられなくなり、吠えた。

宝刀が吠える意味を為義は理解した。為義と宝刀のあいだの信頼と親近の関係は維持されていたのである。

為義は、このままでは宝刀も風に吹かれて飛び散ってしまうと判断し、名を変えることで剣を蘇生させた。

刀剣の改名は、爬虫類や昆虫の脱皮とおなじ意味がある。刀剣が生命力を維持し、成長するには改名が必須だ。

鬼丸から獅子ノ子へ、蜘蛛切から吠丸へ改名された宝刀は新しい生命力を得た。来るべき重要な場面で主役を演じるちからを得た。

(11) 吠丸は為義 教真 熊野権現へと移る

合戦は迫る。

崇徳上皇は執拗に為義を誘って味方にしようとする。

為義がついに後白河上皇に味方する気になったのは鬼丸を獅子ノ子、蜘蛛切を吠丸と改名したことで得た自信ゆえだろう。

そうときいた熊野別当教真は、このような危機のときに義父を助ければ不幸者の名を雪(そそ)げるとかんがえ、一万余騎の軍勢をひきいて上京した。

「この勇者はだれであろうか。これほどの大軍をひいきられる大名が和泉や紀伊におるはずはないが……」

「わしは知つとる。為義殿の娘婿、熊野権現別当の教真にちがいなし。義父に味方すべしと、はるばる熊野からのぼってきたのじゃ」

為義の耳に噂がはいり、しらべてみると、噂どおりの

教真とわかった。

「あの男を嫌い、遠ざけたのはわれのまちがいであった」  
舅と婿とがはじめて対面し、婿のひとりとなりが気に入った為義は引出物として吠丸を贈ったが、教真は吠丸を所有する重荷に耐えられない。自分が持つべき剣ではないとして熊野権現に献納した。

さて為義、吠丸を婿に贈ったのを悔やむわけではないが、満仲がつくつてこのかた、ずーっと揃いだった吠丸がなくなり、獅子ノ子だけになったから、なんとなく落ち着かない気分だ。

播磨から名人鍛冶をよびよせ、獅子ノ子そっくりの太刀を打たせたところ、極々の名刀ができあがった。目貫に刻んだ烏の図が気に入ったので、太刀の銘を小烏（こがらす）とした。

為義は獅子ノ子と小烏の二刀を揃いにして秘蔵していたが、小烏が獅子ノ子より二分ばかり長いのに気づいていた。

獅子ノ子をモデルにして、そっくりおなじ長さ、おなじ形でつくったはずなのに小烏が長い、おかしいことだ、なぜだろうと不審におもいながらも秘蔵していた。

為義はある日、二本の刀を鞘から抜き、障子にならべて立てかけておいた。ちかくを通るひともなかったのに、二刀が倒れる音がした。まさか折れたのではあるまいなとしらべてみると、長いはずの小烏が獅子ノ子とおなじ長さになっている。

柄を抜いてみると、柄のなかで刀が折れ、目貫を突き抜いて重なったために二分ばかり短くなったとわかった。倒れたときに獅子ノ子が小烏を切ったのだとわかったから、小烏の名をあらためて友切（ともぎり）とした。

為義は老いた。

友切と嗣子ノ子を嫡子の義朝にゆずり、隠居してまもなく、ついに保元の乱！

若い義朝は後白河天皇、老いたる為義は崇徳上皇に味方して戦った。

後白河天皇が勝ち、崇徳上皇が敗れた。

勝者の義朝は父であり、敗者でもある為義と五人の兄弟を処刑した。為義の八男の為朝は伊豆に流罪されたが、脱走して反乱をおこし、追いつめられて自刃する。

獅子ノ子を友切と改名したのが為義みずからの悲劇を招いたのではないか。

名は友切だが、その実態は 親切（おやぎり） 兄弟切（えとぎり） ではなかったのか。

（12）平治の乱

義朝は左馬頭（左典厩・さまのかみ）になった。保元の乱の報賞である。

そして——『剣巻』には書かれていないけれども——髭切と友切は為義から義朝の所有にうつった。

保元の乱から二年、公家社会における藤原通憲（信西）と藤原信頼、武家社会における源義朝と平清盛の対立が頂点に達し、通憲は清盛と組み、信頼は義朝と組んでの合戦となった。

武家が主役で公家は脇役、義朝と清盛の対立が通憲と信頼の対立をまきこんだかたち、平治の乱である。

義朝は若干十二歳、自分は髭切を佩き、三男の頼朝には友切を佩かせ、ともどもに出陣して惨敗した。

都落ちした義朝と頼朝は近江の比良で一夜をあかし、氏神の八幡大菩薩にむかって恨み言をのべる。

「むかし、この宝刀をもって政治をおこなえば、どんな

勢力でも服従したものです。それが、いかがです、世も末となつて宝刀の威厳がそこなわれたのか、八幡大菩薩がわれら源氏をお捨てになつたのか、かほどに脆く大敗を喫するとはおもわぬことでございます。

われ義朝の祖父義家は八幡大菩薩の御子として八幡太郎の名をいただき、どんなことがあつても七代まではお捨てにならぬはずが、わずか三代のわれ義朝の代で負けてしまふとは、口惜しい！」

恨み言をいって疲れ、まどろむ義朝の夢に八幡大菩薩が示現し、託宣した。

「われが汝を捨てたのではない。汝が所持する宝刀は、われが汝の先祖の満仲にあたえたもの。はじめの名の髭切、膝丸のままであつたならば宝刀の威厳はそこなわれぬはずであつたが、たびかさなる改名によつて宝刀の機能を失つたのじゃ。

とくに友切の名はよろしくない。友切と改名したゆえに、敵は切らずに友を切る剣になつてしまった。保元の乱で為義が討たれ、為義の大勢の子が殺されたのも友切の名のせいであるぞ。このたびの合戦に汝が負けたのも友切と名づけた咎めである、われを恨むではない。

むかしの髭切の名に戻せば、いずれは頼もしき宝刀となるであろう！」

夢から醒めた義朝、「いかにも、友切の名はよろしくない。さらばむかしの名に戻そう」と決意し、友切の名を髭切に戻した。

(13) 二本の髭切

この時点で、二本の髭切が義朝に所有されていたことになる。満仲がつくつて子孫代々つたわつてきた髭切と、熊野権現に献納された膝丸の代行として新たにつくられ

た小烏が友切に改名され、さらに改名されて髭切となつたから、義朝はあわせて二本の髭切を所有している。

(14) 長田忠致は義朝を裏切った

比良を発つて高島を通りすぎるときに息子の頼朝が一行に遅れ、土地の者に捕縛されそうになった。

頼朝は、父が友切から髭切の名にもどした宝刀を揮つて危機をきりぬけ、ようやく一行に追いついた。若い頼朝が危機を脱出できたのも、友切を髭切の名にもどした果報にちがいない。

父と子は近江の塩津で別れ、それぞれの道をゆく。

義朝は美濃の青墓から尾張にゆき、ふるくからの家来、

長田忠致おさただただむね(おさただただむね)にかくまってもらったが、

忠致は裏切り、騙し討ちで義朝の首を切った。

忠致は義朝の首を持って京都にゆき、平清盛の見参に供して多分の褒賞を要求しが、『平治物語』によれば忠致の期待は実らなかった。

義朝の首を献上した報賞として、清盛は忠致に吉岐国をあたえたのだが、忠致は満足しない。

「義朝はかつての謀反人、平将門や藤原純友にも劣らぬ朝敵でございます。その義朝を討った忠致、義朝の旧領のすべてを拝領するのがふさわしく存じますが、それはならぬとおおせられるなら、現に住まいの尾張一国をいただくのが至当のところ、国の果ての吉岐とはあまりにも無情のご処置、この後の勇みにはなりません！」

忠致の言葉が過ぎ、清盛を怒らせた。

「そもそも汝は罪深い者であるぞ。威勢を張りたいばかりに旧主を裏切ったのは下劣の極み、許せぬところだが、朝敵の義朝を討った功績は消えぬから吉岐一国をあたえ

ることにした。それが不足というなら、はなしにならん！」

清盛の叱責を恐れず、なおも言い張る忠致に、こんどは重盛が宣告した。

「吉岐国をあたえられたのは取り消す。それが不服というなら六条河原にひきだし、手足の指を一日に一本ずつを切り、二十日後に首を鋸で切ってやるぞ」

忠致は命からがら尾張にもどったが、世のひとは、源氏が威勢をとりもどせば忠致は生き埋めになるだろうと噂した。

(15) ニセの髭切を頼朝から奪取して悦ぶ清盛

頼朝は近江の塩津で父と別れ、髭切を持って逃亡の旅をつづけたが、美濃の青墓（あおはか）でとうとう平家の捕虜になってしまう。

逮捕されたとき、頼朝は髭切を持っていた。膝丸の代行として新たに鍛造された小烏が友切を経て髭切と改名された、第二の髭切である。

頼朝を逮捕したとの報告が京都六波羅にとどくと、平清盛は相好をくずして喜んだ。

清盛は長いあいだ、源家の宝刀、とくに髭切を羨望していた。

政治力の差はともかく、武家の宝刀として天下一の名誉にかがやく髭切を所有しないうちは名実共に源家の上位にあるとはいえぬと切齒扼腕していた。

清盛は青墓に急使を派遣し、頼朝に質問した。『平治物語』によれば、清盛の質問の言葉は丁寧そのものだった。

御邊（ごへん）の髭切はいづくに候ぞ

髭切が欲しいばかりの、うそいつわりの丁寧語にきま  
っている、と評するのは清盛の心情を誤解している。

自分は勝者にちがいないが、いくら勝者であっても髭  
切を持たぬうちは頼朝のほうが武家としては上位である、  
くやしいが仕方はない——この心情が清盛をして極上の  
丁寧語をつかわせた、「御邊（あなた）の髭切は、ただ  
いま、どちらにおありでございましょうや」と。

清盛が髭切に執心をもやしているのは頼朝の予想して  
いたこと、いまとなっては髭切を守り通すのは不可能と  
かんがえ、

「青墓の長者大炊（おおい）のもとにあずけております」  
気のすむようにすればよろしかろう、といった調子の  
返答をつたえた。

おりかえし清盛から青墓へ、「頼朝の髭切がそちらに  
あるときいた、供出せよ」と命令が来た。

青墓の長者大炊は、どうしたか。

——清盛のいうままに髭切を供出するのは口惜しい。

たとえ頼朝殿が殺されても公達（息子）は何人もおられ  
る。平家の運命がかたむき、源家の威勢が回復せぬ時期  
はこぬときまったわけではない。そのとき、髭切を源家  
にさしあげれば悦んでいただけ。

清盛に供出せぬと決意し、大炊は策をめぐらせる。

大炊は泉水という名の太刀を所蔵している、髭切に劣  
らぬ銘刀だ。泉水の刀身と髭切の刀身を入れ替え、泉  
水を「髭切をさしあげます、受納ください」と清盛に供  
出する。

清盛は義朝に「まちがいなく髭切か？」と確認を迫る  
であろうから、義朝さまに「まさしく髭切」と返答して  
いただく——こういう作戦を立てた。



大炊の作戦どおりに事態はすすみ、清盛は捕虜の頼朝から「まちがいなく髭切でござる」との確認をうけて、鞘と柄は髭切、刀身は泉水の刀をとりあげ、「大きに悦びて深くおさめた」のだ。

義朝と大炊が投げたエサに清盛は食いついて、針にひっかかった。

(16) 小烏の役割

為義は熊野権現別当の教真に婿引出物(むこひきでもの)として膝丸をあたえ、うけた教真は、我が身には膝丸の存在は重すぎるとして熊野権現に献納した。

為義は新たに太刀を造らせ、小烏の銘をつけて膝丸の代行の太刀としたが、八幡大菩薩の厳しい指摘をうけて髭切と改名した。

小烏は、刀も銘も、まことに不思議だ。

そもそも、なんのために義朝は膝丸の代行品として小烏を造らせたのか？

婿の教真にあたえた膝丸の代行品として造った太刀に小烏の銘をつけたのだが、これがそもそも奇妙、宝刀のルールに違反している。教真の存在が重要だからこそ、伝家の宝刀の膝丸をあたえてまでも味方にひきつけた。

そこまではいいが、手元から離れた膝丸の代行品として新たに太刀を造った、これがルール違反だ。

およそ宝刀というものは、比類のない稀有の存在だからこそ神秘のちからを持ち、発揮しうる。

代行品が造られ、武家の世に通用するのであれば宝刀とはいえない、ただの駄剣にすぎない。

源家の嫡流として伝家の宝刀を継承する為義がルールを知らぬはずはない。

為義は、どうしたのか？

不審を解く鍵は小烏の銘にある。

小烏の銘の太刀を短期のうちに存在させる手段として、あえて 膝丸の代行 と格付けてまで新造の太刀を世に出した。

刀剣そのものではなく、小烏の銘の太刀が必要だった。

(17) 平家の伝家の宝刀 小烏

じつは、平家にも小烏の銘の太刀があった。

平家にも、というと源家の小烏が先にあり、平家は源家を真似て小烏銘の太刀を造ったように誤解されるから、小烏銘の太刀はそもそも平家の伝家の宝刀で、源為義が平家の小烏の銘を盗用したとするのがいい。

伝説によれば、平将門を追討した褒賞として朱雀天皇から平貞盛が賜ったのが小烏だ。以来、平家伝家の宝刀として継承され、平治の乱では清盛の嫡子の重盛が佩いで出陣した。『平治物語』には重盛の勇ましい様子が述べられる。

- 1 2 2 -

左衛門介重盛、生年二十三、赤地の錦の直垂に、櫛（はじ）の匂いの鎧に蝶の丸の裾金物しげく打たせたり。龍頭の甲の緒をしめて、小烏といふ太刀を佩き、切生（きりう）の矢負い、重藤（しげとう）の弓もって、黄鶉毛（きつきげ）なる馬に柳桜を摺りたる貝鞍（かいくら）おかせて乗りたまへり

『平家物語』には、重盛が息子の維盛に「引出物をつかわす」といって錦の袋に入れた太刀を座に出した。維盛は「ありがたい、父からわれに賜る引出物の太刀といえば平家家伝の小烏にちがいない」と悦ぶ場面もある。

平家滅亡のあと小烏の所在は不明だったが、江戸時代、

旗本平貞衡の履歴に「先祖伝来の小烏丸の太刀を將軍家光の御覽に供した」との記録があり（『寛政重修諸家譜』五〇二）、これが行方不明の平家の小烏かどうか、確証はないけれども、現在、皇室の御物として小烏の銘の太刀が保管されているのは事実だそうだ（『國史大辭典』）。

平家の宝刀、小烏の存在は確実だ。

平家の小烏にくらべると、為義がつくった源家の小烏は正体も伝承もアヤフヤ、小烏の銘が世に出たかとおもうとたちまち髭切に変えられてしまっただ（とら）えようがない。

アヤフヤの小烏銘の太刀を、なぜ、源家の棟梁為義ともあろう男が世に送り出したのか？

——平家が先祖重代の宝刀として誇る小烏の太刀なんて、所詮はこんなもの。味方の太刀と衝突して刀身を折るとか、一族のうちに内紛をおこして傷つけ、殺し合うぐらいが関の山の駄剣にすぎない。じつはわたくし、為義も小烏銘の太刀を重宝としておりましたが、はなしにならぬ駄剣とわかって友切とあたためましたが、それでさえ源家の凋落は防げなかったのです。

平家の宝刀小烏の、小烏の銘にケチをつけて平家の凋落の糸口をつくる、それが狙いだった。

（18）頼朝は熱田神宮に髭切を奉納した

『平治物語』は剣の物語ではなく、人間のドラマだ。

平清盛を悪しざまに描くドラマなのだ。

『剣巻』は、ちがう。剣が主、人間が従のドラマだ。

頼朝は近江の草野に身を隠した。

いずれは露顕し、平家の捕虜となって命を奪われるだろうが、源氏重代の髭切は奪われたくない、どうすればよかろうかと思案のすえ、尾張の熱田神宮に奉納するこ

とにした。熱田の大宮司は頼朝にとって母方の祖父である。

大宮司は頼朝の頼みをうけいれ、髭切を受納した。

(20) 新しい擬制

さて、ここでまた新しい擬制の伝説がうまれる。

熱田神宮の神体はヤマトタケルノミコトが献納した草薙剣である。

スサノオノミコトが出雲のヤマタノオロチの尾から取り出した天叢雲剣は、スサノオによってアマテラスオオミカミに献納されて皇室の聖剣となり、垂仁天皇の皇女ヤマトヒメノミコトからヤマトタケルに授けられた。

敵に包囲され、危機におちいったヤマトタケルが天叢雲剣で草を薙ぎ、窮地を脱した吉事にちなんで草薙剣の名がついた。

髭切が熱田神宮に奉納されるいきさつは天叢雲剣伝説の擬制、髭切は天叢雲剣のレプリカ、頼朝はヤマトタケルのレプリカ、そして『剣巻』そのものが『古事記』『日本書紀』のレプリカなのだ。

(21) 平家打倒をめざした頼朝が最初にやったことは？

平清盛の弟の頼盛は平治の乱の報賞として三河守から尾張守に転任した。

頼盛の名代として尾張に赴任した平宗清は美濃の青墓で頼朝を発見、逮捕して京都に送った。

清盛は髭切を切望、あれこれと手を尽くしたはずだが、髭切はすでに熱田神宮に安置され、平家の手にはわたらない。

皇室の聖剣天叢雲剣を神体とする熱田神宮には、清盛といえども手は出せない。

京都の六波羅に捕虜として連行された頼朝をみて、清盛の母の池禅尼が頼朝の助命を嘆願した結果、頼朝は命はうばわれず、伊豆の萑山（にらやま）に流刑の身となった。

それから二十年、頼朝は熱田神宮から鬻切をうけだし、佩刀とし、平家打倒の戦いにたちあがる。

（22）勇者の登場 曾我五郎・十郎

頼朝の軍は京都を占領した。

平家の軍は京をのがれて西走し、瀬戸内海に戦陣をかまえる。

頼朝の弟、義経の水軍が紀州をまわって瀬戸内海に攻めこもうとしたとき、熊野権現の別当湛増（たんぞう）は源氏に味方するときにめた。湛増は教真の子である。

源氏の宝刀の吠丸は為義から別当教真にあたえられ、教真によつて熊野権現に奉納されている。

「義経殿こそ、吠丸をもつべき大将なり」

湛増は権現に祈つて吠丸をうけだし、上京して義経に贈呈した。

義経は吠丸の名をあらため、薄緑とした。

湛増が熊野の山から吠丸を出して京都にはこんだのは、まだ緑も薄い春であつた。ゆえに薄緑と名づけた。

義経の軍は薄緑の威厳によつて平家を殲滅したが、京都に凱旋した義経をむかえたのは頼朝の怒りであつた。

義経は鎌倉にもどつて頼朝に面会、謝罪しようとしたが、鎌倉入りさえゆるされない。

むなしく京都へひきあげる途中、義経は箱根権現に薄緑を献納し、「兄の怒りをやわらげたまえ」と祈つた。

義経の祈りは箱根権現に嘉納されなかつたようだ。

奥州に亡命した義経は、文治五年（一一八九）閏四月

三十日、頼朝に義経退治を命じられた藤原泰衡に攻められ、自害する。

剣を箱根へ進（まい）らせざりせば、かほどのことはあらしものと、ひとびと申しあいけり。剣を権現に進らせけるも運の窮（きわみ）とぞおぼえける

薄緑を箱根権現に献納したのが義経の悲劇をまねいたのだと『剣巻』はいう。

正当な解釈だ。

義経は宝刀の使い方をまちがった。

宝刀とは武家が敵を切り倒すために使うべきものの、そのほかの目的で使うのは邪道だ。

だが義経は、兄頼朝の怒りをやわらげてほしいとの願いをこめて、薄緑を箱根権現に奉納してしまった。

薄緑は義経に裏切られ、無力になり、義経の武運を守るところではなくなった。

義経によって箱根権現に奉納された薄緑、それはまさに苦境のどん底につきおとされたのだ。

兄の怒りを和らげてほしいなどという、とんでもない筋遣いの願望をこめて奉納された薄緑は宝刀であることを否定された。

箱根権現に奉納された薄翠のところに悲願が生じた。

宝刀として蘇生すること、これが薄緑の悲願だ。

蘇生を現実のものとする唯一の方法、それは勇者によって箱根権現の宝庫からひきだされ、勇者の敵を切ることだ。

やがて勇者は登場する、曾我の五郎と十郎だ。

義経が藤原氏をたよって奥州に旅立った承安四年（一

一七四)に弟の五郎が、二年前に兄の十郎が生まれてい  
た。

(第5章・終)

『助六のヒゲ』

第6章「曾我五郎・十郎」

(01) 仇討ち

一に富士、二に鷹の羽のぶつちがい、三に上野の花と咲く——三大仇討ちの最高が富士の仇討ち、これをやつてのけたのが曾我五郎と十郎の兄弟だ。十郎が兄、五郎が弟。

兄弟が生きた筋道は、おおよそつぎのとおり。

伊豆の河津祐通（すけみち）と、おなじく伊豆の工藤祐経（すけつね）とのあいだで、長年にわたる所領争いが絶えない。

争いは激化、祐経は郎党の大見小藤太、八幡三郎に命じて祐通を射殺させた。

祐通の未亡人は遺児の五郎と十郎に「工藤祐経はおまえたちの父の仇敵、祐経を殺して父の仇を討たねばならぬ」と命じ、兄弟は「かならず父の仇を討ちます」と誓った。

未亡人は夫に殉じて死のうとしたが、第三子を妊娠していたので死ねず、周囲の勧めで曾我祐信と再婚して五郎と十郎、のちに御房とよばれる第三子をそだてることになった。だから五郎も十郎も曾我の姓を名のる。

母は兄の十郎が十三歳になった年に元服させたが、十一歳の弟の五郎には「学問して僧となり、亡き父を供養せよ」といって箱根権現（箱根神社）の稚児にした。

それまでは「亡父の仇を討て」といていた母だが、気が変わり、「養父祐信殿の御恩をかんがえれば仇討ちなどするべきではない」と兄弟を戒めるようになってきた。

五郎は箱根権現で学問と修行に励んでいたが、友の稚



児には父から通信があるのに自分には来ないのを悲しみ、父の仇を討つ決意を強くして権現に祈念した。

権現に祈念した甲斐があつてか、文治四年（一一八八）正月二十日、源頼朝のお供で工藤祐経が権現に参詣した。五郎は祐経の隙をねらつて刺そうとしたが、祐経にかるく躲（か）わされ、翻弄された。

祐経は、しかし、五郎が自分にとって危険な存在だとはおもわなかつたらしく、逆に、「しつかり修行なされよ。わたしが檀那になるから立派な僧となられるがよい」と励まし、引出物として赤木の柄に銀で銅金（どうがね）した短刀をあたえた。

敵としてあつかわれぬ屈辱に五郎は悔し涙をながしたが、どうにもならない。

五郎は十七歳となつた。権現の別当の行実が五郎に告げた。

「今年の授戒の儀で、あなたは法師になるはずです。稚児のままでは衣装も粗末、京都におのぼりになるにも不都合ですが、法師となつてからの上京となれば万事よろしく……」

五郎が法師になることは、すでに別当によつて権現の大衆に告げられている。

五郎は困惑する。

——明けても暮れても祐経を討つことばかりかんがえてきた。僧になつたあと、たとえば勤行のときにも仇討ちをかんがずにはいられないだろう。だが、それはかえつて罪深いことだ。

どうすればよいのか——困惑のすえに、五郎は結論を出した。

——わたしは仇討ちをする！　いまここで髪を剃つて僧になつてしまうと、後悔しても追いつかぬ。

ひそかに山をおり、曾我の里で兄の十郎に会って決意をうちあげた。

十郎は同意し、北条時政を烏帽子親として五郎の元服式をあげた。

工藤祐経の油断をねらい、ちからをあわせて討とうとするが、うまくいかない。

そうこうするうち、頼朝が「富士の裾野で巻狩をおこなう」と発表した。

狩場ならば祐経に隙が出る、仇討ちは容易だと兄弟はかんがえ、仇討ち決行ときめた。

五郎と十郎はそろって箱根権現に参詣して仇討ちに助力を乞い、行実に面会して仇討ち決行の決意をつたえた。行実は泣いたが、「覚悟をきめてお出でになったのは嬉しいこと」といい、引出物として十郎には黒鞘巻の腰刀、五郎には兵庫鎖の太刀を贈り、とくに五郎にたいしては警戒の言葉をそえた。

「この太刀は往年、九郎判官義経殿が木曾義仲追討のために上京なされたときに当社に納められましたもの。ですから、それと見知る諸将も多いはず、箱根権現の別当行実に贈られた」とは決しておっしゃらぬように。箱根権現の別当が曾我のかたがたに太刀や腰刀を贈って仇討ちをさせたとわかつては、おおごとになります。『京の町で買いもとめた』ぐらいのことをいっておけばよろしゅうございましょう」

(02) 薄緑

箱根の別当行実から五郎に贈られた兵庫鎖の太刀、それはもちろん薄緑(うすみどり)である。

義経が、

——どうか兄の怒りを和らげていただきたい！

切ない祈りをこめて権現におさめた薄緑だが、薄緑としては、兄弟和解の呪術の具として権現に献納されたのは気に入らない。

薄緑が源氏の宝刀であるためには 切る能力 を維持しなければならぬのに、兄弟和解の呪具なんていう穏やかなものとして権現祭り上げられてしまった。

—— こんな取り澄ました状況はイヤだ。どなたか、わたくしを権現の社の外にひきだしてくれぬものだろうか。源氏の宝刀として、世にはびこる邪悪なものを切って切つて、切りまくりたい！

薄緑の悲痛な望みは別当行実のこころをゆるがした。

薄緑のこころを率直にうけとめるならば、権現の宝物として祭り上げるのではなく、権現からひきだして、しかるべき武家の手にゆだねることだ。

薄緑をゆだねるにふさわしい武家の資質、条件といったもの、それはなにか？

こたえははつきりしている。敵を宥め、和解することに活路をもとめるのではなく、敵を切つて敵の存在を無にしようと意気込む者にほかならない。

だれか、いないか？

行実のまえに曾我の兄弟があらわれ、父の敵の工藤祐経を討ちしたいとうちあげたその足で拝殿にあがり、仇討ち成就をねがって祈祷した。

「すみやかに祐経の首を授けたまえ。ならぬことなら、いま、この場で、われらふたりを蹴殺（けごろ）していただきますたい！」

祈祷の様子をみた行実は、兄弟の仇討ちの願いがほんものだと察し、五郎に薄緑を贈った。

兄の十郎に、ではなく、弟の五郎に薄緑を贈ったのはほかでもない、五郎と薄緑は権現の社で七年の時を共に

すごした縁があるからだ。

薄緑は、見知りの五郎の手によって権現の外にひきだしてほしいと願っていて、願いはいつしか行実に通じていたとかがえるのもいい。

(03) 薄緑の切望 第一目標は頼朝

晴れて——というのは適當ではないかもしれないが——敵を切つて敵の存在を抹殺する武家の宝刀として、薄緑はよみがえつた。

さて、では、薄緑が切るべき敵とは、だれか、なにか？ 曾我兄弟だけを主体とするなら、その敵は工藤祐経にほかならないが、ここは一步つっこんで熟慮し、薄緑を主体としてかんがえれば、切るべき敵は祐経だと決めるのはまずいと躊躇すべきだ。

薄緑が切るべき敵は源頼朝だ。工藤祐経も切るべき敵ではあるが、第一目標ではない。

はなしの筋がごたごたと混乱してきた。混乱の原因、責任者は義経だ。

熊野権現の別当湛増が、そのときはまだ吠丸といつていた薄緑を贈つた相手は義経であり、頼朝ではない。

この事実から導き出されるべき、ひとつの神秘がある。「義経さま。わたくし湛増があなたに吠丸をお贈りするの、あなたがこの太刀であなたの敵を切るべきだと判断したからです。あなたの敵は、この吠丸によってひとりのこらず抹殺されるはずです」

吠丸の神秘の威力を背に義経が討つべき敵勢力は三者つまり木曾義仲と平家、そして兄の頼朝だが、義経は義仲と平家を滅亡させただけで頼朝は攻めなかった。

攻めないどころか、「兄上の怒りを和らげていただき」と箱根権現に祈祷し、祈祷のしるしに吠丸を奉納し

た。

祈祷に宝刀は無用、余計、場違いである。

場違いな使われ方をされたことに吠丸は怒り、悲しみ、せめてもの反抗のしるしに、義経の祈祷を無効なものとした。

吠丸は義経の怯懦（きょうだ）に呆れ、望みを失い、義経を見捨てたとみるのもいい。

そしていま、ようやく、曾我兄弟があらわれた。怯懦ゆえに滅亡した義経に代わる新しい正義の勇者の登場である。薄緑が「このひとならば」と期待をこめられる武家の登場である。

権現の別当行実が弟の五郎とのながいつきあいがあり、五郎の意気を知っている。

別当は薄緑を、十郎ではなく、五郎へのはなむけとして贈ることを選択した。

五郎ならば、薄緑を揮って切るべき第一の敵は最高権力者の頼朝であり、中級武家の祐経ではないのをわきまえていると判断したからだ。

- 1 3 3 -

#### （04）仇討ち決行

頼朝が催した富士の裾野の巻狩（まきがり）、警固の隙について兄弟が工藤祐経を討つのは建久四年（一一九三）五月二十八日の暮方だが、『曾我物語』の読者が兄弟の晴れの場に案内されるまでには手間と時間がかかる。巻狩は合戦を模した遊興だから、頼朝の本陣のまわりを十重二十重の警戒の陣がかこみ、歴々の臣下の名を紹介するのに時間がかかる。

工藤祐経の警固担当は頼朝の本陣の四隅のひとつ、東南の隅だから、名譽の役だ。

祐経の陣の場所をつきとめたのは十郎である。

祐経は遊女をひきいれて祝宴をはり、酔っぱらっていた。

十郎ひとりでも祐経を討つのは容易だったが、討つのは五郎と共にでなければならぬと、いったんはその場を去る。

夜は更けた。

五郎は別当行実から贈られた薄緑、十郎は赤銅づくりの太刀を佩いて祐経の屋形にしのびこんだ。

祐経は酔って寝ている。

肩を刺して目を醒ませ、太刀をとって起き上がるうとする祐経を、ふたりで二太刀ずつ切つて止めを刺し、

「われら曾我の兄弟、父の敵の工藤祐経を討ちとつたり！」

名乗りをあげると、警固の武士たちが雲霞のごとくにあつまつてきて、新田忠経が十郎を斬つた。

「五郎はどこにおる、どこじゃ。兄は新田忠経の手にかかつて討たれた。五郎よ、深傷（ふかで）でなければ、

頼朝殿の御前に参つて仇討ちの始末を申しあげよ！」

十郎は叫んで、息をひきとつた。

仇討ちのいきさつを主君に言上し、正当なる仇討ちと認めてもらえば罪には問われないうえに褒賞もありうる、これが武士の仇討ちのルールだ。

頼朝の本陣めざして走る五郎に、武者が群がって妨げる。

たがいに切りあううち、五郎は女装して隠れていた若者に抱きすくめられた。

腰刀を抜いて戦おうとしたが、いつのまにやら腰から落ちてしまっていた。

五郎は拘束、武装解除され、頼朝の尋問をうけた。

「このたびの仇討ちは年来の謀りごとか、それとも咄嗟

(とっさ)の思いつきか？」

「咄嗟の思いつきかとは、おそれながら、あまりにも浅慮のお言葉でございます。祐経を討つことは兄が九歳、わたくしが七歳のときから心に懸けてまいったこと。御前のご上洛のときには忍んでお供をいたし、宿々で祐経を狙いましたが、隙がありませんでした。京の町で見事な太刀を買ひもとめ、本日まで肌身離さず所持してきたのも、ただただ祐経を討ちたい一心。その甲斐あって、ついに祐経を仕留めることができました。こうなりましてからには一寸きざみに首を切られても、なんの恨みもありません」

五郎は京都へ行ったことはない。「京で太刀を求めた」と偽りの陳述したのは、薄緑を贈ってくれた権現の別当行実に迷惑をかけないための配慮だ。

頼朝は五郎の陳述に正義ありとみとめ、釈放しようとしたが、梶原景時が「それでは源氏の主従の秩序が乱れましょう」と反対したのを、やむなくうけいれた。

五郎の身柄は祐経の遺児にわたされ、頼朝の御家人の筑紫忠太が五郎の首を切った。忠太は祐経を頼りにしていた関係があり、仇討ちのつもりで五郎の首切役を買って出た。

忠太はわざと鈍刀を使って、五郎の首を「すり切り」にした。銘刀ですっぱりと切るべきところを、切れない鈍刀で、ごしごし、ぎゅうぎゅうと「すり切り」にして苦しめたのである。

頼朝は怒った。当然である。

頼朝はすでに、五郎を武装解除してとりあげたのが源氏の宝刀薄緑こと吠丸なのを察知していたにちがいない。源氏の宝刀薄緑の晴れの出番がやってきた。頼朝は五郎の首を、五郎からとりあげた薄緑で切らせるべきであ

った。

そうと気づいたのは、筑紫忠太が鈍刀で五郎の首を擦り切り」にしたあとだった。頼朝の大失敗である。

「忠太の首を、その鈍刀で擦り切れ！」

頼朝が命令を発したときいた忠太は、首をすくめて筑紫に逃げた。

逃走の道々、忠太は懊悩に迫られた。五郎の怨霊の祟りである。筑紫に着いてからわずか七日、忠太は五郎の怨霊に責められ、狂い死にした。

(05) 五郎の死霊は怨霊になった

このままで済むはずはない。

原因もわからずに苦しみ、命を落とすひひとが続出した。

曾我五郎の怨霊のしわざなのだが、はじめのうちは、なにが原因の苦しみなのか、見当がつかない。

平安時代の菅原道真の例でわかるように、怨霊は二段攻撃でひとびとを苦しめる。

はじめは無差別に祟る。

だから、だれの怨霊が、だれに祟っているのか、わからない。

強いちからで祟って世のすべてを恐怖のどん底におとす、ここまでが第一段階。

恐怖が世の中にゆきわたると、怨霊は祟る対象を限定する。

道真の怨霊は左大臣でライバルの藤原時平(ときひら)

とその一族に集中して祟ったから、世間は「これは道真の怨霊だ」と解釈し、安堵した。

道真の怨霊を鎮めるのは藤原時平とその一族の義務であり、時平一族と無関係のひとは祟りの対象から外され



ることがはつきりしたからだ。

曾我五郎の死霊は無差別、手当たり次第に祟つ。

いずれは祟りの対象を源頼朝とその一族に限定するわけだが、関係のない者はそれまで待てない。

応急処置として、それぞれ独自の手段で五郎の怨霊を鎮めるしかない。関東地方一円にはじまった五郎の怨霊鎮撫の祭祀行事は全国にひろまった。

怨霊の祟りは曾我五郎にかぎったことではない。特定の人間にたいする恨みを抱いて死んだひとの霊が怨霊になるから、怨霊の数は無数だ。無数の怨霊鎮撫祭祀行事があり、そこに曾我五郎の怨霊鎮撫が重なって現在に到る。

(06) 曾我物

曾我物(そがもの)とう演芸のジャンルがある。

花川戸助六が主人公の歌舞伎『助六由縁江戸桜』は、曾我五郎のレプリカ、または生まれ変わりの助六が行方不明の宝刀を探すドラマだ。

ドラマの観客は、助六の宝刀探しの奮闘につきあうことで助六の自己鎮撫を援助する仕掛けになっている。

助六は行方不明の宝刀を探す。

助六が探しているのは髭切と薄緑の二本の宝刀、または、どちらかの一本である。

頼朝が平家打倒にたちあがり、熱田神宮から髭切をひきだして出陣、平家を殲滅した。

髭切はそのまま頼朝の所有となり、源氏の宝刀として秘蔵されている。

義経は熊野別当湛増から吠丸を贈られ、薄緑と名をかえて戦場に出て、木曾義仲と平家一統を打ち破った。

そのあとで兄頼朝との仲が不和となり、義経は薄緑を

箱根権現に奉納して「兄の怒りを和らげたまえ」と祈つたが、祈りの験（しるし）はなく、兄に追われ、奥州で滅亡する。

曾我五郎が工藤祐経を討とうと決意したとき、箱根権現別当の行実から薄緑を贈られ、祐経を討ちとめた。

仇討ちのいきさつを言上しようとして五郎は頼朝の本陣に参つたが、警固の士に止められて武装解除、この時点で薄緑は頼朝の手にわたり、ほんとうにひさしぶりに髭切と膝丸（薄緑）が揃った。

じつになんとも、めでたい次第であるはずなのに、めでたくはならなかった。

『源平衰勢記・剣巻』の巻末に不穏な将来が予告されたのだ。

八幡大菩薩から多田満仲に下賜された源氏重代の髭切と膝丸は、長い月日の別離のあとで一揃いとなって鎌倉に安置された、めでたい——こう書いたあとに細字の注記が付け加えられた。

古本にいわく、三代將軍の代尽きてのち、髭切は上野（こうづけ）の新田の家につたわり、薄緑は足利の家につたわると。

（07）正しい権力を正しい場に 助六の役目

『屋代本平家物語・剣巻』と『源平盛衰記剣巻』の筋立ても表記もほとんどおなじだが、最後の最後で劇的な相違が生じた。

源氏の嫡流は頼朝―頼家―実朝の三代で絶えた。

北条氏は京都から親王や公卿をまねいて飾りの將軍とし、みずからは執権職を世襲して政権を掌握したが、これもまた滅亡して、源氏重代の宝刀髭切は上野の新田家

に、薄緑（膝丸）は足利家につたえられることになった——このように書き足す『源平盛衰記・剣巻』にたいし、『屋代本平家物語・剣巻』は無言のまま、巻を閉じる。

『源平盛衰記・剣巻』は源氏を真つ向から批判する。いや、もつと強く、源氏を突き放す。

宝刀の遍歴をテーマとする『源平盛衰記・剣巻』としては当然だが、まるで、最末尾の源氏突き放しの数語を付加したいがために長い物語を綴ってきたかのような印象さえある。

源氏はダメであった。ダメだから、わずか三代で権力を奪われてしまった。

髭切も膝丸も「源氏はダメ」と判断し、見切りをつけて源氏から離れ、髭切は新田に、膝丸は足利に期待をかけて去った——これが『源平盛衰記・剣巻』の結論だ。

『源平盛衰記・剣巻』の気分、姿勢、それは源氏の宝刀の物語に終止符をうちたくなかったのだ。終止符をうてば、髭切と膝丸は鎌倉幕府の宝庫におさめられたまま、歴史の遺品として凍結されてしまう。

歴史の遺品にならない、それが髭切と膝丸の切なる願望であった。

源氏を見限って新田、足利に乗り換えたことでわかるように、髭切と膝丸は正しい権力者の所在をあきらかにすることを自己の役割とした。

髭切と膝丸が揃っているところ、そこに正しい権力者は存在する。

髭切と膝丸は源氏を見限って新田、足利にのりかえた。ということは、もしも、事と次第によつては、髭切と膝丸が新田、足利から次の勢力に乗り換える展望がゼロではないのが予告されているわけだ。

だれに、なんのために？

現代のわれわれには 正しい権力を、正しい場に存在させる義務 があることを確認し、強調するため、そのほかにはない。

歌舞伎の舞台のうえで助六はなにをしているのかというと、髭切と膝丸にサインを送っている。

—— わたくし助六は 正しい権力を、正しい場 に所  
在させようとして奮闘しております。髭切よ、膝丸よ、  
どうか、わたくしのところに降臨してください！

これまでのところ、宝刀が自分に目をかけてくれる気配はない。仕方がないから、ヒゲを剃り、チヨンマゲをむすんで町人に化け、宝刀の行方をさがしている。

それが助六、花川戸の助六。

(08) 宝刀意識

弘安九年(一二八六)十二月、鎌倉幕府執権の北条貞時が髭切を法華堂に奉納したそうだ。歴史学研究会編『日本史年表・第四版』(岩波書店)の記事だ。しかるべき史料にもとずいているはずだが、つきとめられないので、いまはこのままとする。

髭切奉納の理由はわからない。

文永十一年(一一七四)、モンゴル軍の来襲で、幕府も西南の諸大名も大変な苦勞をした。

モンゴル軍は去ったが、幕府軍が勝って追い返したのではなく、おりから来襲した台風にたすけられたかたちであった。

モンゴル軍は弘安四年(一二八一)にも来襲、こんどもまた台風に妨げられて退却したが、幕府の政治力は消耗した。

貞時が髭切を奉納したのは、佛のちからを借りて危機をのりきる策であつたらうか。

まもなく鎌倉幕府は倒れる。

鎌倉幕府を倒したのは後醍醐天皇と、天皇に味方した新田義貞（よしさだ）、足利尊氏（たかうじ）である。

『源平盛衰記・剣巻』が源氏三代のあとの髭切と膝丸の所持者として名をあげるのが義貞と尊氏だ。

しかし、新田義貞や足利尊氏の身辺に宝刀の影は希薄である。室町時代の武家の世界では宝刀の意識が希薄だったといっても過言ではないだろう。

希薄ではあったが、皆無ではない。

わたしの同年代、それ以上の方におなじみの文部省唱歌『鎌倉』は明治四十三年（一九一〇）に制定された。

作詞者、作曲者はともに不明。一番の歌詞に宝刀が登場する。

七里が浜のいそ伝い

稲村が崎 名将の

剣投ぜし古戦場

（『日本の詩歌 別巻』中央公論社）

剣を海に投げたのは上野国新田郡の新田義貞、『太平記』巻十「稲村崎干潟になること」に逸話が出ている。

後醍醐天皇が「鎌倉幕府を打倒せよ！」と叫んで軍事行動をおこし、新田義貞は天皇に呼応した。

元亨三年（一三三三）五月八日の生品（いくしな）明神（新田町野井）社頭の旗揚げはわずか百五十騎の小勢だったが、武蔵国にのりこんだ九日には二十七万余騎の大軍になっていた。

新田家の「伝家の宝刀」があれば、生品明神の旗揚げのとき、義貞が明神に宝刀を捧げて勝利を誓う場面が『太平記』にあっという間ははずだが、ない。

新田ほどの武家に銘刀がないはずはないが、銘刀はあつても「宝刀」の意識はなかったのかもしれない。多数の武家が味方として馳せ参じる武士が多い理由として、「これ偏に八幡大菩薩の擁護によるものなり」と書いてあるから、

——源氏の氏神の八幡大菩薩を信じれば充分である。

宝刀などに頼るのは武家のやることではない、源氏の名折れである。

といった心理的な状況であつたかもしれない。武家としてはむしろ、これが健全。

あるいまた、こういふふうにもかんがえられる。

新田家は——足利家もそうだが——源氏の末端勢力である。

多田満仲の三男、河内源氏の祖の頼信の孫が八幡太郎義家、義家の三男の義国が下野国の足利荘にひきこもり、末裔は足利と新田の二流にわかれて繁栄した。

われらは源氏！ の意識があるのは当然だが、源氏ではあるが庶流 の意識が強ければ、宝刀など、持たぬほうがまし の意識が前面に出て不思議ではない。

庶流のまま「伝家の宝刀」など持つてしまえば、嫡流でなく、庶流の格式が宝刀によつて守られることになり、いつになつても庶流から抜けだせない。

さて、多摩川の分倍（ぶばい）河原で幕府の軍をやぶつた新田軍は鎌倉街道の上ノ道をまっすぐに攻め下つて太平洋に出た。

稲村ヶ崎をまわつて鎌倉に突入する作戦をたてたが、幕府軍はそうと察して、狭隘このうえない稲村ヶ崎に堅牢な防備の柵を張っていた。

左手は見上げるばかりの断崖、右手はすぐに海、重装備の将兵をのせた馬が通過するのは絶望的に不可能であ

る。

一騎、二騎と間隔をあければ通れぬことはないが、これでは敵の弓矢の餌食となってしまう。海面には逆木を打ちこんで柵とし、大船をならべて狙撃兵をのせているのだ。

義貞は、どうしたか？

馬より降りたまひて、甲を脱いで海上をはるばると伏し拝み、龍神にむかいて祈誓したまひける(略)みずから佩きたまへる金作(こがねづく)りの太刀を抜いて海中へ投げたまひけり(『太平記』)

その夜の月が消えるころ、稲村ヶ崎の沖合はるか二十町ほども海水が後退、ひろびろの干潟になった。

義貞は将兵を激励する。

「城内の水が尽きて苦しんでいたとき、漢の貳師(じじ)將軍が刀を抜いて岩に差したところ、にわかには泉水が吹きあげたたという。また、わが朝では神功皇后の例がある。皇后が干珠(かんじゆ)を海上に投げると、海水が遠くに退いて軍隊は渡れた。われらは和漢の奇瑞にみちびかれておる、勝利はまちがいなし、いざ海上を押しわたれ！」

大軍が一斉に稲村ヶ崎の沖の浅瀬にのりいれた。幕府が防御としてならべた船の底が沙に埋まり、動けず、狙撃は不可能。

鎌倉は海から攻められ、たちまちに陥落して新田義貞の大殊勲とはなった。

あつというまに海水を沖に後退させた神秘「金作りの太刀」である、しかるべき名があって当然のところ、『太平記』は名をつたえない。『太平記』と『源平盛衰記』

剣巻』とのあいだにはなんのつながりもないようだ。

義貞のライバル、のちには義貞を倒す足利尊氏についても「伝家の宝刀」の伝説はつたえられていない。

武家の宝刀伝説は鎌倉幕府の滅亡とともに消えた——  
というのはおおげさかもしれないが、それに近い状況になつていたのではなからうか。

宝刀の威力　なんていうものでは間に合わない——  
そんなような時勢になつていたのではないか。

(09) 曾我五郎はヒゲを剃る

曾我五郎と十郎の怨霊鎮撫をテーマとする演芸は「曾我物」と総称され、戦国乱世を経て江戸にもちこまれた。ここで 江戸 というのは 時代としての江戸 と 都市としての江戸 の、両方をさしている。

鎌倉時代のうちには原型の姿があらわれていたとされる『曾我物語』を下地にして、たくさんのバリエーション作品がうまれた。

多くはそのままのかたちで江戸にもちこまれたわけだが、舞台上に登場した曾我の兄弟、とくに弟の五郎の姿をめぐってはなはだしい当惑の感情がおこったのを想像しないわけにはいかない。

それが、なんであるかというと、五郎がヒゲを生やしていたことだ。

この時期、江戸では、ほとんどの男がヒゲを剃り、月額を剃り、さっぱりしている。

そこへ、ヒゲむじゃむじゃ、月額も剃らぬ五郎が正義の人間として登場すると、親近感より違和感が優先してしまつて、ドラマが成立しない。

どうしたらいいものかと困惑しているところへ、だれかが智恵を出した。



——五郎もヒゲを剃ればいいじゃないか。月額も剃つて当世風の優男（やさおとこ）に化ければいいんだ！

（第6章・終）

『ヒゲは助六』

第7章「徳川家光のヒゲ」

(01) ヒゲ剃り社会の先駆者——土井利勝

ヒゲ剃り男がヒゲ男より多くなった、それがいつなのか、はつきりしない。

ある日とつぜん、ヒゲ剃り男がふえてきた状況に圧迫されるのを感じ、剃るべきか、剃らざるべきかの選択を迫られている自分の存在に直面、ふらふらと吸いよせられ、「剃ったほうがいいんだろなあ」となったのだろ  
う。

「あれっ、とうとうあんたも剃ったのか！」

「むこうから来るひとが奇妙な顔をするんだよ。おかしいな、なぜなんだろうとかんがえているうちに、わかった。おれの顔にヒゲがあるのが奇妙にみえるらしい」

「少数であることの不安、こころぼそくなって、剃った  
と……」

「こころぼそいというか、ヒゲを剃っても暮らしに別状はないわけだから……」

はつきりした基準はないが、ヒゲ男が成人男性の三割ぐらいになると ヒゲ剃りの圧力 といったものが生じてくるのではないか。 そんな理由があるはずはないのに、ヒゲを生やしたままでいるのが、なにか反社会的な行為であるようにおもわれはせぬかといったような、不安な気分、時代の趨勢といったようなものか。

——いまにしておもえば、 あのこと があってから、世の中、ヒゲ剃り男が急にふえたんじゃないかとおもうんだが、あんた、どうおもう？

—— 同感、 あのこと だな。

強烈であった、 あのこと の影響は。

あのこと　の主人公は土井利勝である。

本人はおぼえていないだろうが、土井利勝がヒゲを剃ってからヒゲ剃り現象がひろまった。

大多数ヒゲ剃り現象の発生地は江戸時代の江戸の、武家社会である。

(02) 三代將軍徳川家光にはヒゲがなかった

家康と秀忠の二代に補佐役として活躍したのが本多佐渡守正信。すぐれた政治家のイメージがあり、かれの政治理論を一巻にまとめたのが『本佐録』だとされるが、事実ではないらしい。

正信が上下万民に期待されていたのはたしからしく、亡くなったとき、その死を惜しむ声が江戸の巷に満ちたのを南禅寺金地院の崇伝が記録にのこした(『本光国師日記』)。

正信をひきついで秀忠と家光を補佐したのが土井大炊頭利勝だ。土井利昌の子だが、じつは三河の刈谷城主水野信元の子で、土井利昌の養子になった。

利勝の出生について、もうひとつの　じつは――　があり、そのために利勝は　日本ヒゲ剃り世紀　の幕をあけることになる。

もうひとつの　じつは――　はさておき、天正七年(一五七九)に徳川家康の三男の秀忠が遠州浜松で生まれると、七歳の利勝が傳役(ふやく)に登用され、二百俵の扶持をうけた。十九歳で千石の知行、中級旗本の待遇だ。出世の階段をのぼる利勝に、みずからもとめてことさらに親近したのが金地院崇伝である。崇伝は仏教統制政策の要の僧録の大役に就任したが、これも利勝との昵懇(じつこん)によることだろう。

崇伝は利勝称賛につとめた。

「ことのほか奥ゆかしい分別の方である」

「他人の申すことにこまごまと耳をかたむけられる」(『本光国師日記』)

崇伝が贈呈に使ったカネも半端ではない。重役一般に贈呈はするが、利勝への贈呈は格段に高額なのである。

崇伝は利勝と昵懇の交際をむすぶことで出世階段をのぼってきた——そういう評判がたった。ならば、われもと、利勝のまわりにはひとがあつまり、それがまた利勝の評価を高くする。

利勝を嫉妬、中傷する噂がたつのはやむをえない。

あれこれの噂のうち、格別に強力な一発。

「大炊頭さまの実の父は水野信元さまだということになっているが、じつは……シィーッ、まちがってもわしの名を出さんでくれよ……神君(しんくん)さまなのだぞうだ！」

「やはり……！」

「やはり……って、あなたもご存じだった？」

「おふたりの顔かたち、神君と大炊頭さま、そっくりではございませんか」

人物の器量あつての利勝の出世だが、下地には神君御落胤の事実があつたのだとの噂が消えない。神君とはもちろん徳川家康。

利勝はある日、江戸城で、「大炊頭さまの実の父は」の、例の噂を耳にした。

利勝はその日はなにもせず、翌日、ヒゲを剃り落として登城してひとびとをおどろかせた。

おどろくだけでは足りない。

大炊頭さまともあろうお方がヒゲを剃ったのを、われら軽輩が知らん顔をしてはいられない、われもわれもとヒゲを剃るものが続出、ヒゲ剃り全盛の世とはなった。

このはなしは神沢杜口（かんざわとこう）の『翁草』巻百四十六におさめられ、「和国髭の事・落穂集」の章題がつき、杜口は「これはわたくしのオリジナルではありません、『落穂集』から引用したのです」と出所をあきらかにしている。

和国髭を剃始めしは甚だ近世のことなり。寛永の頃までは貴賤をいわず男子はすべて髭あり。然るに髭を剃りし濫觴（らんしょう）は土井利勝、じつは神祖の御落胤（ごらくいん）なり。

杜口はあきらかに、たからかに「利勝は神祖家康の落胤」と断定し、利勝が家康の落胤であるのが原因となつてヒゲ剃り全盛期がやってきたのだと、これまたはつきりと宣言した。

神沢杜口は利勝の性質について、つぎのように書く。

利勝は質直にして、その御因縁も深く秘せられ、ただ惟君臣の道を正しく奉仕せらるるのほか、他なし。然るに右の噂、ややもすれば人口にあるを懶（ものう）く思いて、容貌を替えたためばかりに髭を剃られしに、その所以を知らずして、一統に髭を剃りて後世の風俗となりしこそ可笑しけれど落穂集の编者知足翁が書置きけり。

『翁草』の七十巻にも利勝のヒゲ剃りの記事が出ているが、これもまた神沢杜口のオリジナルエッセイではなく、著者は不詳、あるいは幕臣の木村高敦といわれる『改正武野燭談』からの引用紹介だ。

『落穂集』のヒゲ剃り記事には登場しない徳川家光が

『改正武野燭談』には登場する。

家光にはヒゲがなかった。

日光東照宮編『徳川家光公伝』の冒頭に掲載されている家光の肖像にはあきらかにヒゲはない。初代將軍の家康にも二代の秀忠にもヒゲはあったが、第三代の將軍として登場したのがヒゲなし男の家光だ。

貴賤を問わず、男はヒゲを生やすものときまっていた時代、ヒゲなし男は武士でないどころか、男でさえないといわざるをえない風潮のなかに、ヒゲがない家光が三代の征夷大將軍として登場した。

「上様は、ご自分にヒゲがないのを恥じておられるのではなからうか」

「恥じられるのを止める手立てはないが、われら一統こそつてヒゲを生やし、自慢しているのを毎日ご覧になっておられるのだから、いずれそのうち、上様がわれらをお恨みなさるかもしれぬ」

「恨みなら、まだよい。恨みが嵩じて怒りとなり、ご身辺に仕えるものをお手打ちにせぬとも、かぎらんぞ」

「やむをえぬ。いまのうちに……」

というわけで、われもわれもとヒゲ剃りははじめ、あつというまにヒゲ剃り全盛の風俗とはなった——これが『改正武野燭談』の説だが、家光のヒゲなしと土井利勝のヒゲ剃りを並列して論じるのが『改正武野燭談』のユニークなところだ。

利勝はヒゲのない家光の屈辱感を予想して痛ましくおもい、屈辱感を慰撫するために、あるいは追従のしるしとして自分で自分のヒゲを剃った——世間はこうかんがえているが、まちがいである。利勝は家康の落胤説を自分で打ち消すためにヒゲを剃ったのであり、家光への追従なんかではない、これが『改正武野燭談』の主張だ。

利勝がヒゲ剃りを決行したのが世間一般ヒゲ剃り全盛の幕開けになった。

これははつきりしているが、利勝のヒゲ剃りの前に、ヒゲの生えない將軍家光が登場したから筋道がわかりにくくなった。

ヒゲなし男の家光が將軍として登場した、利勝は自分のヒゲを剃って家光の機嫌を損ねないようにした——こう解釈するが常識的で安易な道なのだ。

そこで、家光にはヒゲがあったと仮定すると、どういう事態になるか。

家光のヒゲの有無にかかわらず利勝は自分のヒゲ剃りを断行したわけだが、これだけではヒゲ剃り全盛の世とはならなかったろう。利勝がヒゲを剃っただけでは世間一般、とくに武士がわれさきにヒゲを剃る事態はおこらなかったはずだ。

家光にヒゲがなかった事実には、利勝のヒゲ剃りの事実がかさなってはじめて世間一統ヒゲ剃り全盛期に突入した。

神君落胤の噂を打ち消そうとしてヒゲを剃った土井利勝の心境はかくされてしまうのだが、その心境をくみとって後世につたえようとした大道寺友山や、『改正武野燭談』の著者のような理解者はあったのだ。

利勝よ、以て瞑すべし。

(03) ヒゲを生やすのは將軍だけ 家光の論理

家光が悩んだのはまちがいない。

男にはヒゲときまっていた時代にヒゲなしで生まれた徳川家光、庶民ならばともかく、武功で世をおさめるのを使命とする武士の頭領がヒゲなしとあっては始末がつかない。

存在するヒゲについての悩みよりも、存在しないヒゲについての悩みのほうが深刻なのはいうまでもない。

ところで、ヒゲを生やした家光の肖像が存在する。法橋栄賢が描き、奈良の長谷寺に所蔵されているもので、ヒゲの量はゆかたではないが、クチヒゲ、アゴヒゲ、ホホヒゲの三種がそろっている（藤井譲治『徳川家光』吉川弘文館）。

江戸城では 上さまのお悩み の一部始終があれこれと語られ、悩みの原因がヒゲであるのは周知の事実であったろう。和田正路の『異説まちまち』は家光にヒゲがあつたのを前提として書かれている。

家光はヒゲを自慢にしていた。

「この節、ものどもが美き髭なりと称賛するヒゲはだれのヒゲであるか？」

「御前のおヒゲと、旗本の某のヒゲでございます」

家光はその旗本某をよびだし、「ヒゲを剃れ」と命じた。

旗本はヒゲを剃った。

つぎの日、家光は上機嫌で宣言した。

「あの男はヒゲを剃ったそうじゃ。見事なヒゲの持ち主はわれひとりになった！」

落語「目黒のサンマ」の主人公は家光だということになっていて。このヒゲ自慢のいきさつを材料として落語「ヒゲ自慢」ができあがりそうだ。

(04) カツラをかぶってハゲを偽装する

ヒゲにこだわったのが徳川家光、ハゲにこだわったのがフランスのルイ十三世。ルイ十三世はブルボン王朝を樹立し、ヴェルサイユ宮殿をつくった。徳川家光が將軍になったのは元和九年（一六二三）で、つぎの年にルイ



十三世が即位した。

ルイ十三世は十歳で即位した。心労ゆえにか、若ハゲとなり、二十二歳で全頭をすっぱりつつむブロンド色のカツラをかぶってハゲを隠すようになった。

皇帝の真似をしなければならんというわけで、宮廷出入りのひとたちがわれもわれもとカツラをかぶり、瞬時のうちにカツラは全ヨーロッパの流行となった（金子勝昭『ハゲの哲学。あるいはハゲてしまった・ハゲつつある・ハゲるかもしれない人々へのメッセージ』田畑書店）。ハゲない体質のひとは、いくら頑張ってもハゲられない。カツラをかぶってハゲを偽装する手はあるが、カツラは高価だ、だれにも買えるものではない。

そこでどうしたかというところ、地毛を、さもカツラであるかのように見せかける工夫をした。切実だから、かえって滑稽だ。

十三世のあとをついだルイ十四世はひとなみ以上のふさふさの頭髪だったが、遺伝だろうか、三十二歳でハゲはじめ、三十五歳でカツラをかぶることになった。

寝るまえ、十四世はベッドのカーテンの合わせ目からカツラをそーっと出して小姓にわたして調髪師にゆだね、翌朝、調髪されたカツラを合わせ目からうけとる習慣だったそうだ（『ハゲの哲学』）

日本の武士がヒゲを剃り、庶民が武士をまねてヒゲ剃りをはじめたのと、ヨーロッパの宮廷貴族がハゲの有無にかかわらずカツラをかぶるようになったのとほぼ同時期だった。

（05）ヒゲは理屈の外の強制の道具

ヒゲ剃りに損得勘定はからまない。

ヒゲを生やしていれば金銭上の得をすると保証される

わけでもなく、ヒゲを剃れば社会的な制裁をうけるとき  
まったわけでもない。いつてみれば、ヒゲは理屈の外で  
ひとびとを強制するしきたりの道具である。

グイム・ヴェンダース監督の映画「アメリカ、家族の  
いる風景」(原題 Don't Come Knocking)のひげ剃りシーンは、じつになんとも衝撃的であつた。

このころはもう、ぼくのヒゲばなしの書の計画はすすんでいたが、そうと知って観にいったわけではない。ヒゲ剃りの場があるなんて知らずに観て、仰天した。

あらすじ――

映画俳優ハワード・スペンスは映画の撮影を放り出して行方をくらました。

保険会社にやとわれた私立探偵サターはハワードを捜索する旅に出る。アメリカのネバダ州のどこか、ひとりっ子ひとりいない砂漠のまんなかに自動車をのりいれてしまいい、することなしの苦境、そこでどうしたかというところ、電気シェイパーをもちだしてジャーツ、ジャーツとヒゲ剃りをはじめた。

砂漠のまんなかに電気はないが、電池式のシェイパーだからヒゲ剃りは可能だ。

可能ではあるが、なにも砂漠のまんなかでヒゲ剃りなんかしなくてもいいじゃないかと苦情をつけたい気分の我が身に気がつき、奇妙というか、当惑というか、戸惑ったおぼえがある。

「アメリカ、家族のいる風景」を観て戸惑ってから数年、リスボンの軍事博物館でおもしろいものを見た。一八九五年(明治二十八)ジレット社製の将校用ヒゲ剃りセットである。軍事博物館に陳列されているからには私物ではなく、官給品にちがいない。

ヒゲ剃りは日常の行為だと思いこんでいるから、非日常の戦場には似合わない品物ではないかと、不思議だった。

だが、よくかんがえてみれば、軍人には戦場こそ日時の場、ヒゲ剃りセットをもちこむのは当然、官給品のヒゲ剃りセットをもちこむのは義務の遂行準備にほかならない。

石鹼（シャボン）が登場してヒゲ剃りには石鹼の泡が不可欠となったが、電気シェイバーの発明がブラシに水をつけて石鹼になすりつけ、泡立ててホホやアゴにすりつけてヒゲを柔らかくする作業からヒゲ剃り男を解放した。

土井利勝は、石鹼の泡でヒゲを柔らかくしてからヒゲを剃ったのだろうか？

ヒゲ剃りには石鹼の泡を使うのがいいのは知られてい  
たし、石鹼を手に入れるのはむずかしくはないから、利勝がその気なら、使えた。

だが、ヒゲを剃った経験のない利勝である、下男に命じてヒゲを剃らせるのは可能だが、自宅に石鹼の用意はなかったはずだ。初回は石鹼は使わずにヒゲを剃り、二度目からは石鹼を手に入れ、ごしゃごしゃと泡立ててヒゲにすりつけてヒゲ剃りをしたのだろう。

ただし、日本人の肌には石鹼は合わないとかんがえられていた。肌荒れの恐れを警戒して利勝が石鹼を使わなかった可能性はある。日本人と石鹼の相性については、寛政七年（一七六五）ごろ完成された津村涼庵の随筆『譚海』に記述がある。

紅毛人、髪を剃るには薬つけて剃る。髭しゃぼんというものあり。髪に塗りて剃るときには、髪やわ

らかになりて茎までさっぱりと剃らるるなり。ただし、この薬、たびたび付ければ、髪の色、いつとなく赤くなり、ちぢれることなり。それゆえ、この邦（くに）の人はもちいがたし

石鹼は薬品であった。

長崎貿易の主要な輸入品のひとつだから希有というほどではないが、安価ではない。ゆたかでないひとは、「われら日本人がシャボンを使うと肌が荒れて困るだけだ」と負け惜しみの理屈をつけ、水で濡らすだけでヒゲ剃りをしていた。

（第7章・終）

『ヒゲは助六』

## 第8章「助六のヒゲ」

(01) 月額(月代) 剃り

ヒゲ剃り現象は拡張する。

剃刀はますます鋭利になる。鋭利な剃刀でヒゲを剃るのが快感となる。

ヒゲを剃ったあとの剃刀が、なにか、訴えている。耳をかたむければ、剃刀の訴えがきこえる。

「髪の毛も剃らせてください！」

「髪の毛を……剃るのか？」

「ヒゲを剃っていいのなら、髪の毛を剃ってはならん理屈はないでしょう」

「そういえば、髪の毛を剃ってはならん理屈はないな」

剃刀はにつこりとほほ笑み、ぞりぞりと髪の毛を剃りはじめる。

これが男の月額(月代) 剃り開始の瞬間だ。

月代とは人為的に拡張された額と、拡張された額のうえに、チョン鬘という名の鬘を組みあわせるヘアスタイルである。

髪の毛を剃った頭を上からみると、前方が横に一直線、うしろへ下がるにつれて左右が狭くなる月のかたちをしているから、月のかたちの額、すなわち月額。

月のかたちの額といってもまんまるの満月ではなく、欠けつつある、または、満ちつつある月のかたちである。月額とは 月額剃り の略称だとかんがるとわかりやすいかもしれない。月額は月代とも書く。

乱暴な言い方をすると、額の下の線を底辺とし、百会(ひやくえ・脳天)を頂点とする、つるつるの地肌の二等辺三角形が月額である。

天然のつるつる地肌である額と、剃刀でじよりじより剃った結果のつるつる地肌がつながっているのが月額である、こういつてもいい。

天然の額を拡張した月額は単独では存在感が希薄だ。月額を剃ったあとの、残りの頭髮と組合せになつてはじめて一個のヘアスタイルとして存在を主張できる。

月額を剃ったあとの残りの頭髮をおもいきって長く伸ばし、一束に束ねて紐でむすび、うしろへ垂らしてから、半分ほどを脳天にむかって折り返し、先端をきれいに切りそろえる。これがチヨン鬘だ。折り曲げた鬘を横からみると「ヽーチヨン」の字に似ているからチヨン鬘。

チヨン鬘と月額の組合せのヘアスタイル、これをチヨン鬘というのもよし、月額とよんでもいい。名称はどちらでもいいが、チヨン鬘だけ、月額だけは存在できない。

日常の調髪作業を「月額を剃る」ともいうし、「チヨン鬘を結う」ともいう。「月額を剃る」「イコール」「チヨン鬘を結う」であり、「チヨン鬘を結う」「イコール」「月額を剃る」なのだ。どちらかひとつ、はありえない。

月額を剃るのは剃刀である。

最初は僧侶の髪の毛を剃る専用の刃物、そのつぎが男子一般のヒゲを剃るヒゲ剃りの剃刀、ヒゲ剃りとほとんど同時に月額を剃ることになって剃刀の活躍の場が三倍に増えた。

## (02) 髪結い床

ヒゲ剃りも月額剃りも、自分でやるのはむずかしい。

鏡があれば絶対に不可能でもないが、肌に傷をつけるおそれがある。

僧侶の自剃りが止むを得ない事情からする屈辱行為なりとされた記憶は武士にも庶民にも通じるだろうか

ら、なるべくは他人にやってもらいたい。

月額剃りならともかく、チョン鬘を自分で結うのは不可能である。家族にやってもらう手はあるが、優秀な技術はのぞめない。

だから、ふつうの男は髪結床（かみゆいどこ）、床屋へゆくことになる。

ふつうの男というのは武士でも僧侶でもない、庶民の男。武士には従者がついてるのが原則だから、従者に月額剃りも鬘結もやってもらう。僧侶もおなじ。

江戸時代の都会は髪結床の全盛だった。時期の相違はあるが、およそのところはつぎのようであった（江馬務『日本結髪全史』）。

床屋は江戸時代に、市街では一町々々の角の家、木戸門の入口に近い所に店をかまえていた。その時代には小路一町々々の辻々には木戸門という門があり、大門と小門とがあつて、その横に番小屋があり、そこには番太郎という男が居り、今の午後八時になると大門を閉じ、十時に小門（くぐり）を閉じる

京都では床屋の二階に町の会所があり、床屋の主人は町役人の下役を兼ねていたから、町内の動向を監視し、治安を維持する権限もあつた。

町内の男が長いあいだ床屋へ顔をみせないと、「あいつ、なにか悪いことをしてるんじゃないか」と噂されることもあつたらう。

ヒゲや月額を剃る、チョン鬘を結う実利の役割のほかに、公的な権威を行使する最末端組織の面があつたといえる。

嘉永四年（一八五一）の江戸では町人人口五百二十人

に一株の割合で髪結床があったと計算されている（坂口茂樹『日本の結髪風俗』雄山閣）。五百二十人のうちには女性や子供がふくまれていたようだから、男性一般の数にたいする髪結床の比率はもっと高くなるわけだ。

一定の場所で営業する床屋のほか、道端で営業するもの、小規模な町や村で巡回営業する床屋もあるから、どこへいっても床屋はあった。

落語の「崇徳院（すといん）」はお店の若旦那の恋わずらいをめぐる悲喜劇である。

上野の清水堂にお参りした若旦那が茶店で休んでいると、お供の女中をつれたお嬢さまと出会い、恋ごころが通じた。

別れ際、お嬢さまは懐紙に一首の歌を書いて若旦那にわたし、去った。

「瀬を早み 岩にせかる 滝川の」

上の句だけ書いてあって、下の句が書いてない。いつたい、どうということなのかと問う熊さんに、若旦那が講義する。

「百人一首にもはいつている崇徳院さまの有名なお歌で、下の句は『われても末にあはんとぞ思ふ』というんだが、それが書いてない。これは、いまはここでおわかれしませんが、いずれ末にはうれしくお目にかかれますようにというお嬢さまのお心かとおもうと、あたしゃあ、うれしくって、うれしくって……」

その後はお嬢様に会うチャンスがなく、若旦那は恋の病におちて、ふらふら、医者 of 診立ては余命五日。

熊さんが急遽よびつけられ、五日のうちにお嬢さまをみつ付けてくれれば借金を棒引きしたうえに三軒長屋をやるというはなし。

熊さん、おおはりきり、弁当もちであっちこっちを奔



走するが、お嬢さまはみつからない。

熊さんの嫁が名案を出した。

「おまえさん、旦那に歌を書いてもらったんだろ？ それは何よりの手がかりじゃあないか。それを大きな声でどなりながら歩いてごらん。そうすりゃあ、それを聞いた人のなかには、その歌についてこんなはなしがありますとか、こんな噂を聞きましたとか、名のつて出る人があるかもしれないじゃあないか。それでもだめなら、お湯屋とか、床屋とか、人の集まるところへ行ってどなつてごらん。お湯屋も床屋も空（す）いているところはだめだよ」

嫁さんの提案にしたがつて、こっちの床屋で「瀬を早み……」、あっちの床屋で「瀬を早み……」、十八軒まわって十九軒めでは、

「あんた、今日は朝から三度目だよ。剃るヒゲなんか、のこっていませんぜ」

厭味をいわれても屈せず、でーんと座って番を待っている、威勢のいい新客がはいつてきた。

「おう、親方、ちょっといそぐんだけど、やってもらえねえかい？ あっ、そこに待ってる人がいた。弱つたなあ」

「あたしですか？ あたしならいいんですよ。もうどこも剃るところがないんですから……」

「そうですね、すみませんね。じゃあ、親方、ひとつ頼まあ」

新客もまたお嬢さまの筋から頼まれ、熊さんとおなじ

く命がけの若旦那探しをやっていたとわかって、めでたし、めでたしの結末（興津要編『古典落語』）。

三都（江戸・大坂・京都）の髪結床はふたつの世界をつなぐ狭いトンネルであった。

茫漠たるちまたに展開している市民の行動の情報が髪結床のトンネルのなかに凝縮されている。

ちまたでは接しがたい人事情報も、床屋にすれば意外な近間にみつかると可能性は高かった。熊さんの嫁さんが「床屋か湯屋でお嬢さまゆかりの情報を探せ」と指示したのは賢明であった。

髪結床は珍奇、新奇なものごとに容易に触れられる場であった。いまは何を話題にすればいいか、ナンノナニガシの俳優のことを知っていれば、とりあえずは世間知らずとおもわれずにすむ、それが髪結床であった。

知りたいときには、ともかくも髪結床の暖簾をくぐる。知らせたいときにも髪結床の暖簾をくぐればいい。お手軽で、効果は高い。

（03）「助六じつは曾我五郎」

さて、そろそろ、花川戸助六がきれいさっぱりとヒゲを剃り、颯爽と登場する。

歌舞伎『助六由縁江戸桜』が演劇界に登場し、現在のかたちにきまるまでのいきさつを諏訪春雄編著『助六由縁江戸桜 寿曾我対面』の「解説」によって整理してみる。

元禄のはじめ、大坂の豪商万屋の長男助六と新地の遊女揚巻（あげまき）が心中した。

心中事件をもとに、元禄十三年（一七〇〇）、大坂の竹本座で竹本内匠理太夫が浄瑠璃、大坂千日寺心中物語』を演じたのがヒゲの助六ドラマのはじまり。

『大坂千日寺心中物語』をもとにして上方ではいくつかの浄瑠璃作品が演じられ、京都の早雲座や榊山座、大坂の片岡仁左衛門座や嵐大三郎座では歌舞伎作品も上演された。

上方の心中事件を江戸にうつして劇化したのは二代目の市川団十郎である。二代目団十郎は山村座の狂言作者津打治兵衛と協同し、正徳三年（一七一三）に山村座で『花館愛護桜（はなやかたあいごのさくら）』を上演した。助六はもちろん団十郎。

この作品ではじめて助六の名に「花川戸」の冠語がのせられた。江戸の花川戸に実在していた助六と名のる男伊達にちなんだ冠語とだそうだが、確証はないといわれる。

助六のライバル意休（意久）はここで初登場した。江戸に実在した侠客の深見十左衛門自休と、元禄のころに吉原にいた幫間のヒゲの無休をあわせて創造したのが意休だといわれるが、これまた確証はないそうだ。

団十郎が二度目の助六を演じたのは享保元年（一七一六）、中村座の『式例和曾我（しきれいやわらそが）』で、ここではじめて「助六じつは曾我五郎」の関係が設定された。

初登場のときから意休はヒゲをはやしていたとみていい。モデルになったとされるヒゲの無休のヒゲを無視して名の「無休」だけを取りこみ、「無」を「意」に変えて舞台に出すとはかんがられない。

さきに注目されたのがヒゲ、「無休」はヒゲに付いてきただけであって、太郎でも次郎でも、ジョンでもウィルキンズでも、なんでもかまわなかった。

さて、助六は、なぜ、あんなにもきれいさっぱりとヒゲを剃っているのか？

助六ドラマを観るかぎり、助六がヒゲを剃らねばならぬ必然性はない。ヒゲがふさふさしていても助六は役割を演じられる、ヒゲを生やしていてもさしつかえない。

ならば、なぜ、ヒゲを剃ったのか？

意休のもじやもじやヒゲとの対照を際立たせるために助六はヒゲを剃るのか？

そんなはずはない。

主役は助六、意休は敵役だ。敵役の扮装に主役の扮装を合わせるのは理屈に合わない。助六が先、意休は後。

助六は絶対にヒゲなしでなければならぬから、もじやもじやヒゲの侠客深見十左衛門をモデルにして意休のキャラクターが創造された。

ドラマには助六のヒゲ剃りの場面はない。助六のヒゲ剃りはドラマ以前だ。

ヒゲを剃るまえの助六は、じつは助六ではなくて曾我五郎だ。

五郎がヒゲを剃ると助六になって助六のドラマがはじまる。五郎の生まれ変わり、あるいは二代目だから「五」

「一」＝「六」——助六」となった。  
ヒゲの五郎とヒゲなしの助六とのあいだに、なにがあるか？

ヒゲの時代からヒゲ剃りの時代への転換がある。転換は視られず触れられずの抽象だが、これを、視られる触れられる具象に言い換えるならば、その現場は髪結床だ。

ヒゲのある曾我五郎が髪結床にはいり、ヒゲなし、月額、チヨン鬻の助六になって出てきて助六のドラマがはじまる。

ヒゲ剃りを習慣としている男が髪結床でヒゲを剃ってもらい、月額をとのえてもらえば助六になれるわけだが、だれでも、というわけにはいかない。

助六になつて髪結床を出るのはだれにでも可能だが、そこで何をやるのか、はっきりした目標と強い決意がなければ助六にはなれない。

助六には目標と決意がある。

行方不明の源氏の宝刀、友切を探しだして義父——母の再婚相手——の曾我祐信を苦境から救い、その友切で父の敵の祐経を討ちはたす。

友切が行方不明になつたのは祐信の責任だと裁定されていて、友切が発見されないかぎり祐信の恥辱は雪がれない。

友切の搜索は助六の義務だ。

助六は義子だから、友切を発見して義父祐信の恥辱を晴らす義務があるが、それだけではない。もう一歩つっこんだところで、友切が行方不明になつたについては、祐信よりも助六にとって重い責任があるといわざるをえない事情があつた。

助六——の前身の五郎——は工藤祐経を討つてから頼朝の陣幕に走りこみ、祐経殺害のいきさつを陳述して正当な仇討ちであることを承認してもらおうとした。

このとき五郎は武装解除され、友切はとりあげられて頼朝の所有となつた。

源氏の宝刀の友切が波瀾万丈のいきさつのあとで源氏嫡流の頭領、征夷大將軍の頼朝の手にもどつた。

祝すべきではあるが、「そうはいわせぬ、なにがめでたいものか！」と猛烈に抗議する声もあがる。

源義経の生涯、その悲劇的な滅亡に注目すれば、なるほど、友切が頼朝の所有になつたのを「めでたい」なんていえないくなる。

曾我五郎が変身して花川戸助六になる、なんていうややっこしい仕掛けがつけられたその端緒は義経の生涯に

寄せる共感と憐憫の涙なのだ。

(04) 友切は蘇生する

助六の生涯は曾我五郎の生涯そっくりそのままの繰り返しではない。

五郎の生涯の二つの時点で、助六の別の人格が芽生える。

第一は五郎と十郎が父の敵を討って亡父河津祐通の恨みを晴らすと決意したとき、第二は行方不明の友切を見出すことを義務づけられ、義務を果たして義父祐信の恥辱を晴らすと決意したときである。

仇討ちは実父にたいする孝行、友切発見は義父にたいする孝行、ふたりの父にたいする孝行が同時に果たされる仕掛けだ。

さてここで、友切丸が行方不明だという、じつになんとも厄介な問題を片づけなくてはならない。

富士の裾野の頼朝の本陣で五郎は武装解除され、友切は五郎からとりあげられて頼朝の所有となった。

その友切が、なぜ行方不明なのか？

カギは源義経である。

義経の悲劇的な滅亡に同情する立場からすると、友切の正当なる所有者は義経であって、頼朝ではない。

頼朝との仲が険悪になったとき、義経は友切を所有していた。友切を揮って頼朝を討つべきであったのに、なにをかながえたのか義経、箱根権現に「兄上との不仲をやわらげたまえ」と祈誓し、しるしとして友切を奉納した。

宝刀を手離した義経はみずから武装解除したも同然、奥州に逃れて滅亡する。友切で頼朝を討たず、箱根権現に奉納したのが義経の大失敗だ。

義経の失敗とは性質がちがうが、五郎も失敗をした。

五郎は箱根権現の別当行実から友切を贈られ、その友切で工藤祐経を討った。

深手を負い、死を覚悟した兄の十郎が五郎に声をかけた、「頼朝殿の御前にまいって仇討ちの始末をもうしあげよ」と。

兄の遺言にしたがって五郎は頼朝の陣幕に走りこもうとしたが、護衛の武士にさえぎられ、身柄を拘束され、友切はとりあげられて頼朝の所有となった。

仇討ちのいきさつを主君に言上し、正当なる仇討ちと認めてもらえば罪に問われないうえに、褒賞をうけることもありうる。だから、十郎のいうのももつともではあったが、じつはこれが五郎と十郎の重大な失敗だった。

五郎は頼朝に仇討ちの正当性を訴えるのではなく、友切で頼朝を殺すべきであった。

五郎がその気なら頼朝を討つのは容易だったのに、その気がないから身柄を拘束され、処刑されてしまう。

(05) 友切は自分でかんがえ、自分で行動する

五郎が頼朝を討たねばならない因縁は、祖父の伊東入道祐親(すけちか)にある。

頼朝が流人として不遇の日々をおくっていたとき、祐親の娘を寵愛し、男の子がうまれた。

頼朝は息子を千鶴(せんづる)と名づけ、天下を取ったら関東の支配は千鶴に任せようと期待していた。

だが、千鶴の祖父の祐親は、この事実が平家に知られたら身の破滅になるかもしれぬと恐れ、家来に命じて千鶴を簀巻(すまき)にし、岩倉の滝山の蜘蛛淵に沈めた。娘は頼朝から奪いかえし、伊豆の江間次郎に嫁がせた。無力の頼朝には反抗の術もない。

それから数年、平家打倒の軍をあげた頼朝のもとに關東諸国の武士はわれさきにと馳せ参じたが、祐親は寄るうともしない。

頼朝から祐親に「参れ」と声がかかったが、「頼朝殿にたいし、われは不忠であつた。参れば、かならず首を切られる」

これを遺言として祐親は切腹した。頼朝が祐親を、切腹せざるをえない苦境に追いこんだのだ。

だが、このとき、祐親はすでに武士ではない。息子の祐通が工藤祐経に殺され、三十五日の仏事がおわると隠居出家して入道になつていた。

頼朝は、武士ではない祐親を権柄づくで切腹させた。これは不法非道である。祐親の嫡子は祐経に殺されたから、祐親の敵の頼朝を討つのは五郎と十郎の権利、義務である。

そうと知つてか、知らずか、兄は弟に「ご主君に仇討ちのいきさつを言上せよ」と指示し、弟は兄のいうのに従つて陣幕にはいろいろとして逮捕、処刑された。

五郎は友切を持っていた。友切をうばわれたのは逮捕されたあとだ。五郎が頼朝の陣幕に走りこもうとしたとき、友切は五郎がにぎっていた。

友切が源氏重代の宝刀の本質を失わずにいたならば、女装の若武者に抱きすくめられるなんていうぶざまなことにはならず、頼朝をずばりと切っていたはずだ。

だが、友切は宝刀の本質を失っていた。なぜかといえは、正当なる持ち主の五郎が、友切で頼朝を切る気がなかつたからだ。

友切にはその気があるのに、持ち主の五郎にその気がない。

友切は失望、落胆、宝刀から駄刀になりさがってしまった



った。五郎があつさりと逮捕、処刑されたのはこのためだ。

憤憑（ふんまん）やる方ないのは友切である。

別当行実から五郎に贈られたとき、友切はおおよろこびした。

源氏重代の宝刀としておもいつきり働ける、伊東入道祐親と河津祐通の敵、不法非道の頼朝の首を切つて正義の在り処をみせてやるぞとはりきつたのも束の間、五郎は工藤祐経を討つただけで満足し、頼朝を討つどころか、頼朝の陣幕に走りこんで仇討ちのいきさつを言上し、正当性を認めてもらおうなんていう柔弱な態度をきめこんだ。

五郎から頼朝の所有になった友切は、出直しの途を模索する。出直しのほかに、生き甲斐がない。

——頼朝を、より強く、より正しく憎む勇者の出現を待つ、そのほかに途はない！

勇者の出現を待つために、友切はみずから身を隠した。身を隠して、頼朝を、より激しく、より正しく憎む勇者を挑発して誘い出そうと計略をたてた。

勇者が頼朝を切ろうとするなら、友切の神秘の威力に頼るしかない——そのような舞台を設定した。

友切の計略は当たった。

新しい勇者があらわれた、ヒゲの意休である。

意休には頼朝を切ろうとする正義の勇氣がある——そう判断した友切は我が身を意休にゆだねた。

意休みずから頼朝を討つか、しかるべき協力者をさがし、ちからをあわせて討つか、それはともかく、意休はやってくれる——そうと判断して友切はみずからの身を意休にゆだねた。

意休は、協力者をもとめ、ちからをわけて頼朝を討つ

作戦をたてた。

意休が白羽の矢をたてたのは助六である。

だが助六はおのれに課せられた深刻、重大な宿命を、まだ知らない。

事態の一步も二歩も深いところを知る意休に、知らない助六が喧嘩をふっかけるのを合図に『助六由縁江戸桜』の幕があがる。

(06) 五郎はヒゲを剃って助六になる

助六は友切の行方を探して奔走した。

そしてようやく、ヒゲの意休の刀が友切だと確信した。あれこれと喧嘩をふっかけて意休を挑発し、刀を抜かせようと計画している。意休の刀が見込みどおりに友切なら、命がけて戦って友切を奪いとる。

意休は助六の正体が五郎であり、友切を探しているのを知っている。知っているから五郎の挑発にはならない。意休の刀こそ、ほかならぬ友切なのだ。

五郎と、五郎の相方の揚巻、そして意休が花の吉原で意地と張りをぶっつけあっている。

そこへ、白酒売りの新兵衛が登場、絡む。

白酒売りの新兵衛、じつは五郎の兄の十郎である。父の敵の工藤祐経、そして友切丸の行方を探そうと白酒売りに化けて吉原にはいりこみ、弟に出会った。

噂にきけば五郎は喧嘩ばかりしている、なぜかと詰問する兄と、弁明する弟。

「もつたいない。なんしに親兄弟に苦勞をかける喧嘩をいたしましょうぞ。この喧嘩は孝行にするのでござりまする」

「おれにいわれ、しょうことなしに孝行とは。して、

喧嘩をすれば何が孝行じゃ」

(トこれにて、助六、あたりへ思い入れして)

「いつぞや箱根において、友切丸の紛失。祐信さまの御難儀。百日の日延べなれども、今においてその行方が知れませぬが、

兄じゃ人、なんぞ手掛かりでもござりましたか」

「サア、今に知れぬゆえ、苦勞しているわえ」

「サ、その友切丸がない時は、祐信さまのお命にかかわる事、まった敵(かたき)祐経を討つには友切丸にて討てよと箱根権現の靈夢。どうぞ友切丸を詮議し出だし、祐信さまの御難儀をばお救い申し、敵祐経を討たんと、千々に心は砕けども、それぞという手掛かりもなし。さいわい思いついたるこの喧嘩、廓は人の入り込む所、無理に喧嘩をしかけ、刀を抜かねばならぬようにしかけ、抜き合わせば、これかそれかと白刃を握って心を尽くすこの助六が心、どのようなであろうと思つて下さりませ」(助六

由縁江戸桜」・・・は高野)

助六といえは吉原だが、江戸の名所で華美第一というだけの理由で吉原が舞台になつたわけではない。助六のセリフにあるように「廓は人の入り込む所」、つまり落語「崇徳院」の髪結床とおなじ性格づけで吉原の三浦屋がドラマの舞台になっている。

助六が助六であるためには、五郎のヒゲを剃つて、つるつる、真つ白の顔にならなければならない。

五郎が髪結床でヒゲを剃り、月額をととのえてもらつて助六に変身した瞬間、髪結床は吉原の三浦屋格子先に変わった。

そこへ兄の十郎が登場して、兄弟ちからをあわせて友

切丸と工藤祐経を捜索することになる。

(07) 意休の大演説

五郎は意休に喧嘩をふっかけ、刀を抜かせようと挑発するが、五郎の正体を知ってか知らずか、意休は挑発にのらない。

「ときに、友切丸の手掛かりでも知れたか」

「いまだそれとは知れませぬが、最前意久（意休）が刀を抜こうとして、抜きかねましたは心憎うござる」

五郎が挑発したとき、意休は刀を抜きかけたが、もう一步のところでおのれを抑えて我慢し、抜かなかつた。

意休の刀こそ友切ではないかとの五郎の推測は確信に高まる。

助六と揚巻がいちゃついているところへ意休が登場、揚巻の愛の争奪戦をはじめめる。

助六の勝利があきらかになったとき、意休は「助六が女郎を盗んだ」といい、助六に「盗つ人」の汚名を着せ、なじる。

だがしかし、意休の「盗つ人」呼ばわりは助六を激励する心理作戦なのだ。

意休は兄弟の正体を知っている。

知っているだけではない、五郎が揚巻の愛の深みに嵌まったあげく、仇討ちと友切捜索をないがしろにするのではないかと案じている。母の満江が、五郎の遊女狂いと喧嘩狂いを知って気に病み、声涙ともにくだる意見をしても態度をあらためようとしなない助六だから。

「助六、なぜ盗みをする。そんな根性で大望成就がなるものか。ここな時致ときむね（ときむね）の腰抜けめ」

（時致は五郎の忌み名）

「待て意久。それがしが本名を知り、腰抜けとは、時致が何が腰抜けだ」

「腰抜けではあるまいか。父祐安（祐泰）が無念の最期。その仇を報わんと思う心もなく、傾城に本心を乱せしうつけもの。コリヤ、敵左衛門祐経は、鎌倉山に碇固（いしずえかた）く、時めく大名。ア、聞こえた。所詮かわなぬと思い、色と酒とに身を崩すか。たとえその身は不器量たりとも、など念力の届きなば、大望なにむなしからんや。兄弟離ればなれにして、敵が討たれようか。敵を討たねば腰抜け武士、意久（意休）が情けの教訓の扇、魂を入れなおせ。武士になれ、こな時致の卑怯者めが」

意休は扇で助六をさんざんに打つが、助六は反抗せず、じーつと耐える。

助六が反抗しない理由は母である、母からわたされた紙子（かみこ）である。紙に柿渋を塗り、夜露にさらして手で揉みやわらげて衣に仕立てたのが紙子、紙衣とも書く。

紙子は破れやすい。母は自分で着ていた紙子を脱いで助六にあたえ、教訓を垂れる。

「コレ、この紙子をこなたにやろう。手荒うすると破れるぞ。どのような口惜しいこともじつと堪忍して、紙子の破れぬよう。もしも短気を起こせば、紙子が破れる。これを破ると母の身へ傷を付けるも同然じゃぞ」

しぶしぶながら、助六は紙子を着た。

「オ、若い身では恥ずかしく思おうが、母じゃと思つて大事にしゃ」

反抗できない理由を涙ながらに訴える助六の様子に、意休は怒りをゆるめる。

「ムウ、母の紙子を母と思い、大切になすからは、孝行の志がないでもない。何ぞ誓えて……」

その場にあつた香炉台をもちだし、ヒゲの意休、一世一代の大演説。

「コリヤ時致、大望ある者は、人の恨みを受けず、人の情けを受けねば、願いはかなわぬ。この遊所へ入り込み、喧嘩口論、まさかの時、なんの益。たとえていわばこの香炉台、この三つ足は曾我兄弟、祐俊、祐成、時致と、三人兄弟合体して、まつ、このごとく力を合わすものならば、祐経はおるか、祖父伊東が敵たる 頼朝殿も討たるぞ。そちたちが心、頼朝殿を恨みる所存もあるならば……」(祐俊は兄弟の兄・・・は高野)

討つべき敵として源頼朝の名が出た。

ほかならぬ意休の口から頼朝の名が出るのは意外千万だが、われわれはともかく、助六の驚愕は甚大であつたはずだ。

助六は意休が友切を持っているのではないかと見当をつけていた。喧嘩をしかけて怒らせて刀を抜かせ、友切かどうかを調べるようとさんざんに苦心してきた。

意休は、助六の企みを知っていた。

知っていたばかりではない。助六が自分の腰から友切をうばい、奪った友切で工藤祐経を討つつもりなのもまた察していた。

そしていま、「おまえたち兄弟の敵は工藤祐経だけではない。頼朝も討つて祖父の仇討ちをしなければならぬのだ」と激しく教訓するのである。

「年寄つたれどもこの意久、まさかの時は共々に、力になって得させまいものでもない。この香炉台の如く、兄弟心を合体なさば、百斤の鼎を置くと手折れず崩れず。また兄弟、心も離ればなれになる時は、まっ、この如く……」

腰の刀を抜き、香炉台をまっぶたつに切る。

その隙に助六、意休の刀に手をかけて寸法を計測した。刀にかけた助六の手をふりきり、意休は教訓のため押し、のセリフを吐く。

「倒れるぞよ。廓通いをやめにして、人になれ、人になれ」

扇で助六を叩き、

「人多き人の中にも人ぞなき、人になれ人、人になせ人。人目を忍んで時節を待て。助六さらば」

助六と入れ替わって揚巻が出てくる。

「助六さん、紙子が破れたわいな」

「ナニ、紙子が破れた。ホ、ホ、ホイ。この紙子を破るまいとじつと無念をこらえたが、この紙子がこ  
う破れては、もう堪忍がならぬわえ」

「コレ、必ず短気を出すまいぞ」

「揚巻、今、教訓の折から、思わず香炉台を切り割つたる意久が一腰こそ、まさしく尋ねる」

「友切丸かえ」

「コリヤ、声が高い」

(ト揚巻を引き寄せささやく)

「そんなら今宵」

「コリヤ」

「ござんせ」

紙子が破れたのは助六が母の戒めの呪縛からみずからを解放し、武力行使の決意をかためた暗示だ。

夜の更けるのをまっけて意休を襲い、友切を奪取する計画ができた。

(08) 意休はみずからの正体を明かす

深編笠をかぶり、朝顔仙平をお供に意休が三浦屋から出てくる。

物陰から飛び出した助六が仙平の提灯を切りおとす。

「何者だ、声をかけずに切り付けたは。ムウ、わり

や盗人だな」

「盗賊ではないぞ」

「そういう声は助六、卑怯な待ち伏せ」「イ、や、



卑怯でない。最前よりそれがしへの教訓の折、香炉台を切り割りし一腰こそ、曾我殿原（そがとのばら）が難儀となつた友切丸。

その一腰を詮議のため、廓へ入り込みしこの時致。友切丸に心をかけるからは、汝も必ず本名あらん。サア、尋常に名を名乗り、一腰を渡せ」

助六に「名乗れ」と詰めよられた意休、まさか逃げはしないはず、名乗ればこの場は意外千万の展開になるはずだから、「助六も揚巻も耳の穴かっぱじつてよつく聞けよ」などと大見得を切り、

「われこそはクドウスケツネ！」

大音声に名乗るはずが、そうではなく、名乗るには名乗つたのだが、

「かねて汝ら兄弟を我が味方となし、頼朝を亡ぼし、平相国（へいしょうこく）の跡とむらわんと思いに、かく見顕わされしうえは何をか包まん。いかにも意久とは仮の名、誠は伊賀の平内左衛門（へいないさえもん）」

意休が祐経ではなかつたのは意外だが、驚愕というほどでもない。それよりは、意休が「われこそは！」と名のつたその名が伊賀平内左衛門だったこそ、まさに意外千万。

平内左衛門の忌み名は家長、歌舞伎や浄瑠璃では源氏に復讐する平家の落武者として活躍する。劣勢とわかつていながらあくまでも復讐をいどむ、演劇の世界のアンチ源氏のヒーローが平内左衛門だ。

建久六年（一一九五）二月、奈良の東大寺の再建供養

がおこなわれ、出席した頼朝の命を狙って失敗、とられて京都に連行され、六条河原で処刑された男がいた。

『平家物語・六代被斬（ろくだいきられ）』ではその名は薩摩中務家資となっているが、家資の経歴その他の詳細はわからない。

鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』には東大寺の事件が記録され、犯人は「平氏の家人、前中務丞平宗資父子」ととなっている。宗資は家長ではないかとする解釈もあり、意休が名のつた「平内左衛門家長」の实体は家資または宗資だろう。

源氏に復讐する、源頼朝の命を奪う、それだけがヒゲの意休——平家長の生き甲斐だ。

共感者も援助者もない、まったくの孤立無縁の意休である。頼朝の命を奪うなんて威勢はいいけれども、可能性は皆無——それで当たり前だが、じつはそうではない。意休が頼朝を討つ必然性、そして可能性は濃厚なのだ。

なぜか？

謎を解く鍵は友切にある。

源氏の宝刀として鎌倉の宝庫に秘蔵されていた——はずの友切が、現在ただいまはヒゲの意休の佩刀になっている。

神は、または天は、友切が意休の佩刀になるのをのぞんだ。

なんの、ために？

神が、天が、覇者の頼朝を滅亡させようとしたからだ。頼朝を滅亡させる使者として意休がえらばれた。

意休は神の使者、天のお使い、天子だ。

意休がみごと頼朝を亡ぼせば、友切は源氏の宝刀から昇格して天下の聖剣になる展望もみえてきた。

新しい聖剣が出現するか、しないか、じつになんとも微妙で神秘的な瞬間だが、ことと次第によっては天子役が意休から別人に振り替えられることもありうる。

天子役の振り替えがありうる、そこに、意休のライバル助六が登場する必然があった。

人気をくれば助六あつての意休だが、さきに意休があり、意休のライバルとしての助六の登場が可能になったいきさつから目を逸らすべきではない。

意休の正体は平家長である。

平氏の武士が源氏重代の友切を佩刀とするについては<sup>じくじ</sup>忸怩たるものがあつたとおもわれるけれども、俗の存在の家長ではなく、意休に化けて聖天子の役割をあたえられることで内心の忸怩、躊躇は解消されたと解釈したい。そしてまた、意休が天子であることを重視すれば、あの、ものすごい、人間のヒゲとはおもわれない大量のヒゲの意味するところがわかってくる。

意休はふつうの人間ではなくて神の使者、天子である。あのヒゲは、意休が異次元の存在であることを告げるサインなのだ。

(09) 友切には頼朝を滅亡させる能力がある

さて、頼朝を亡ぼす天子の大役をおおせつかつて登場する意休だが、あまりにも大役である。

意休の前身の平家長は平家の武士とはいいいながら、歴々の平家ではなく、いわゆる家人の身分であつたらしい。天によつて「討ち亡ぼせ」と指示された頼朝は権大納言、右近衛大将、そして征夷大將軍の要職を歴任する天下の覇者である。

源氏の宝刀友切丸をさずけられたとはいえ、家長が對抗できる相手ではない。

単身では無理だが強力な味方があれば、とかんがえたのだろう、強そうな男を物色するうちに、助六が目についた。浮かれ男に身をやつしてはいるが、自分を見る目が尋常ではない。揚巻を奪われまいとする嫉妬の鞘当てだけではなさそうだ。

助六が友切をねらっているかわかり、そこから、助六と兄の新兵衛は父の敵の工藤祐経を狙っていると知った。我が身にとって危険千万な奴ではあるが、こういう男こそ強い味方になりうるのだとかんがえ、「喧嘩をするな、人になれ」と教訓するのを隠れ蓑にして接近した。助六が「友切をこつちへわたせ」と詰めよったときの意休の返答のうちの一句、これがなかなか重要だ。

「かねて汝ら兄弟を我が味方となし、頼朝を亡ぼし  
頼朝を亡ぼし、平相国（清盛）の霊をなぐさめるため  
にこそ友を盗みだし、ここまで隠し持ってきた。  
ではあるが、そつちの出方次第では友切丸をゆずらん  
でもない。」

「大願成就のその為に、盗み隠せし友切丸、たつて  
渡せとぬかせば命がないぞ」

友切を使えば頼朝を亡ぼすのは可能だ——これが天意である、神の意である。

であるからには、「友切をわたせ」と意休に迫る助六は——意休に代わって——頼朝を亡ぼすことを誓わなければならぬ。意休の大願成就に味方すると誓うなら友切はわたさないでもないが、工藤祐経を討つだけなら、

命にかえてもわたすものか！

「大願成就のその為に、盗み隠せし友切丸、たつて渡せとぬかせば命がないぞ」

「小癩な、友切丸を渡せ」

「仙平、ぬかるな」

「心得ました」

友切を賭けての決闘がはじまる。

意休の剣の腕前は助六には劣る、つまり勝てない。意休は助六に負けるときまっているから、ものの三十秒もしないうちに友切は助六の手にわたる。

天意、神の意によって友切をさずけられた意休である、どんな強敵にも勝てるはずなのに、なぜ、助六に勝てないのか？

友切が意休にさずけられたのは頼朝を亡ぼすためであつて、助六なんていう小者は目標ではない。意休が頼朝を襲つて命を奪う、そのときにだけ友切は神秘の威力を発揮する。

勝負は簡単について、友切は助六の手にわたる。

じつはこれ、意休の計算だ。

助六に負けて、命と友切を奪われるように意休が計算したのである。

助六は、頼朝殺害に協力すると誓わなかつた。誓わなのまま、友切をわたせと迫り、意休が応じないから切り合いになり、友切は助六に奪われる。

助六に奪われるのであれば、穏和なかたちで助六に譲渡せずにする。これが意休の計算の眼目であつた。

意休の心情を憶測すれば、以下のようであろう。

「誓つてくれぬか、友切で頼朝を討つと。誓つてくれる

なら、友切をわたさないでもない」

「頼朝さまよりも先に命を狙うべきはヒゲの意休と工藤祐経」

「なぜ、わしを、意休を？」

「意休が友切を盗んだゆえに、われら兄弟の義父、曾我祐信さまは責任を問われて容易ならざるご難儀」

「友切がわれ意休の手にわたったのは天意による。おまえの義父、曾我祐信殿については恨みも敵意もない。われを敵呼ばわりするのは筋違い」

「工藤祐経は放っておけというのか」

「頼朝を亡ぼせば、おまえが手をくださんでも工藤などは春の雪、みるみるうちに融（と）けて消える」

意休がいくら口を酸っぱくして口説いても、助六は頼朝を殺すと誓わない。

誓わぬ助六に譲渡されれば、友切は頼朝を殺す能力を失ってしまう。源氏重代の宝刀から、ただの鈍刀（なまくら）になってしまふ。これこそ意休がもつとも恐れるところだ。

譲渡ではなく、暴力によって奪われるならば友切の神祕力は失われない。だれか別人に所有される友切が天意の委託を發揮して頼朝の命を奪う可能性は大いにある。

だれか別人 が助六であってもかまわない。

助六が意休を殺して友切丸を奪う。そのあとで、友切に託された天意、神の意が作用して助六の気持ちを变える可能性はある、期待できる。

頼朝殺害に展望をつなぐためには意休がこの場で殺されること、これがいちばん現実的で有効な方法である。

助六は意休を切り殺し、佩刀を奪って検査し、友切にちがいないのを確認した。

この時点ではまだ、助六は頼朝を殺害する気はない。

三浦屋の若いものが意休の死体を見つけ、騒ぎだす。

「モシモシ、この廓は大勢が困んでいれば、落ちさ  
んす道はないわいなあ」

「幸いのこの梯子、屋根伝いに」

「危ない〜、怪我さんすな」

（ト助六、梯子の中程へあがる）

「モシ、そんならわしや、西河岸の方へ回っている。

田圃（たんぼ）の方へおりさんせ、助六さん」

（10）助六は至上の使命を悟る

助六は三浦屋の屋根から、いちどは闇に消える。

闇のなかで、友切に託された天意が助六の精神を刺激し、いまや友切の所持者となった自分の第一の使命は頼朝殺害だと悟った。

ヒゲを伸ばして曾我五郎にもどり、ヒゲの意休が命に替えて奪われてやった友切を使って工藤祐経を討った。

祐経を討った余勢を駆って頼朝の陣幕に走りこんだのもわかつているが、そこで気が変わったらしい。頼朝を討つはずだったのに、討たず、処刑されてしまった。

処刑されて、気がついたのだらう、こんなことなら頼朝を討つほうがよかった、と。

手遅れの感もあるが、五郎が処刑され、この世に不在となったのは助六にとっては解放である。意休を殺して友切を手に入れ、三浦屋の屋根から消えた時点にもどることが可能になった。

やりなおしだ。

本人としては深刻な気分でも、他人にはバタバタの滑稽としかみえないが、それはそれ、仕方はない。

五郎は江戸時代の髪結床でヒゲを剃って助六にもどり、

ヒゲの意休と対決し、意休を殺して友切丸を奪い、ヒゲを伸ばして五郎にもどり、富士の裾野にかけつけて工藤祐経の命を奪い——ここまでではうまくいくんだが、そのつぎの頼朝殺害がうまくいかない。

助六はいまだに、バタバタの滑稽をくりかえしているんだろう。

助六が頼朝を倒したならば、この世から覇者というものは消えはずだ。

助六が頼朝殺害に失敗したから、いまだに覇者が、つぎつぎに登場して愚行蛮行をくりかえしている。

だが、状況は絶望ではない。

助六が健在だから。

助六は依然として歌舞伎の舞台に頻繁に登場して、意休とわたりあい、友切を奪おうと奮戦する。

友切と助六の奮戦の姿があるかぎり、覇者の存在をゼ口にしたい衝動が消えることはない。

助六が健在だと信じていいのは、友切（髭切）が箱根権現に返納されていない——らしい——事実があるからだ。

箱根神社の社伝では、曾我兄弟ゆかりの太刀として箱根権現に秘蔵されているのは微塵丸と薄緑だとされる。

「微塵丸は備前長円作。源家の重宝とされ、始め木曾義仲が所持していたのを当初権現に奉納。建久四年五月、当社に心眼成就を祈願した兄弟への引出物として別当行実僧正より兄の十郎祐成に与え、仇討本懐後、源頼朝が召し上げて再び当神社に奉納したものだ」という「（箱根神社『箱根神社』）」

『箱根神社』は「そのへんの事情は『曾我物語』に詳



しい」といい、微塵丸が木曾義仲の三代相伝の三宝のひとつとして箱根権現の宝殿に秘蔵されており、「宝殿は別当の管轄であるから、宝物の処分は別当である我れ行実の思いのままになる」との理由で、行実から曾我十郎に贈られたと説明している。

ぼくが読んだ『曾我物語』は日本大学総合情報センタ―所蔵の訓読本（大石寺本）を定本とする小学館版『新編 日本古典文学全集53』、これには木曾義仲の宝刀は登場しない。別当行実が五郎に贈ったのは「兵庫鎖の太刀」であり、義経が木曾義仲を討つべく上京するときに奉納したものと注釈されている。十郎に贈ったのは「黒巻鞘の剃刀」だが、由来は書かれていない。この「剃刀」とは短刀であってヒゲ剃り専用の剃刀ではない。

『箱根神社』が史料としている異本の『曾我物語』を読まずにいうのは片落ちだが、微塵丸の存在感は希薄である。箱根神社に秘蔵されているのは事実だろうが、曾我五郎との関係の印象が希薄だ。友切丸が権現に返納され、微塵丸と改名されたとするはなしもきかない。

だから、助六は健在なり、といえる。

健在だから、覇者頼朝を抹殺する意志は衰えない。何度失敗してもあきらめず、友切をにぎりしめ、頼朝肅清のチャンスを狙って奮闘している。

助六は三浦屋の屋根から消える。

われわれは、消えてゆく助六の背中に頼朝滅亡を期待する視線をあてる。

（11）覇者の家に伝家の宝刀は無用

友切の最後の所有者は意休ではなく、助六であった。

これは、われわれにとっては幸運だ。

意休の頼朝抹殺の意志は源氏にたいする平家生き残り

の復讐に限定されている。

復讐の意識やエネルギーは主従や親子の狭い人間関係のなかでしか有効ではないから、復讐する立場、復讐される立場にいないひとは共感しない。

徳川家には 伝家の宝刀 の意識が希薄だが、それは徳川家が復讐する立場にたったことがないからだ。

徳川家は清和源氏、新田流の末裔だと自称した。徳川イコール源氏である。自称によるなら、家康は源満仲の子孫なのだ。

満仲の子孫ならば 伝家の宝刀 意識が濃厚であって不思議でないのに、そうではないのは源頼朝からずーっと覇者でありつづけたからだ。

覇者の家に 伝家の宝刀 は不要だ、なんの役にもたない。 伝家の宝刀 の神秘的威力に頼って覇者の地位を維持するのは恥ずかしい。

北条貞時が弘安九年（一二八六）に髭切を鎌倉の法華堂に奉納したはなしがあり、わたしはまだ真否如何をつきとめていないが、事実ならば、貞時は髭切をもてあましたのだ。

北条氏はもともとは平氏である。

源氏に復讐するための 伝家の宝刀 として髭切を秘蔵してもおかしくはないが、貞時の代ともなれば北条氏は復讐者であるよりは安定した覇者の地位を保持しており、先の展望もあかるい。覇者にふさわしくない 伝家の宝刀 をもてあまし、法華堂に奉納したわけだろう。

覇者の家にふさわしいのは妖刀伝説だ。

徳川家では村正が鍛えた太刀を妖刀として嫌悪し、恐れていた。家康の祖父の清康が暗殺されたのも、家康の長男信康が介錯されたのも村正であったとされるからだ。覇者だからこそ恨まれ、妬まれる。

恨み、妬みの心情が刀剣のかたちをとったもの、それが妖刀だ。

(12) 『伊勢音頭恋寝刃』

江戸の武家社会で宝刀意識は希薄化の一途をたどるが、希薄化の過程で名刀意識と入れ替わる状況がみられた。

美濃、備前、相模などの製造地と刀工流派、個々の刀工の名のくみあわせで名刀ができあがり、芸術性が付与されて高価でとりひきされる。

宝刀の価値は故事来歴によって支えられていたが、名刀は故事来歴よりは工芸作品としての価値が先行する。

伝家の宝刀は一本であるのが原則だが、名刀は多数であることが価値である。多数の名刀を所有するのが有力な武家であることのシンボルとなる。

名刀をめぐるトラブルがドラマに仕立てられる。

寛政八年(一七九六)八月二十五日、大坂の角の芝居で近松徳三作『伊勢音頭恋寝刃(いせおんどこいのねたば)』が初演の幕をあけた。

この年の五月、伊勢の古市の遊廓油屋で医者の子孫福齋(まごふくいつき)が乱酒のはてに数名を殺傷した事件がおこった。

十日ほどして松坂で劇化上演され、評判になったのもとに近松徳三が脚本を書いて本格的な作品とし、三代目の阪東彦三郎によって大成された(東京創元社版『名作歌舞伎全集<sup>14</sup>』戸板康二の解説による)。

主役の福岡貢が名刀の青江下坂(あおえしもさか)を揮って大量殺人をする場がクライマックス。

「貢さん、この間に早う逃げて下さんせ」

「イヤ、かく大勢を殺(あや)めしからは、所詮の

がれぬ我が身の上。そうじゃ」

(ト腹を切らんとするを)

「まア〜待って下さんせ」

(トよろしく留める所へ、ばた〜になり、下手より以前の喜助出て)

「お、貢さま、御怪我はごさまりせぬか」

「おのれ喜助、よくも臍物を渡したなア」

「その御腹立ちは御尤もなれど、最前阿波の客が、刀の中身を入れ替えるを間違うたふりをしてお渡し申したその刀が、正真の下坂でござりまする」

「何、すりゃこの刀が下坂とな」

「とつくりと御覧なされませ」

(ト喜助提灯をだす。貢刀を見て)

「お、こりゃこれ、疑いもなき青江下坂、チエ、かたじけない」

「二品手に入る上からは」

「少しも早う」

「本国へ帰参なさん」

(トこの時、若い者の一、出て)

「その刀を」

(ト貢にかかるを、突き廻して切り下げる)

「天晴れ名刀」

「下坂の切れ味」

「お見事」(『名作歌舞伎全集<sup>14</sup>』)

越前の刀工下坂市之丞は徳川家康に召されて作刀に葵の紋を切ることをゆるされ、「康」の字を拝領して名を康継とした。

下坂康継派の刀を葵下坂(あおいしもさか)というが、別に、備中の青江でつくられる刀を総称して青江物(あ

おえもの)かものといい、演劇の世界では青江と葵が混同し、青江下坂として登場することがあった。

宝刀は切れ味を問題にしない。問題にしないというと誇張が過ぎるだろうが、切れ味よりは故事来歴である。

名刀は切れ味、いいかえれば実用性が問われる。だから、ドラマに登場する名刀は実際に切ってみせなければならぬ。

阿波藩の宝物の青江下坂が行方不明となった。

家老の息子の今田万次郎が伊勢に出張して行方を探すが、困難をきわめる。今田家の家来筋の福岡貢が協力をもとめられ、悪人の陰謀にまきこまれて苦勞する。窮地から脱するために、仕方なく刀を揮って多数のひとを殺傷した。

じつは、貢が多数を殺傷した刀こそ青江下坂だったが、貢はそうとは知らなかった。青江下坂と知ったうえで切らなければ、青江下坂を発見したとはいえない。

ちょうどそこへ悪人仲間の若者が飛びだして下坂を奪い返そうとしたから、一刀のもとに切り倒し、切れ味が良かったことから青江下坂だと確認した。

「天晴れ名刀」

「下坂の切れ味」

「お見事」

助六は宝刀友切の行方をつきとめ、奪取した。

貢は名刀青江下坂の行方をつきとめ、奪取し、実際にひとを切つて名刀が名刀である所以をあきらかにした。

友切と青江下坂の相違は、どこにあるか？

友切は実用性——切れ味——を問題とされない。切る

べき相手が正しく選択されるかどうか、それを問題とさ

れる。選択するのは助六である。つまり、助六は友切丸の使用人ではない。

青江下坂は実用性を、切れ味だけを問題とされる。下坂はひとを切れない。切るのは人間である、貢である。下坂をにぎってひとを切る使用人として貢は徴用された。友切と青江下坂のあいだにあるもの、それは脆弱、無力ということ。

友切は個として存在できる。だから脆弱ではない、無力でもない。

青江下坂は個としては存在できない。個としては存在できないから、人間に接近、または媚びることで人間と共生する、そういえる。

### (13) 業物

太刀を所有すべき身分は武士である。

では、武士でないものが太刀にあこがれたり、太刀を所有すると、どういう事態になるか。

侠客、博徒は刀を持つことが多かった。武士の身分特権のシンボルの太刀は敬遠し、脇差だ。

たとえば上州国定村の長岡忠治、長岡忠治よりは国定村の忠治、略して国定忠治のほうを通りはいい。文化十年（一八一〇）に生まれて嘉永三年（一八五〇）に処刑された経歴ははっきりしている。

処刑されてまもなく、忠治の一代記は講談や浪曲に仕立てられて評判になった。そして行友李風（ゆきともりふう）の『国定忠治』が実在の忠治にドラマのヒーローとしての鮮やかなキャラクターをあたえた。『国定忠治』は沢田正二郎の新国劇のために書かれ、大正八年（一九一九）、大阪の弁天座で初演された。

忠治を支えるのは乾分たち、つまり人間である。

幕府の八州まわりの役人の包囲が狭まり、乾分たちは忠治を守れなくなった。やむをえず、忠治はひとりになって信州へ逃れ、生き延びようとする。

「赤城の山も今夜を限り、生まれ故郷の国定の村や、縄張りを捨て国を捨て、可愛い子分（こぶん）の手めえ達とも、別れ別れになる首途（かどで）だ」

（略）

忠治、一刀を抜いて溜池の水に洗い、  
刃を月光にかざして――

「加賀の国の住人小松五郎義兼が鍛えた業物（わざもの）、万年溜の雪水に浄（きよ）めて、俺にやあ、生涯、手めえという強い味方があったのだ」（『行友李風戯曲集』演劇出版社）

これまで忠治を支えてきたのは子分たち、人間のちからである。

その子分たちと離れ、ひとり信州へ落ちてゆくときになつてはじめて忠治は、自分を支えてくれる、乾分とは違う、もうひとつのちからを知った。「小松五郎義兼が鍛えた業物」である、ヒトではなくて、モノのちからである。

公権力にたいする反撥というのはおおげさたかしれな  
いが、忠治の生涯をつらぬく赤い一本の線をかんがえれば、反感だ。公権力を構成し、執行する武士にたいする反感をおのれの誇りとしていたはずだ。

――武士だとか、さむらいだとかいって威張ったところで、主人のまえに這（は）いつくばって生きる家来など、いつたい、どこの、なにが偉いんだ！

――おれには子分という、頼もしい味方があるんだ。

固定し、干からびた主従の関係ではなく、柔軟に横にひろがる人間の関係、それを頼りに生きてきた忠治だが、ひとたび子分たちと別離すれば、軽蔑してきた武士、さむらいよりももっともつと軟弱で不安な立場に立たされる。

とらえようのない不安が言わせたセリフなのだ。

「俺にゃあ、生涯、手めえという強い味方があったのだ」

忠治の悲哀がそっくり、「小松五郎義兼が鍛えた業物」のセリフに吸いこまれる。

業物を赤城山の月光にかざして見得（みえ）を切る忠治は、じつは虚像であって、忠治の手ににぎられている業物が実像なのだ。

（14）海苔の佃煮「江戸むらさき」

業物を月光にかざす忠治の姿がテレビコマーシャルで頻繁に放映されたのは昭和三十年代からしばらくの時期である。

アニメーション原画をつくり、コマーシャルの声を担当したのが俳優の三木のり平であった。

商品は食品会社「桃屋」の海苔の佃煮「江戸むらさき」である。のり平の「のり」と海苔の「のり」がかさなるところから三木のり平が起用されたのだそうだ。

「赤城の山も今夜かぎり」

「うまいぞ」

「へへ、ありがとう」

「お前じゃない！」



「え！」

「うまいのは、これだ！」

「知ってます、大好物、いただきます」

「俺には生涯てめえという、おいちいおかずがあったのだ」

「忠治、御用だ！」

「なんの御用です？」

「江戸むらさきに御用だ」

（三木のり平／小田豊二『のり平のパーツといきましよう』小学館）

赤城山の月光にかざしている忠治の脇差が海苔佃煮の瓶詰めに替わる、その瞬間、脇差に吸いこまれていた忠治が飛びだして、人間忠治にもどる。

あのころからすでに忠治といえば海苔佃煮の忠治、国定村や赤城山の忠治なんて知らぬひとの数が、知っているひとを超えたらう。

「忠治さん。例の業物、どうした？」

「業物……そりゃ、なんのことですか？」

こういう状況だとすれば、慶すべきことなのだ。

（15）「江戸むらさき」 紫色は助六の頭痛鉢巻きの色

海苔の佃煮「江戸むらさき」のコーマーシャル第一号のイメージキャラクターは助六であった。

江戸の流行色「江戸紫」が助六の頭痛鉢巻きの紫色になったいきさつを下敷きとして商品名「江戸むらさき」がきまった。だから「江戸むらさき」のコーマーシャルイメージ第一号は助六なのだ。

助六が夢中でご飯をパクついている。おかずは瓶詰江戸むらさき」。

あれっ、見つかった。どうしておいしいかね、教えましようか。秘密ですよ。これこれ、これですよ。

桃のマークでおなじみの、海苔の佃煮江戸むらさき、その名のとおり江戸海苔の、かおりゆかしきその味に、ついお代わりを、

「桃屋！」

えへん、チャンスですよ。

(URL「昭和夕焼けレトロ動画」桃屋「江戸むらさき」CM・助六篇・1958年 音声より作文)

助六はもともと演劇の人気者として創作された。

だから助六がテレビCMのイメージキャラクターに起用されるのは場違いではない。

忠治については異論もあつたろうが、新国劇の舞台にのぼれば拍手喝采まちがいなしのヒーロー、歌舞伎の助六に優るとも劣らぬ人気者として「江戸むらさき」をはじめとする桃屋の商品の宣伝に絶大な効果を発揮した。

(第8章・終)

『ヒゲは助六』

第9章「うちの女房のヒゲ」

(01) 天皇のヒゲ

天皇はヒゲを剃らないのがふつうだったといえるが、江戸時代にかぎっていえば、ヒゲを剃った天皇、ヒゲは生えない天皇が多かったようだ。

一九八八年刊行『別冊太陽スペシャル 天皇一二四代』(平凡社)には歴代全天皇の肖像が掲載されている。

江戸時代最初の天皇は第一〇七代の後陽成天皇だが、『天皇一二四代』掲載の泉涌寺所蔵の後陽成天皇の肖像ではクチヒゲとアゴヒゲが伸びている。

そのつぎの第一〇八代後水尾上皇(天皇)は宮内庁、清和院、林休寺、泉涌寺の四枚の肖像が掲載しており、讓位出家して上皇になったあとの肖像だからヒゲも頭髪もない。

後水尾上皇のヒゲも頭髪もない姿が前例になって、とはいえないわけだが、それから一二一代孝明天皇にいたるまで、ヒゲを生やした天皇の肖像は『天皇一二四代』ではみられない(一〇九代明正女帝、一一七代後桜町女帝、法体の一一二代靈元上皇は別とする)

『天皇一二四代』の江戸時代の天皇の肖像は、後水尾天皇をのぞいてはすべて京都の泉涌寺所蔵のものと説明されている。皇室の香華院とされ、皇室と縁の深い泉涌寺が天皇のヒゲについて誤った印象をもち、肖像としてのことすことはありえないだろうから、事実はこのとおりだったろう。

ほかの時代の天皇はどうだったのか。

『天皇一二四代』には泉涌寺所蔵のほか、早稲田大学図書館が所蔵する石版の『歴代尊影』、狩野探幽の『百

人一首画帖』、東大寺や延暦寺など諸社寺が所蔵する肖像が掲載されている。

第一代の神武天皇はヒゲを生やしていた。媛靖、安寧、懿徳、孝昭とずーっとヒゲを伸ばしていたが、第二十四代の仁賢天皇の肖像にはヒゲがない。

このころの天皇は生没や在位の年がわからない。仁賢天皇の肖像は少年の印象が強く、ヒゲが生える年齢に達していなかったようだ。

第五十六代の清和天皇が即位したのは九歳だからヒゲはなかったろうが、譲位したのは二十七歳だからヒゲが生えて伸びる年齢には達していた。ヒゲはあったけれども、ヒゲ姿の肖像がのこらなかつたのか。

ヒゲを蓄えるか、剃るか——後水尾上皇が境界となつたのではないか。後光明天皇から孝明天皇までは後水尾上皇を模範としてヒゲを剃つたように思われる。

明治天皇はヒゲを蓄えた。

明治天皇はヒゲを生やすのが好きだったのだ——そういうふうには個人の好みとしてかたづけずむはなしではないだろう。

明治の皇室に、なにか、あつたのだ。後陽成天皇のヒゲに復帰するぞ——そういう強い明治天皇の意思があつたのではないか。

(02) 剃刀が意欲的になつた

明治の世にスサノオノミコトが登場すると仮定して、ミコトがいちばん驚くのは、軽くて切れ味がよく、さほど高価でもない剃刀が大量につくられ、買われる風潮だ。

——こりゃ便利だ。顔に傷をつけるおそれがすくないのも、いい。わしなんか十拳剣一本でずーっとヒゲ剃りをやってきて不都合はないのに、ヒゲ剃りにしか役に立

たん刃物がこんなにたくさん出まわっているのはムダじゃないか？

ムダか、どうか、をきめるのは有効性の多少だ。太刀をつくって売り、使って生きる人間と、剃刀をつくり、売り、使って生きる人間と、どちらが多いか——剃刀である。

そもそも、太刀と剃刀の有効性は比較にならない。

太刀の製造販売業はそれほど多くの人間を必要としないうえに、太刀を使って なにごとかをやるチャンスはほとんどない。

戦場で主役をつとめるのは弓と矢であって、太刀はほとんど役に立たない。

斬首刑の執行は なにごとか ではあるが、現代にかぎっていえば、斬首執行のチャンスはゼロ、執行関係者もゼロ。

剃刀はちがう。

理髪店の数は多く、剃刀の需要は歴大、剃刀の製造販売関係業界は歴大な数の職人をかかえる。個人の需要もなかなかのもの。

太刀はムダだが、剃刀はムダではない。

明治の世にムダを宣告された太刀は古美術商の店先に陳列されるか、元武士の屋敷の押し入れにおさまり、姿が消えた。

太刀の衰退と入れ替わって剃刀が活発になったのが明治の時代だ。ヒゲを剃らない——ヒゲを生やす——男が増えたのが明治の世である。それなのに剃刀が活発になるのはおかしいじゃないかと批判されそうだから、剃刀が意欲的になったと言い換えよう。

明治までは、ただもうヒゲを剃るだけ、剃りさえすればいいんだろうと自棄の気分でヒゲを剃っていた剃刀が、

明治になると、体毛としてのヒゲ、装飾行為としてのヒゲ剃りの意味をかんがえながらヒゲを剃るようになった。剃るヒゲの本数が減ったのはまちがいないが、そのかわりに、頭脳を使ってヒゲを剃るようになった。

(03) 外国人のヒゲ

剃刀が頭を使ってヒゲを剃るようになったきっかけ、それは外国人のヒゲである。

幕末にやってきた外国人は黒々としたヒゲで日本人を威圧した。

「北亞墨利加大合衆国人上官」の肩書で瓦版に紹介される「アーダムス」はクチヒゲとアゴヒゲがもじゃもじゃ、「欽差全権国三使節 海軍水師 提督」の肩書の「まつちう・せへるり」も、もじゃもじゃのヒゲ、眉毛も瞳るり」はマチュウ・ガルブレイス・ペリーだ。

ペリーにおくれてやってきたロシアのプチャーチンもアゴの先まで伸びたクチヒゲで長崎人をおどろかせた。

長崎のひとはオランダ人をみなれているが、オランダ人のヒゲよりもロシア人のヒゲのほうが印象は強烈だったらしい(『かわら版・新聞 江戸・明治三百事件Ⅱ』平凡社)

今日はアメリカ、明日はロシア、相手を変えて交渉しているうちに、幕府の外交担当者は国によってヒゲのかわりが違うのに気づいた。

ヒゲについて、日本人があれこれとかんがえはじめたのは幕末だ。

江戸時代までのヒゲは、いってみれば、ただのヒゲだ。明治からこっちのヒゲは、あれこれとかんがえさせられる、いってみれば、思考という手間がかかるヒゲであ

る。

江戸時代にも、たとえば柳沢淇園のように、ヒゲをか  
んがえるひとがないではなかったが、(『独寝』)あれ  
はまあ、

——ヒゲの有無の是非をいうなら、ヒゲはないほうがい  
い。

二者択一の対応にすぎないのであり、思考をめぐらせ  
るレベルではない。

ヒゲについて思考をめぐらせるなら、ヒゲがナイなら  
ナイでかんがえなければならぬわけだし、ヒゲがアルな  
らアルで頭を使わなければならない。

身分やしきたりではなく、特定個人のヒゲという切羽  
つまった関係のなかでヒゲをかんがえるのが、とりあえ  
ずは ヒゲに関する思考 の語に値する。

#### (04) 明治のヒゲ

明治天皇はヒゲを蓄えた。

外国人のもじやもじやヒゲに威圧された日本人は、天  
皇がヒゲを伸ばしたのを知って力強いものを感じたはず  
だ。

天皇がヒゲを生やしたから、天皇の、すぐ下の階層、  
つまり官員がヒゲを生やした。

官員がヒゲを生やしてはばをきかせた世相のなかにあ  
るものを、明治・大正・昭和の三代を生きた詩人の金子  
光晴はするどく描写した。

明治という時代は「ヒゲさん」がはばをきかした  
時代だ。

官員は、ふとい口ひげをはやし、そのひげの先を、  
こよりをつくるような手つきでひねりながら、金時

計のふとい鎖を兵児帯（へこおび）にからませ、ス  
テッキをふり、当世を眼下に見下ろして、ゆうぜん  
と漫歩していた。（略）

大臣から巡査まで、新政府の役人たち、それに軍  
人たちが、威を張るために、ひげは、なかなか有用  
なものであった。つまり、ひげによって尊厳をつく  
り、おちつきをたもち、下僚、または人民にたいし  
て、にらみをきかせるうへの助けをえたわけである。

（金子光晴『絶望の精神史 体験した「明治百年」  
の悲惨と残酷』 『金子光晴全集 第十二巻』中  
央公論社）

金子光晴はヒゲを生やさなかった。

もう死んでしまったが、かれのエッセイを読めば、ほ  
くは知恵を得る。

知恵を欲しいときにかれのエッセイを読む。

弱いものが、弱いなりに生きてゆける秘訣、知恵とい  
ったものを、わたしはかれのエッセイからふんだんに得  
た。

明治のヒゲについて、金子は、強いもの、強くなりた  
いものが生やしたのだと読みとった。

そして自分は、強くなりたいためにヒゲを生やさなか  
った。ヒゲを生やせば、強くなりたい衝動に負けてしま  
うのを知っていたからだ。

諸藩の武士たちのうちに、東京に出て巡査を志願  
する者が多かった。その巡査が、おなじく生活の方  
途を失った武士あがりの腕におぼえのある強盗と、  
深夜の浜町河岸のあたりで血みどろの勝負をする光  
景が、雑誌「人情世界」にのっていたのを、土蔵の  
すみからひっぱり出して読んだ、子どものときの記



憶がある。切られる巡查も、切る強盗も、りっぱなひげを生やしていた。（『絶望の精神史 体験した「明治百年」の悲惨と残酷』）

ひげについての社会的な強制——生やすべしとする強制、剃るべしとする強制——は江戸に比べれば明治はゆるやかだった。史上空前の強制緩和といつていい。

それだけに、ヒゲを生やすか生やさないかの選択は個人の意思にまかせられ、選択にかかわる責任がきびしく問われた。

——おまえはヒゲを剃る、なぜか？

——おまえはヒゲを剃らない、なぜか？

金子光晴は、いう。

僕が物心ついた明治三十年代になると、ひげは、上流の商人や、大学教授や、とかく社会の上位の人の飾りだけではなく、しだいに一般人の好みに沿って、くず屋さんや日雇いの人足でも、りっぱなひげをもつようになった。

僕の義父なども、仕事で台湾におもむくとき、わざわざあごひげを伸ばして出かけた。ひげがないと、にらみがきかず、仕事の能率にも影響するという理由からであった。

明治までは、ヒゲの有無に影響される尊厳を持たなかった階層のものが、明治のなかごろから、ヒゲを生やすべきか、剃るべきかで頭を悩ますようになった。これはなかなか深刻な事態だ。

ヒゲを生やすか、剃るか、個人の決意と責任がきびしく問われる時代が明治の後半からしばらくつづいた。

明治の官員の最高峰に位置したひとりが薩摩出身の大久保利通である。

版画家の小林清親が描いた大久保の肖像画の、左右に太く長くピーンと伸ばしたクチヒゲは威圧感たっぷり、これ以上のヒゲはないといたくなる逸物だ。

もちろん、悪口をいう気ならばいくらでも手はある。

「威圧感のほかにはなにもないじゃないか」など。

大久保は、いつからヒゲを伸ばしたか？

明治四年（一八七一）に参議をやめて大蔵卿となり、欧米派遣全権副使としてアメリカからヨーロッパにわたった。正使は岩倉具視である。

アメリカのグラント大統領と会見し、いちど東京にもどり、再渡米してヨーロッパにわたり、明治六年四月、帰国途中に立ち寄ったパリでヨーロッパ在住の鹿児島県人と記念撮影をしたとき、大久保はすでにヒゲを伸ばしていた。

明治天皇の歌道の師、枢密顧問になる高崎正風もこの写真ではヒゲを生やして写っている。ほかの出席者はヒゲを伸ばしていない。（勝田孫弥『大久保利通傳』）

大久保は渡米前後にはもうヒゲを伸ばしていたらしい。明治五年二月十五日づけ、西郷隆盛から大久保にとどいた書簡の末尾に、つぎの言葉があつた。

尚々、貴兄の写真がとどきました。まことに醜く写っています。もう写真を撮るのはおやめになることです。お気の毒千万でした。（『西郷隆盛全集』

意訳）

明治五年二月の書簡だから、「貴兄の写真」は明治六年四月、パリで在仏鹿児島県人といっしょに写した写真

とは別のものだろう。大久保の容貌に格別の異常がなければ、たとえ反語でも、「醜い」などとは書かないはずだ。

大久保の写真をみて西郷は愉快的気分になったにちがいない。愉快的気分の原因は大久保のヒゲづらだ。

欧米にゆくときまったとき、大久保の頭をよぎったのは幕末に出逢った外国人のヒゲの威圧の記憶だった。欧米へゆくのはヒゲの海にとびこむようなもの、負けるものかと決意してヒゲを伸ばした。

誕生したばかり、脆弱な明治政府の官僚でなければ大久保はヒゲを伸ばさなかつたはずだ。負けるものかと意地を張る必要はないのだから。

(05) 白髪ゆえのウソ

ヒゲがないよりも、あるほうが、気を使って疲れる。

ヒゲを剃る習慣から抜け出てヒゲを生やすまでの苦労もなかなかのものだが、ヒゲが伸びれば伸びたで新しい気苦労がはじまる。

頭髪とおなじで、ヒゲも、加齢にともなう白化現象から逃れられない。

佐々木邦の小説『親鳥子鳥』の主人公浩二は、おじいさんのヒゲが気になって仕方がない。ヒゲではなく、ヒゲである。

つい先日、級友の渡辺章三のお父さんが学校に来て、お父さんのヒゲ頭が同級生の嘲笑の的になった。章三のお父さんよりもっとヒゲているおじいさんが来たら、孫の自分が笑い物になるにきまつているとおもってから、浩二は気が気ではない。

おじいさんは陸軍の退役軍人、暮友たちの荒川さんは海軍の退役軍人、どちらも日露戦争を経験、暮盤を挟ん

で対決したあとはかならず老齡とハゲが話題になる。

おじいさんはハゲている、荒川さんには髪の毛がある。髪の毛があるといっても白髪だが、その白髪があるばかりに、若いときからどんなにウソをついたかしのれないと、荒川さんが告白をはじめ。

「この白髪のために私は若いときから何（ど）れくらい嘘をついたか知りません」

「しかし、初めてお目にかかった折は漆黑でしたよ」

「いや、それです。染めていたのです。あの折はあなたも一杯食わされたのですよ」

と荒川さんはニコニコした。

「然（そ）うですか。ペテンのお上手なのは暮ばかりじゃないんですね」

「恐れ入ります。しかしあなたは例の国境問題に頭を悩ましていられた文（だけ）に、あの折、私の髪に目をつけましたよ。『羨ましいですな、あなたは』と仰有（おっしゃ）いました」

— 204 —

ハゲると頭と顔の区別がなくなつて、顔を洗うときに困る——しっさいにそんなことはないんだが——これが浩二のおじいさんの「国境問題」。

「然うでしたかな、能くおぼえません」

「それから髪の毛の養生法までお訊きになりましたよ。私は何と答えたか覚えていませんが、恐らくは口から出任せのことを伝授したでしょう。まさか、これは染めているのですとも言えませんからね」

荒川さんはクチヒゲを生やしていた。もちろん、ヒゲ

も真つ白。白髪と白髭を黒く染めて若く見せていたのを、荒川さんはみずから「悪事」であつたと告白する。

さて、荒川さんの「悪事」が露頭する瞬間がやってきた。

チブスに罹つた荒川さんは隔離病棟で二ヶ月ばかりすごしたが、担当軍医が「大佐殿の症状には不思議なところがある」と言い出した。

「高熱の加減でしようか、髪と髭がその通り針鼠（はりねずみ）になりました上に、頬髭（ほほひげ）だけは悉皆（すつかり）色素を失つて真つ白ですよ」

針鼠の頭と背には針のような鋭い毛があつて、強敵から身をまもる。針毛の色は黒―白―黒のだから模様だ。病気ががりの荒川さんの頭髪とクチヒゲは先端が黒いのに、根本が白い、つまり針鼠、そこであつさり「悪事露頭」となつた。

「私は初めて気がつきました。染めていた下から白いのが生えて来たのです。頬は剃っていたから自然のままに白髭が伸びたのです。人間、嘘をつくのは宜しくないと思つて、私は『何あに、これはいままで染めていたのだ』と正直なところを打ち明けました。『然うでしたか。それで安心いたしました。実は、臨床医典を調べてみましたが、髪の毛が針鼠になるといふ徴候は何んな病気にもありませんから、困っていたのです』と、この軍医も正直者でした」

病み上がり最初の散髪で自然のままの白髪白髭となつたところ、見舞いの客が来た。「高熱のために、このとお

り白くなつた」と嘘をいうと、「艦長殿はチブスで悉皆白くなられた」と信用してくれた。これが嘘のつき納めでしたろうねと荒川さんは述懐する。

嘘をつくのは悪いときめつけられるものではないが、嘘をつく本人の気持は楽ではない。

ヒゲやハゲのためなら嘘をつくのもやむをえない、ヒゲやハゲはそれくらい深刻なものだといった気分が醸成されたのは明治時代であり、明治以前ではない。威厳を張る道具としてヒゲが有用なものになつた、それが明治なのだ。

(06) 山崎愛国堂の「毛生液」

女にもヒゲが生える――

ばかげた噂のようにきこえるが、女にヒゲが生える光景を想像するのは楽しくないこともない――そんな雰囲気が出てきたのも明治になつてからだ。

明治以前、女のヒゲはめつたにない、稀有な現象の典型だ。この風潮の前提は、男性は女性にたいして永遠に優位であるという原則だ。女にもヒゲが生えるとなると、男性絶対優位の原則はたちまち崩壊する。

ヒゲが生えるから男性は女性にたいして絶対に優位である――このタブーに挑戦した――のか、どうか、わからないが――のが「毛生液(もうせいえき)」の発売元、東京日本橋区馬喰町二丁目の山崎愛国堂だ。

明治三十年代の前半、愛国堂は「女のヒゲ」をメイン・イメージとする衝撃的な新聞広告作戦を展開、「毛生液」を売って売って売りにまくつた(『医薬・化粧品 新聞広告美術大系 明治篇』)

「禿抜毛、薄毛、生際悪き人は毛生液を試みあれ」

これがキャッチ・コピーの本文、サブ・コピーが「女のヒゲ」を強調する。

「近頃世上に名高き毛はい薬、愛国堂謹製毛生液の効験には驚きました。試みに夫人の鼻下へチヨイト塗ったら、あんな美毛が発生しました」

そしてイラストレーション——島田鬚の女の鼻の下から右アゴのあたりまで、くつきりと長いヒゲが伸び、女の右の人指し指が「これをご覧」といわんばかりにヒゲを指している。

つづいてサブ・コピー二番手。

「本剤は第一、毛を生やし、ぬけ毛を止め、髪の毛はえきわ、眉毛、ヒゲ等の薄きを厚く生じ、皮膚病、やけど、でき物跡、はげ、その他、有るべき所に毛なきに用いて毛生えること、請合也」

イラストレーション、コピーは数種類つくられていた。上半身が裸、洗った髪の毛を乾かしている女の唇の右に、例によって黒々と太いヒゲ、コピーはつぎのとおり。

「いろ黒く艶麗（うるわ）しき美人となり、こんな房々したいい生際頭の毛となりましたも近頃世に名高き愛国堂製毛生液を用いた効験の御蔭で真に不思議の奇薬には驚きましたが、余りの嬉しさに、物は試しと鼻下へチヨイト塗りしに、こんな黒いヒゲが生えました」

ヒゲの女が目をつぶっているのもある、目をひらいているのもある。

(07) ヒゲをめぐる優劣

優位者のしるしとしてヒゲを生やす男は、それだけでは満足できない。ヒゲが生えない女は、ヒゲが生える男を嫉妬するにきまつているとの幻想を抱く。

幻想はふくらみ、女は、女にたいする男の未練を逆手にとつて男にヒゲを生やさせまいと、あれこれ策を弄するにちがいないと結論する。

佐々木邦の小説『夫婦者と独身者』の主人公の木村は上級学校の教師、独身で、妹の貞子に世話されて暮らしている。貞子も独身。貞子は、あたしが世話しなければお兄さんは暮らしていけないと思ひこみ、兄はそれがわずらわしく、反撥の気持が「女は男にヒゲを剃らせたい本能をもっている」との見解になる。

兄の入浴の準備を、妹が世話する。浴室に剃刀と石鹸を出しておいたが、兄は面倒くさがつてヒゲを剃らない。

「張り合いのない人ね。お風呂場へ剃刀を出しておきましたのに」

「自殺をしろと言うのかい？」

「そんな縁起でもないことを仰有（おっしゃ）るものじゃございませんよ。お髯が伸びていらっしやるじゃありませんか」

と妹は何処（どこ）までも苦情らしい。

「日本ではお前達が無勢力だからこれで沢山（たくさん）さん」

と私は常になく三四日溜めてしまった不精髯を撫でて見せて、「西洋の婦人は男に髯を剃らせる文で



もお前達よりか豪い」

男にヒゲを剃らせる女の意欲は日本より西洋が強いと木村はおもっている。それが「お前達は無勢力」の発言となる。西洋ならともかく、日本の女のヒゲ剃り強制なんかに負けるものかと意地を張っている。

女中が誤解し、「西洋では女も髯を生やしているのですか」と質問したのを兄は受けて、「然うさ」とからかい、妹は「嘘ですよ」と真面目に訂正して、

「彼方（あちら）では男の方は髯を溜めては女の前に出られないのです。それだから女が否応なしに男に髯を剃らせることになるのよ」

木村家のおとなりは上田家、上田と木村は暮敵のつきあい。  
妹の期待、強制に反抗してヒゲを剃らぬまま、今日も

木村は暮を打ちに上田家の客となる。

上田家には客がいた。親戚の若い女性、愛子である。愛子を紹介され、世間話をするうちに木村はヒゲを剃らずに客となったのを反省、後悔する。自分の意識が愛子から逸れない、気に入ったのだ。どうやら上田家では、木村と愛子さんの見合い話が計画されていたらしい気配だ。

それから小時（しばらく）話が途絶えた。手持ち無沙汰の余り、不図（ふと）顎を撫でると不精髯がザラツと騒音を発した。尚お恐る々々頬の方へ遡ってみたが、先刻家を出てから又伸びたような感があった。こんなことなら綺麗に剃って出てくるんだっ

たのにと今更（いまさら）悔やんでも仕方がない。

上田夫人と愛子さんは別室へさがり、暮の戦いがはじま  
まったが――

斯ういう巡りあわせの悪い日には暮を打つても勝てる筈がない。行き詰まって顎を撫でる度に髻が気になる。あの石を押ししておけば宜かったと思い、この髻を剃って来れば宜かとも思つて、

「何（ど）うもしまつたことをした」

と呟く。盤面と顔面の両方に気を取られる、兎角しどろもどろになる。一度襖が明いて珈琲茶碗が膝元へ来たと覺つた時には両手で頬を押さえながら思案に余念のない風を装つて、

「君、齒でも痛むのじゃないかい？」

と上田君に怪しまれた。

「否、齒どころか、生死の境だ」

つぎの日、こんどは愛子さんが妹を訪ねてくると知り、木村は狼狽する。狼狽の原因はもちろん、ヒゲだ。

「貞子や」

「何でございますの？」

「あ、まあ宜いや」

と私は頬から顎を撫でまわしながら躊躇した。いつも髻を剃る時には大威張りで貞子に支度を命じるのだが、愛子さんが見えるという注進を受けた直後には何うも気が映（さ）してそれが出来なかつたのである。殊に昨日は、西洋の男は薄のろだから女の手前、毎日のように髻を剃るが、我輩に於いてはそ

んな必要は絶対はないと豪語している。考えてみれば、余計なことを言ったものだ。

木村の暮らしのなかに、ヒゲについての確固とした姿勢はない。ない代わりに、日本の女と西洋の男にたいする優越感がある。優越感より、優越願望というのが適切か。

だが木村は、自分のなかの優越願望を実感していない。だから木村のヒゲは、愛子さんの出現に翻弄される欲望を調整する道具となりさがった。

ヒゲは、なにごとかをおこなうための道具ではない。剃るか、剃らないのか、決定された意思のしるしがヒゲなのだ。

(08) 女のヒゲ

山崎愛国堂の 女のヒゲ キャンペーンはすくなくとも大正元年(一九一二)まではおこなわれていたのが『新聞広告美術大系 大正篇』で確認される。大正末期、十二年の関東大震災まではつづいていたと推測していいだろう。

佐々木邦の小説『夫婦者と独身者』は大正十三年に雑誌「主婦之友」に連載され、昭和六年(一九三一)に講談社版『佐々木邦全集』におさめられた。

『夫婦者と独身者』の登場人物は当時の言葉でいえば、全員がインテリ階層だ。インテリだから新聞を読む、新聞を読めば愛国堂の ヒゲ女 広告が否応なしに目にとびこんでくる。

——女のクチヒゲ——なるほどなあ、絶対はないとはいえないんじゃないのかな。

その後の佐々木邦作品の男の主人公は 女のヒゲ に

ついで鈍感ではいられない宿命を背負って登場する。

昭和九年（一九三四）八月、雑誌「日の出」に短編『変人伝』が掲載された。

主人公の「僕」が母に叱られるときの決まり文句。

「勉強しないと、東京の叔父さんのところへやっつてしまいますよ！」 叔父さんの名は孝太郎、父の弟で高等学校（旧制）の教授、いまに博士になると期待されているが、独身、「僕」の家では「変人」の評価が定着している。

叔父さんは変人だから独身である——これは一応、理屈が通っている。変人の叔父さんのところへ追放するぞと脅せば「僕」は驚いて勉強すると母はかんがえている。母も父も叔父さんを結婚させねばならんと思っているが、その反面、変人だから結婚しないかもしれぬと案じている。

父の勤める女学校に、三十を越しても独身の女性教師がいる。結婚しないと決心しているわけでもなさそうだと見当をつけた父、女性教師の写真と、長文の結婚推薦文書を同封して叔父さんに送った。返答がない、もういちど推薦の書簡を送ると、叔父さんから封書がとどいた。

手触りで、写真がはいっているのがわかる。

——見合いをしたい、こちらの写真を送るから先方に見せてもらいたい。

そういうことだと思いこんで開封した。

「とうとう落城したぜ」

と言って父が開けてみたら、此方（こっち）から送った写真だった。而（しか）もインキでヒゲが書き入れてあった。父は怒ってしまった。

「おれはもう孝太郎さんとは付き合わない」

山崎愛国堂の「毛生液」の効能のほどはわからないが、女のヒゲ 広告の効き目は絶大だったにちがいない。

(09) 『カンタベリー物語』のヒゲ

女のヒゲ が注目されたのは日本にかぎったことではなく、近代に特有のことでもない。

日本では朝廷が南北にわかれて対立、拮抗していたころ、イギリスのロンドンでも 女のヒゲ について思索し、思索の結果を小説のかたちで世に出したひとがいる。ジエフリイ・チヨースー、詩人、ロンドン市民、男性、一三四〇年前後に生まれ、一四〇〇年に没した。

エドワード七世、リチャード二世、ヘンリー四世に仕えた宮廷人または公務員ジエフリイ・チヨースーなる人物の存在が明らかになっており、詩人チヨースーと宮廷人チヨースーとは同一人物と推定されている。

チヨースーが晩年、ウエストミンスター寺院の境内に借りた小さな家で書きつづけ、かれの死によって惜しくも未完成となった長編小説、それが『カンタベリー物語』である。(榊井迪夫・訳 岩波文庫『カンタベリー物語』上巻解説「チヨースーについて」)。カンタベリー大聖堂はロンドンの南東百キロメートルにあり、イギリス諸州からおびただしい数の巡礼者があつまる。ロンドンからカンタベリーへの道中、最初の宿場サザークの「陣羽織屋」と称する旅籠が物語の舞台となる。

二十九人もの巡礼者が陣羽織屋の客となった。階級も職業も、出身地もさまざまな二十九人、各人それぞれの見聞、体験を話し、聴いて大きな物語絵巻ができあがる。それが『カンタベリー物語』だ。 たくさんのヒゲが登

場する。まるで、ヒゲをテーマとする公開討論会でもあるかのように。

ふたまた髭をつけた貿易商人がありました。まだらの衣服をつけ、馬上高く座していました。頭にはフランドル製の毛皮帽がのっており、長靴はとても優美に留め金で結んでありました。

（「総序の歌」）

彼は首が太く、肩幅が広くてずんぐりして、筋骨たくましい男でした。どんな戸でも、彼が一走り頭からぶつつけて蝶番をはずしたり、こわしたりできないものはありませんでした。彼の髭は雌豚か狐の毛のように赤くなっていました。（「総序の歌」）

この男は情熱的で雀のように好色でした。かさぶたのいっばいできた黒い眉毛で、頬髭はほとんど抜け落ちていました。子供たちは彼の顔をとて怖がりしました。（「総序の歌」）

彼は山羊のように小さい声をしていました。髭は生やしていませんでした。これからも生やすことはないでしょう。それはまるで今さつき剃られたばかりのようにつるつるしていました。

（「総序の歌」）

さて、皆様はその場所にバラモンとともにやって来たトラキアのかの偉大な王、リクルグスその人を見られるでしょう。その髭は黒く、男らしい顔をしていました。（「騎士の物語」）

(10) 彼は女にはヒゲがないのを知っていたから――

「騎士の物語」のつぎの章が「粉屋の話」、馬にちゃんと乗れないほど深酒の粉屋が頭巾も帽子も脱がぬまま、「キリスト様の両腕にかけて」と誓い、「騎士殿の話にまけないような気高い話」を語りはじめる。

オックスフォードに金持ちの大工ジョンが住んでいた。ジョンの家に大学生ニコラスが下宿していた。ニコラスは秘めた恋や、恋の楽しみを心得ていたから、シャレ者ニコラスの異名があつた。

大工は美女アスリーンを妻にむかえたばかりである。話し手の粉屋はアスリーンの美しさ、愛らしさを言葉を尽くして褒めたたえる。

この若い細君は美しく、その上、身体は黝のようにほつそりとして優美で、縦縞の絹の帯をつけていました。また、朝の牛乳のように白い、まぢのいっばいはいったエプロンを腰に着けていました。下着は白くて、襟のところには真つ黒い絹で、前も後も、また内も外も刺繍がほどこされていました。……この広い世間をあちこち探してみても、この細君ほど陽気な愛すべき若い女や、こんなに色っぽい女を想像できるお偉い人はどこにもいないでしょう。

大工の留守のあいだに、しゃれ者ニコラスはアリスーンに言い寄り、アリスーンが受け入れ、ふたりは恋仲。ここにもうひとりの若者が登場するから、ヒゲをめぐる悲喜劇が生まれる。若者は教会の教区書記のアブサロンといい、美貌と才智を誇っていた。

髪はカールしていて、金のように輝いていました。そして大きく広い扇のように広がっていました。しゃれた髪に分けかたをし、まっすぐな線で平べったくしてありました。顔色は赤くて、鷺鳥のようなくす青い目をしていました。靴の甲には聖ポール寺院の窓が飾りに彫ってあり、赤いタイツをはいて、いとも優美な格好をしていました。彼がうす青のチュニツクにすっかり身を包んだ、その着こなしは身体にぴったりと合い、格好のいいものでした。それには美しいレースが沢山つけられており、その上に小枝の上の花のように、白い派手な法衣を着ておりました。たしかに、この男は愉快な若者でした。彼は血を抜いたり、髪を刈ったり、髭を剃ったりするのが上手でしたし、土地売買や土地譲渡の許可状も作ることができました。彼は当時のオックスフォード流の軽快なダンスを二十種類も踊ることができました。

これくらい才能ゆたかな青年である、アップサロンがアリスーンに言い寄って陥落させるのはわけもないはずだったが、案に相違し、アップサロンが手を替え品を替えて迫ってもアリスーンは受けない。

アリスーンはニコラスだけを愛している。それについて粉屋は「いつも近くの上手者が遠くの恋人を嫌悪させる」との諺は真実を伝えていると解説する。

アリスーンとニコラスはふたりだけの夜をすごしたいと思ひ、目も見えない耳もきこえない仕掛けの部屋をつくり、大工を閉じこめることに成功した。

アップサロンはそれを、大工が遠くへ行って自宅を留守にしていると誤解した。今夜こそ、せめてキスだけでも



と意気こんでおしかけたアブサロンを、ニコラスとアリスーンはいたずらごころたつぷりの企みで翻弄する。

窓の下から、アブサロンが悲痛の想いをうちあけると、アリスーンが悪魔も顔負けの応対をする。

「あっちへ行きなさい、ジャックのお馬鹿さん。神様、どうかお助けくださいまし。『キスしておくれ』のようなわけにはいかないわ。わたしやほかにいい人がいるんだよ……もしなけりゃ私が悪いんだよ……あんたよりもっといい愛人がねえ。アブサロン、キリスト様にかけて、ほんとうだよ。さあ、あっちへ行きなさい。でないと石を投げるわよ。わたしを休ませてちょうだい。えい、悪魔に連れて行かれなさい」

（「ジャックのお馬鹿さん」は特定のジャックを罵倒する語ではない、罵倒の常套語——訳注による）

「ああ、なんと悲しいことだろう」とアブサロンは言いました。「ほんとうの愛がいつもこんなに悪い目に遇うなんて。わたしにキスしておくれ。それ以上いいことは何も望めそうにないんだもの。イエス様の愛にかけて、また私の愛のためにもな」

「それじゃ、キスすればあっちに行くんだね」と彼女は言いました。「そうだとも、きつとだ。ねえ、いい人」とアブサロンは言いました。「それじゃ用意なさい。すぐ行くから」。そしてニコラスにこっそりと「さ、静かに。腹いっぱい笑わせてあげるから」と彼女は言いました。

アリスーンは窓をあけ、「早く、早く」とアブサロンを急かす。「隣の人がお前さんを見つけるといけないか

らね」と。

アブサロンはからからになるまでよく口を拭きました。夜の暗いことと叫びたら、瀝青（ピッチ）や石炭みたいでした。そして窓のところから外へ、彼女は自分の穴をさし出しました。アブサロンは——つまり、よくもわるくも、こんなことが起ったんです——彼の口でもって彼女の糸まとわぬそこに接吻しました。さもうまそうに。それははっと気がつく前のことでした。ぎよっとして彼はあどずさりしました。そしてこれはなにかのまちがいだと思いました。だって女には髭がないということを知っていましたから。彼は何かこわごわした長い毛のあるものに触れたと思いました。そして言いました。「えい、こん畜生。ああ、わたしやなにをしたんだろう」

アブサロンは鍛冶屋へ走って鋤（すき）の刃を借り、ニコラスとアリスーンの笑う声がきこえる窓の下へ取って返す。

ニコラスが窓の外へ突き出した尻の穴へアブサロンが鋤の刃をぶちこみ、ニコラスが悲鳴をあげ——てんやわんやの騒ぎの一部始終が語られて「粉屋の話」の章が終る。

（11）「うちの女房にや髭がある」

漫画家の和田邦坊、本名は和田邦夫、明治三十年（一八九九）に香川県で生まれた。

高松中学校を中退して東京に出、本郷絵画研究所でまなび、プラトンの雑誌「女性」「苦楽」を編修した。

大正十五年（一九二六）、二十七歳で東京日々新聞に入社、漫画漫文を書いて注目され、人生の機微をユーモラスに描く作家のスタートをきった。

小説家の佐々木邦と同世代だ。昭和六年（一九三一）に講談社から刊行される『佐々木邦全集』の挿絵は和田邦坊の作品だ。

邦坊は平成四年（一九九二）に故郷の香川県綾南町で没したが、「成金時代」のタイトルがつく一枚の漫画によつて現代にも通じる漫画家だ。

成金が高級料亭の玄関から出ようとしている。女中が成金の靴を探すが、照明が暗いので靴がみつからない。すると成金、ふところから出した百円札にタバコの火をつけて燃やし、

「どうだ、明るくなつたらう」

これが和田邦坊の作品。第一次大戦の戦争景気でボロ儲けした成金の生態を描いた歴史を証言する作品として、いまでもしばしば引用される。

漫画漫文のほかに小説も書いた。雑誌「婦女界」に連載、「その頃では途方もない原稿料」をかせぎ、昭和十一年（一九三六）に新曜社から単行本として出版されたのが『ウチの女房にや髭がある』だ。「可成（かな）り印税を稼いだ」と邦坊自身は回想する（『俺が女房にや髭がある』妙義出版）

（12）世田谷の農夫「東京音頭くん」の夫人

邦坊の 女のヒゲ はどこから発想されたのか？

全盛期のころ、邦坊は東京の世田谷の桜町、「人の怖がるような田圃（たんぼ）」の中の一軒家」に住んでいた。二階が仕事部屋。

雑誌記者に責め立てられて、一枚二枚と書いて行く。空っぽの頭からしぼり出すフィクションの難行苦行だ。あの時位（ときくらい）人生をあさましく思うたことはない。これは莫大な原稿料がはいるという当てがあるからだ」（『俺が女房にや髭がある』）

イヤだなあと思つて窓の下をみると、ほがらかに「東京音頭」を唄いながら耕作する若い農夫がいる。

ペンがすすまず、タバコをふかしてながめる邦坊を農夫は見上げて、ニヤツと笑う。邦坊は農夫に「東京音頭」とあだ名をつけて親近感をもった。

その「東京音頭」くんが「先生に相談したいことがある」といつてきた。小説を書くのがイヤでたまらない邦坊、待つてましたとばかりに招き入れ、二階にあげると、

「実は先生、一寸恥ずかしいことなんだけどもね  
.....」

と少しも恥ずかしくない顔で、話したところによると、

「今度貰った女房にね、あるものがねえですが。つまり、その、あるものが」

「あるものがね。本態はあるんだろう？ 本態は？」

「へえ、それはチャンとあるですが。ところが、そのまわりにねえですが」

「フーム、つまり、毛生薬が要するというわけだな」

「先生、アレ、新聞で見ましたが、効力があるものでがんでしょうか。この頃の広告は、肥料でもあんまり利かねえでがんですがのう。あれも、やっぱり肥料みたいなもんで.....」

「フン、じゃ、一度おれが試してみてもやるよ」

「うわッ、先生、試すって、どうするんだね、僕（おれ）が女房に滅多なことをされちゃ、たとえ先生でも許してはおけねえで……」

「いや、その薬の効力を試すんだよ」

「先生もあるところにねえだかね。人は見かけによらねえもんだ」

彼が妙なことをいって帰ったあと、僕は愉快になつてしまった。

邦坊の頭にあつたのは、そのころ盛んに新聞で宣伝していた毛生液の 女のヒゲ だ。講談社を通じて製薬会社の主人に会い、話しをきいた。

発毛はホルモンの関係で、家伝の毛生液はホルモンの刺激剤だという。「正直なところ、体質によつて効力に大きな差があることはご承知ねがいたい」ともいった。

そして、低い声で、「この薬を塗布すると同時に平手療法を併用すると甚だよく効く」というのである。掌の磁力によつて毛根に刺激を与えるとのことであつた。

邦坊から東京音頭に報告すると、

「平手療法はだれがやるんだね」

「おれがやってもいいよ」

「滅相もないこつた。そなこと位、おいらでもやるべい」

それから邦坊、二階の部屋で難行苦行がつづく。

ある日、東京音頭が田圃から大声で邦坊を呼ぶ。

「何だい、東京音頭」

と僕が手摺り越しに見降ろすと、音頭が嬉しそう

に、

「先生、生えましたが、生えましたが。ウチの女房の髭が生えましただ……」

という。

「ほう、髭が？」

「はア、チョッピリとね。で、昨夜から女房が威張りますだ、髭が生えた、髭が生えたと、はア、威張りますだ」

と、東京音頭自身威張っているように見える。

なるほど、これは面白い。

「ウチの女房にや髭がある」

僕の頭に思わず浮かんだ題名だった。

そうだな、あれからもう十五、六年にはなる。東

京音頭はどうしているだろう。

(13) 男女同権のシンボル 女のヒゲ

和田邦坊の小説『家の女房にやヒゲがある』のヒゲは、小説のモデル東京音頭くんのお嫁さんのヒゲほどには生々しくない。

軽井忠兵衛は新聞社所属の画家、妻の辰子とはときどき喧嘩、ときどき仲良しの、ふつうの夫婦。

ある日のこと、辰子が「お父さん」が「お父さんの先生」から教えられた 夫婦和合の秘訣 なるものを持ちだした。

「お父さんはね、始終（しじゅう）先生に恚（こ）ういわれたんですって、良人は女房にも髭があると、いうことを忘れなないでいれば、一家は何時も円満に行くんだって」

「そりゃ、一体どうということだい」

「つまりね、世の良人というものは大抵髭を生やして威張っているでしょう」

「僕は生やしてないよ」

「あなたは未だただけれど、これから生やすかも判らないじゃないの。ところでね、あれは一つの良人の優越感なんですって。だから女房を叱る時、髭を捻りながら叱るでしょう。女房には髭がないから、手のもっていきようが無いでしょう。自然豊の縁か何んか捻るようになるんですって」

「それで？」

「だから、こういう時、女房にも髭があると思うと、良人は自然に自分の髭を捻って威張らなくなる。つまり、女房と同等の権利を認めるということになって、一家は円満なんですって」

「フーム、妙な教え方だなア」

「何も妙なことは無いと思うわ。良人は髭を生やして威張らないで、女房にも髭がると思えということとなのよ」

「敬意を表せということかい」

「先づ、そうね」

「中々難しいね」

ここでいわれている 女のヒゲ は、実物のヒゲではなくて、教訓的、抽象的なヒゲである。

夫は男であるしるのヒゲを生やすものときめてかかっている、だがしかし、女性にたいする優越感を実感するためのヒゲならば許さん、ヒゲを捻って威張るな、これが辰子さんの意見。

男女同権論のシンボルとしてのヒゲである。男はほんもののヒゲ、女は想像のヒゲ、これで男女の同権が維持

される。

忠兵衛と辰子のあいだに、ちよつとした痴話喧嘩。

忠兵衛が懸命になだめ、ようやく辰子の怒りがおさま  
り、鏡台にむかつて化粧する辰子の顔を見ていた忠兵衛、

「おや、これは大発見」

「何よ」

「おい、もうすこしこっちを向いてみる」

「何んか付いてるの」

「ホホウ」

軽井君が眼を丸くして感心しながら、「いかにも  
女房となると髭が生えて来るもんだ。これは素晴ら  
しい髭だ」

と言って辰子さんの鼻の下を指した。

指が女の鼻の下を指せば、そこにはヒゲが生えている

——ここにも山崎愛国堂の毛生液の広告 女のヒゲの  
光景が出現する。

これを 女のヒゲ現象 と呼んでいいわけだが、女  
のヒゲ現象 は和田邦坊の『家の女房にや髭がある』だ  
けでは終らなかった。

(14) ヒットソング「うちの女房にや髭がある」

昭和十一年(一九三六)十一月、日活多摩川撮影所の  
映画「ウチの女房にや髭がある」が封切られた。『日本  
劇映画総目録』にデータと解説が掲載されている。(永

田哲朗監修 日外アソシエーツ)

監督千葉泰樹・原作和田邦坊・脚本笠原良三、俳優は  
杉狂児・星玲子・山本礼三郎・高木永二など。主題歌ウ  
チの女房にやヒゲがある」(杉狂児・美ち奴)「あゝそ



れなのに」(美ち奴)がともに大ヒット、50万枚。後者は「ねえ小唄」の始まりとなった。(資料によって「ウチの女房」と「うちの女房」の異同がある)

つぎの年の三月十七日、おなじ日活多摩川の映画「あゝそれなのに」が公開された。『日本劇映画総目録』のデータと解説はつぎのとおり。

監督千葉泰樹、脚本玉川映二、俳優杉狂児・星玲子・潮万太郎・山本礼三郎。歌謡映画「ウチの女房にやヒゲがある」の主題歌「あゝそれなのに」がヒットしたのにあやかって本映画をつくる。脚本の玉川映二は詩人サトウ・ハチロー(佐藤八郎)の別名。

誤解のおそれがあるから、順序を整理する。

和田邦坊の小説『家の女房にや髭がある』↓日活映画「ウチの女房にや髭がある」↓主題歌「ウチの女房にや髭がある」と「あゝそれなのに」↓日活映画「あゝそれなのに」、こういう順序だ。主題歌「ウチの女房にや髭がある」。「あゝそれなのに」の作詩は星野貞志、作曲は古賀政男、二作ともおなじ。

「ウチの女房にや髭がある」(二〜四は略)

何か言おうと 思っても

女房にやなんだか 言えません

そこでついつい うそを言う

(女) なんですあなた

(男) いや、別に、僕は、その、あの

(ふたり) パピプペパピプペ

パピプペボ

うちの女房にや髭がある

「あゝそれなのに」(二〜四は略)

空にや今日も アドバルーン

さぞかし会社で いまごろは

おいそがしいと 思うたに

ああそれなのに それなのに

ねえ おこるのは おこるのは

あつたりまえでしょう

(古茂田信男ほか『日本流行歌史 戦前編』社  
会思想社)

作詞の星野貞志は映画「あゝそれなのに」の脚本を書いた玉川映二、つまりサトウ・ハチローである。

ユーモア小説、随筆、歌謡などさまざまジャンルで活躍する有名詩人サトウ・ハチローが、なぜ、ペンネームを使ったのか？

主題歌「あゝそれなのに」は妻の歌である。妻がサラリーマンの夫を愛し、愛するゆえに夫を恨んで唄う愛の歌である。

いまごろは会社で忙しいと心配していたのに、じつは、若い女の事務員といちゃついているんじゃないか。

日が暮れば、もうすぐお帰りと思うのに、じつは同僚とカフェーかなんかに繰り込み、女給さんとじゃらじゃらしているんじゃないか——怒るのはあつたりまえでしょう！

夫を愛するあまりの嫉妬、妬みだが、夫からすれば反論のチャンスもあたえられないまま、一方的に妻の嫉妬の矢面に立たされてしまう。

そこで、夫から妻へのアンサー・ソングとして作られたのが「うちの女房にや髭がある」だった。

映画「うちの女房にや髭がある」で妻の役を演じ、「あゝそれなのに」と唄って夫を恨む妻を演じたのが星玲子だから、アンサー・ソング「うちの女房にや髭がある」

を唄うのは星玲子の夫の役どころだ。だからサトウ・ハチローは自分を「星の亭主」に見立て、星野貞志のペンネームで「うちの女房にゃ髭がある」の詞を書いた。（『日本流行歌史 戦前編』）

（第9章・終）

（『助六のヒゲ』大尾）